三重県埋蔵文化財調査報告１４６－３

曽祢崎遺跡（第２次）・曽祢崎古墳群

１９９７．３

三重県埋蔵文化財センター

3号墳埋蔵施設1（北から）

1号墳埋蔵施設（西から）

3号墳出土玉類

例　　言

1　本書は、下記の遺跡の発掘調査報告書である。

曽祢崎遺跡（第２次）・曽祢崎古墳群　　多気郡明和町上野字曽祢崎

角垣内遺跡　　多気郡明和町簑村字角垣内

2　本書は、平成８年度農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第３分冊である。

3　調査は、平成８年度に行った。調査の体制は以下の通りである。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第一課

＜曽祢崎遺跡（第２次）・曽祢崎古墳群＞　技師　西村美幸

主事　筒井正明

研修員　林　義巳

＜角垣内遺跡＞　係長　前川嘉宏

整理担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第一課・管理指導課

なお、曽祢崎古墳群の調査前の測量は、平成７年度に前川、西村および袖岡直樹、山田康弘の４名で行った。

4　執筆は曽祢崎遺跡（第２次）・曽祢崎古墳群を西村が、角垣内遺跡を前川が担当し、それぞれ目次に明記した。遺物の写真撮影は担当者が調査第一課職員の協力を得て行った。全体の編集は西村が行った。

5　調査にあたっては、明和町在住の各位、明和町教育委員会、および県農林水産部農地整備課、松阪農林事務所にご協力をいただいた。

また、曽祢崎遺跡・曽祢崎古墳群については、上村安生氏（斎宮歴史博物館）、大下明氏（雲雀丘学園中・高等学校）、奥義次氏（三重県立松阪高等学校）、北野博司氏（石川県教育委員会）、久保勝正氏（三重県立上野商業高等学校）、佐藤由紀男氏（浜松市博物館）、西山要一氏（奈良大学文学部）、芳賀陽氏（文化財保存全国協議会）、八賀晋氏（三重大学人文学部）にご教示をいただいた。また、鉄製品のレントゲン撮影にあたっては、奈良大学文学部文化財学科保存科学研究室のご協力を得た。記して感謝申し上げます。

6　曽祢崎古墳群の挿図の方位は、全て座標北で、角垣内遺跡の方位は真北で示している。なお、座標北の方位は真北に対し　西偏０°18′、磁北の方位は真北に対し西偏６°20′（平成３年度、国土地理院）である。

7　写真図版の遺物番号は遺物実測図の番号と対応している。写真図版は特に断りのない限り縮尺不同である。

8　当報告書での用語は、以下のとおり統一した。

つき・・・「坏」があるが、「杯」を用いた。

わん・・・「埦」・「碗」があるが、「椀」を用いた。

9　当報告書で用いた遺構番号は、通番となっている。（以下に言う pit を除く）また、番号の頭には、各遺構の性格により以下の略記号を付けた。

ＳＸ：墓　　ＳＨ：竪穴住居　　ＳＢ：掘立柱建物

ＳＤ：溝　　ＳＫ：土坑　　pit ：柱穴、小穴

10　当報告書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターに保管している。

11　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

曽祢崎遺跡（第２次）・曽祢崎古墳群 …… 1
Ⅰ　前言……（西村）… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境……（西村）… 2
Ⅲ　調査の成果～層位と遺構・遺物～……（西村）… 5
Ⅳ　結語……（西村）… 42
Ⅴ　付編　～曽祢崎３号墳から出土した玉類の素材～ ……(パリノサーヴェイ株式会社）… 46
角垣内遺跡……（前川）… 61

挿　図　目　次

＜曽祢崎遺跡（第２次）・曽祢崎古墳群＞
第１図　遺跡位置図…… 2
第２図　遺跡地形図…… 3
第３図　調査区位置図…… 4
第４図　調査前測量図…… 4
第５図　遺構平面図・古墳地区割図…… 7
第６図　SX22 平面図・遺物出土状況図…… 8
第７図　SX23 平面図・遺物出土状況図…… 9
第８図　SK13 遺物出土状況図…… 10
第９図　１号墳平面図・断面図…… 11
第10図　１号墳埋葬施設平面図・断面図…… 12
第11図　１号墳周溝西側遺物出土状況図…… 13
第12図　３号墳平面図・断面図…… 15～16
第13図　３号墳埋葬施設ほか…… 17
第14図　ＳＢ４、ＳＢ５、ＳＨ６、ＳＫ９、ＳＤ７平面図・断面図…… 20
第15図　ＳＫ２平面図・断面図…… 21
第 16～29 図　出土遺物実測図（1）～（14）…… 23～36
第30図 琥珀製棗玉ＩＲスペクトル…… 49
＜角垣内遺跡＞
第31図　遺跡地形図…… 62
第32図　調査区位置図…… 62
第33図　調査区平面図…… 63
第34図　出土遺物実測図…… 63

表　目　次

＜曽祢崎遺跡（第２次）・曽祢崎古墳群＞
第１表　石器一覧表…… 5
第２表　遺構観察表…… 22
第３表　遺物観察表…… 37～41
第４表　土製丸玉胎土薄片試料…… 46
第５表　ガラス製玉類の試料一覧…… 47
第６表　ガラス製玉類のオーダー分析結果…… 48
第７表　赤外線吸収スペクトル 測定試料…… 48

図　版　目　次

巻頭　１・３号墳埋葬施設ほか
図版１　SX22、SX23、SH6・SK9・SB4・SB5
図版２　旧石器時代～弥生時代の遺物
図版３　弥生時代前期・後期の遺物
図版４　１号墳出土遺物
図版５　３号墳埋葬施設１・２出土遺物
図版６　３号墳出土鉄製品（１）
図版７　３号墳出土鉄製品（２）
図版８　３号墳甕棺墓・「方形部」出土遺物
図版９　３号墳墳丘・周溝、その他遺構出土遺物
図版10　分析試料１・２
図版11　分析試料３・４

曽祢崎遺跡（第２次）・曽祢崎古墳群

Ⅰ　前　言

１　調査の契機

曽祢崎遺跡・曽祢崎古墳群は、多気郡明和町に所在する周知の遺跡で、遺跡番号は曽祢崎遺跡が明和町525、曽祢崎古墳群1～4号墳がそれぞれ明和町526～529であった。県営ほ場整備事業（明星地区）により曽祢崎古墳群が破壊されるおそれがあったので、平成６年12月12日に試掘調査（第３図１～４）を行った結果、４号墳は古墳ではなく、自然地形であることが判明した。再度の試掘調査で曽祢崎遺跡の範囲が東方に広がっていることが確認され、平成７年度に古墳域以外の調査及び古墳の測量調査が行われた。

２　調査の経過

(1) 調査経過概要

本年度は、曽祢崎１～３号墳を含む範囲の本調査を行った。調査に参加して頂いたのは明和町在住の方々である。ここに御名前を記し御礼申し上げたい。

東谷露子、上村由兵衛、奥田よ志、北村博、雲谷義蔵、竹本ひさゑ、田端一子、田端文子、西功夫、西尾將、西尾肇、西尾行雄、西山京子、野村文吉、福谷博、前田正二、森下瀧雄、森せつ子、森美智子、山本静子　（五十音順、敬称略）

(2) 調査日誌（抄）

5月９日　地区杭打ち
5月13日　作業員初日
5月14日　各古墳にトレンチ設定
　　人力で各古墳の表土除去
5月21日　ＳＢ５検出
5月28日　ＳＨ６検出
6月28日　３号墳で玉類出土
７月２日　１号墳埋葬施設掘削
7月17日　３号墳で須恵器の集中地点検出
7月21日　現地説明会の開催
　　約70名の来訪を得る
7月24日　３号墳埋葬施設１検出
8月２日　３号墳断ち割り
8月12日　平板測量
8月22日　現地作業終了
　　農林水産部へ引き渡し

(3) 文化財保護法等にかかる諸通知

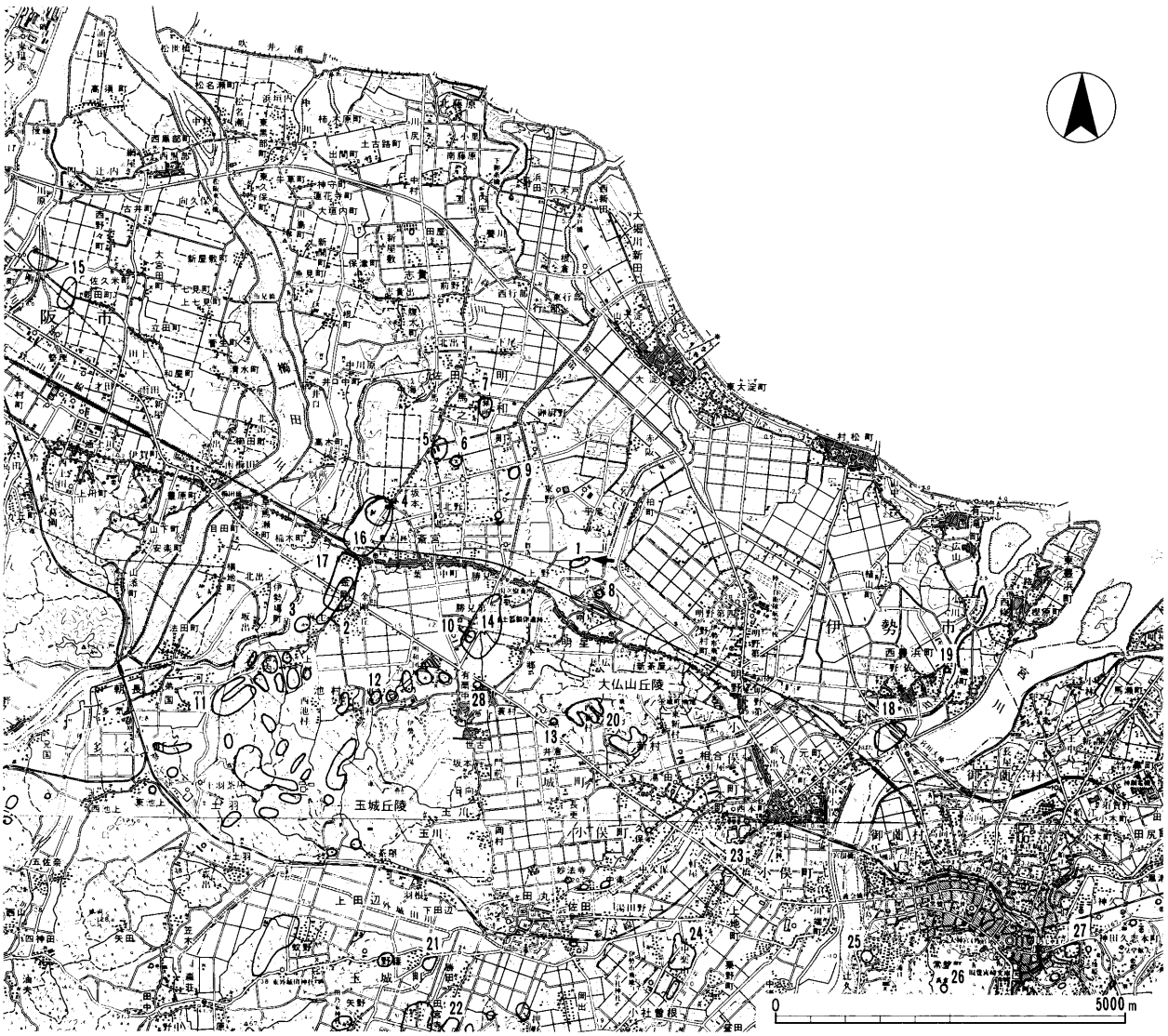
文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官あてに行っている。

・法第98条の２第１項（文化庁長官あて）
平成８年４月５日付け教文第710号（県教育長通知）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長あて）
平成８年10月1日付け教文第 18-65号（県教育長通知）

Ⅱ　位置と歴史的環境

曽祢崎遺跡・曽祢崎古墳群（１）は、南伊勢地方を流れ伊勢湾に注ぐ櫛田川と宮川にはさまれた明野台地の中央部北端の中位段丘上に位置する。[1] 周辺の微地形をみると、東北から南西方向に延びる段丘の北東端に立地する。平成７年度には曽祢崎遺跡の第１次調査が行われ、旧石器時代から奈良時代にかけての遺構・遺物が検出されている。[2] ここでは古墳時代後期の周辺の遺跡について概述する。

古墳時代後期には、玉城丘陵・大仏山丘陵に大規模な群集墳が築かれるようになる。明野台地にも祓川右岸の段丘上に大規模な古墳群がつくられる。その多くは開発により消滅してしまったが、辰ノ口古墳群（２）、織糸古墳群（３）、塚山古墳群（４）、坂本古墳群（５）、東垣外古墳群（６）、寺山古墳群（７）などがある。特に塚山古墳群・坂本古墳群周辺には現存の古墳のほか航空写真で多くの痕跡を確



１．曽祢崎遺跡・曽祢崎古墳群　２．辰ノ口古墳群　３．織糸古墳群　４．塚山古墳群　５．坂本古墳群
６．東垣外古墳群　７．寺山古墳群　８．明星古墳群　９．野塚古墳群　10．順禮野古墳群　11．河田古墳群
12．戸峯古墳群　13．カリコ古墳　14．北野遺跡　15．堀町遺跡　16．古里遺跡　17．金剛坂遺跡
18．大藪遺跡　19．丁塚古墳　20．大仏山古墳群　21．仲垣内遺跡　22．上の山遺跡　23．野垣内遺跡
24．中楽山遺跡　25．塚山古墳群　26．高倉山古墳　27．隠岡遺跡　28．角垣内遺跡

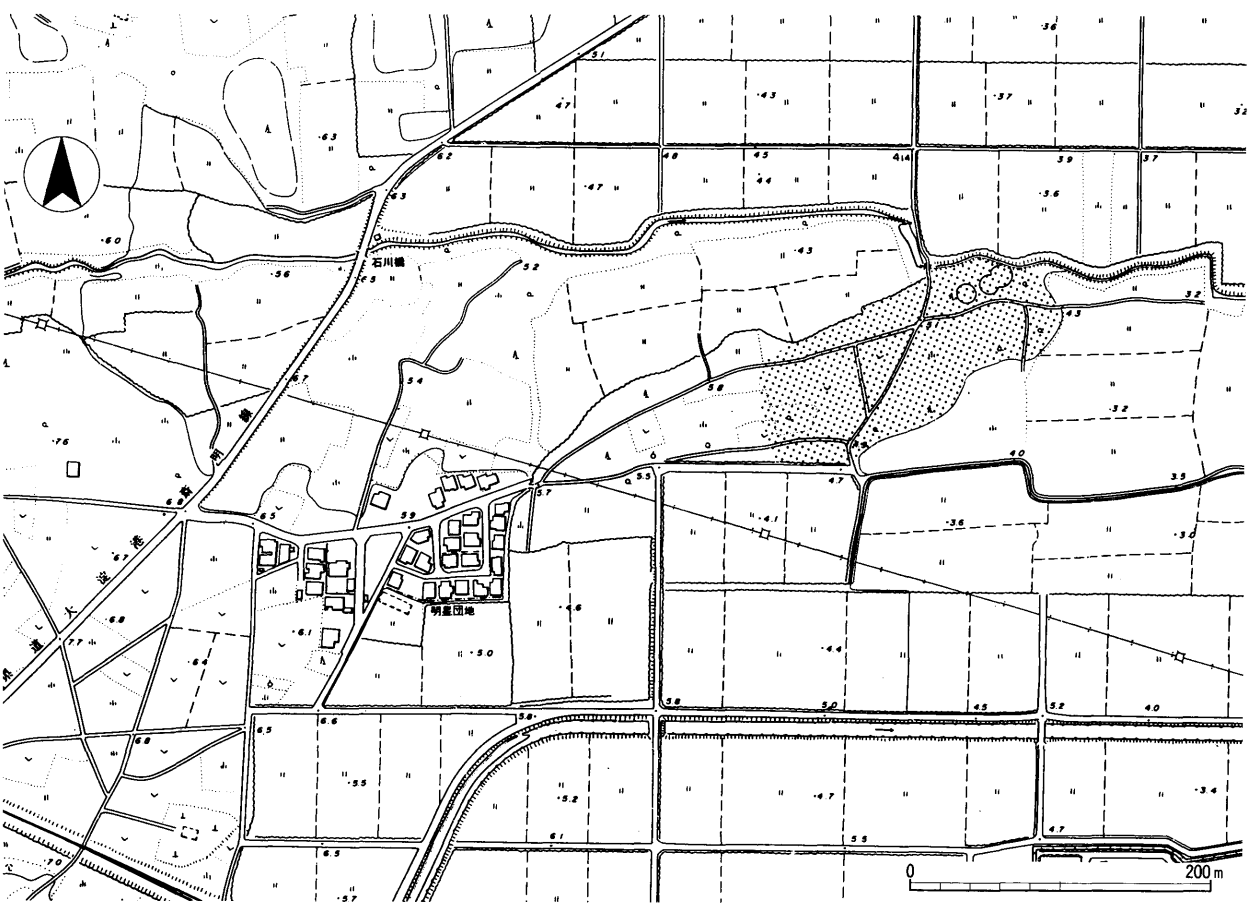
第１図　遺跡位置図（１：100,000）（国土地理院１：50,000「松阪」・「伊勢」より）

認でき、地元で「坂本百八塚」と呼ばれていた名残を留める。明野台地の中央部には曽祢崎古墳群のほか、明星古墳群[3]（８）、野塚古墳群（９）、順禮野古墳群(10)などがある。これらは数基から十数基の小規模な古墳群で、それぞれ地理的に独立した場所に立地している。

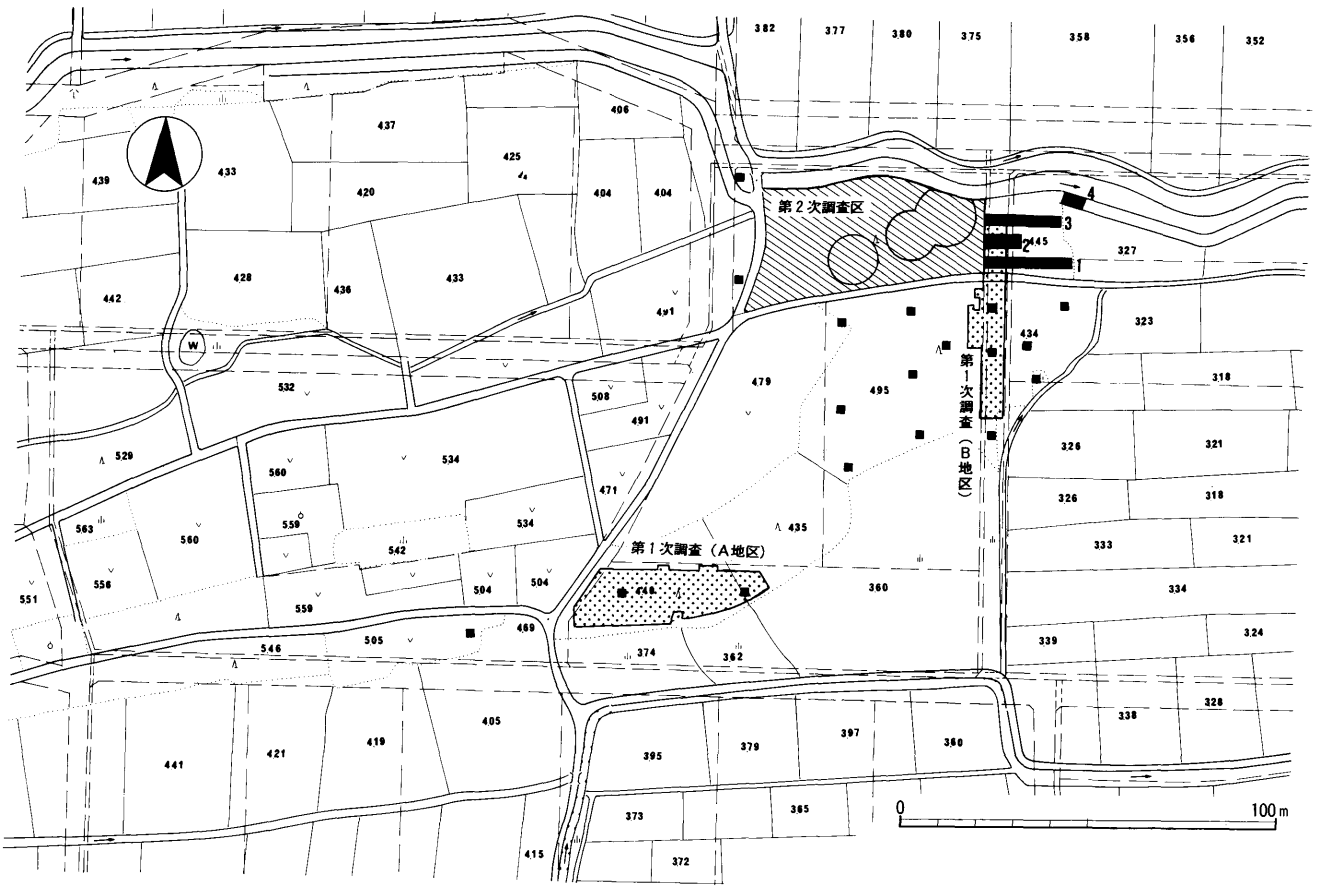
発掘調査の行われた明星古墳群、玉城丘陵の河田古墳群[4](11)、戸峯古墳群[5]（12）、大仏山丘陵の縁辺部に位置するカリコ古墳[6](13)では６世紀中葉から７世紀代の古墳が確認されている。明星古墳群、戸峯古墳群、カリコ古墳では検出された主たる埋葬施設が全て木棺直葬で、また河田古墳群では木棺直葬を主体とし、７世紀代になってはじめて横穴式石室を採用している。同時期の南勢地方は、宮川右岸では横穴式石室が、五十鈴川流域では横穴式木室を含む多様な埋葬形態が知られ、地域性が顕著に認められる[7]。

この時期の集落はあまり知られていないが、北野遺跡[8](14)では弥生時代後期から古墳時代後期にわたって多くの竪穴住居などが確認されている。曽祢崎遺跡でも第１次調査で古墳時代後期の掘立柱建物１棟と埋葬施設とも考えられる土坑が検出されている。また、大仏山丘陵には須恵器の窯が築かれ前述の古墳群に供給されたと考えられている[9]。

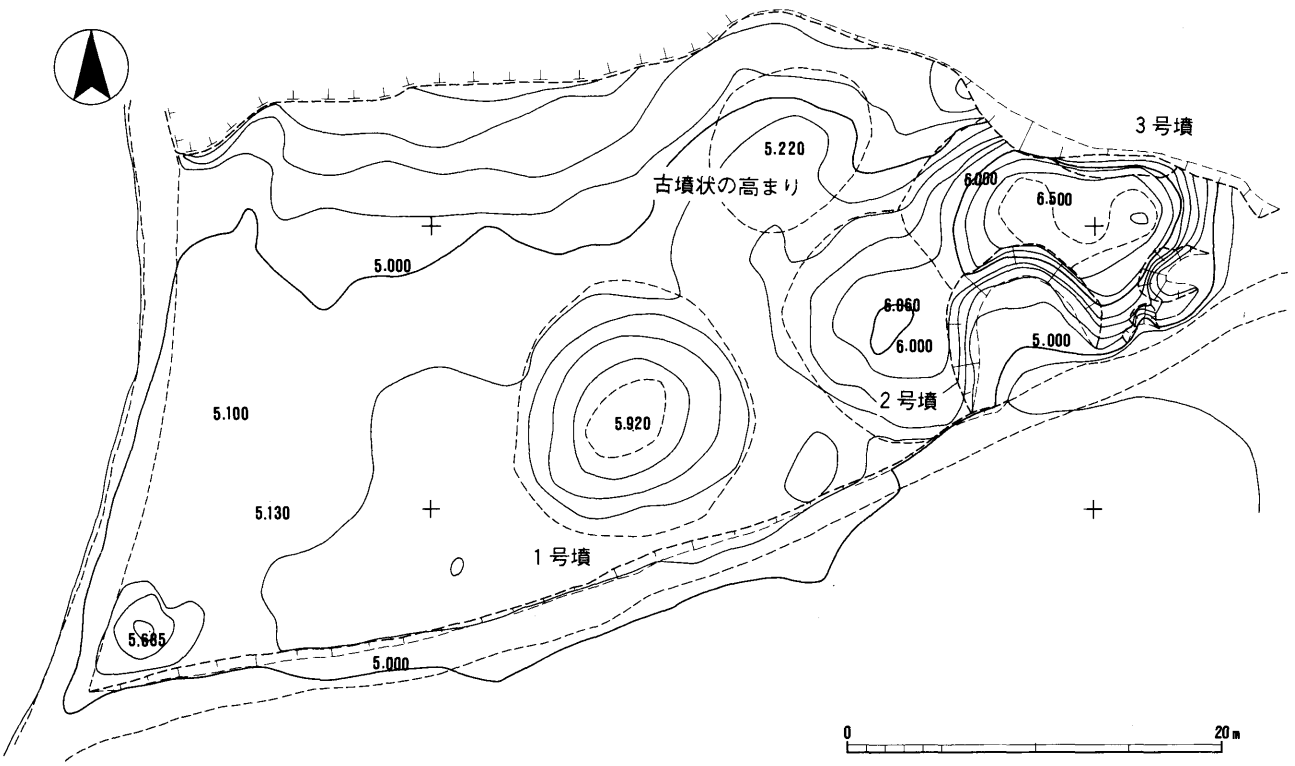
〔註〕
①『松阪市史』自然編（松阪市史編さん委員会、1977年）
②野口美幸・山田康弘『曽祢崎遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）
③奥義次・下村登良男ほか『明星古墳群発掘調査報告』（明和町教育委員会、1975年）
④ア、吉水康夫『河田古墳群発掘調査報告Ⅰ』（多気町教育委員会、1974年）
イ、山澤義貴『河田古墳群発掘調査報告Ⅱ』（〃、1975年）
ウ、下村登良男『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』（〃、1986年）
エ、川村輝夫ほか『河田古墳群発掘調査報告Ⅳ』（〃、1983年）
⑤『戸峯古墳群』現地説明会資料（明和町教育委員会、1990・1991年）
⑥山澤義貴『カリコ古墳・カリコ遺跡発掘調査報告』（玉城町郷土会、1972年）
⑦皇學館大学考古學研究會『伊勢市とその周辺の古墳文化』（皇學館大学考古學研究會、1992年）
⑧ア、田村陽一「北野遺跡」（『平成２年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第２分冊　三重県埋蔵文化財センター、1991年）
イ、竹田憲治『北野遺跡（第５次）発掘調査概報』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）
⑨ア、河瀬信幸『八端古窯跡群範囲確認調査概要』（小俣町教育委員会、1993年）
イ、前川嘉宏「大仏八端窯跡群」（『玉城町史』玉城町、1995年）



第２図　遺跡地形図（１：5,000）



第３図　調査区位置図（１：2,000）　　■試掘坑



第４図　調査前測量図（１：400）　　（＋：国土座標の基準点）

Ⅲ　調査の成果～層位と遺構・遺物～

1　調査の方法

(1) 調査区の設定と基準点の設定

平成７年度の曽祢崎遺跡（第１次）調査時に、株式会社イビソクによってＧＰＳ測量及び水準測量を行い、曽祢崎遺跡・曽祢崎古墳群に国土座標の基準点７点及び水平基準点２点の振り込みを行った。今年度の調査では、調査区内に残してあった３点の基準点および１点の水準点を利用した。

(2) 小地区の設定

各調査区内は、設定された基準点をもとに４ｍ方眼を切り、北西からＡ１～として小地区を設定した。調査区の方眼は国土座標に合わせている。また、古墳の墳丘上の遺物は、１・３号墳をそれぞれ４・６分割して取り上げた。（第５図参照）

2　基本層序

調査区は、遺跡北東端の段丘端部に位置し、北に向かって低くなっている。

調査区の基本層序は、上から表土、暗褐色系の遺物包含層、黄褐色土となっている。黄褐色土上面を遺構検出面として調査を行った。遺物包含層の厚さは調査区北側で25㎝、南側で15㎝で、遺物包含層からの遺物の出土は比較的希薄であった。

3　遺構と遺物

調査前測量では円墳３基（曽祢崎１～３号墳）と古墳状の高まり１箇所が認められたが、調査の結果、古墳状の高まりは自然地形であることが判明した。また、２号墳は後述するが３号墳の一部と考えられるため、曽祢崎古墳群は１・３号墳の２基の古墳が存在したことになる。このほか古墳時代末期から飛鳥時代の竪穴住居１棟、掘立柱建物２棟、土坑、溝、弥生時代後期初頭の方形周溝墓２基等を検出した。また、古墳の盛土や周溝内より、旧石器時代から縄文時代の遺物、弥生時代前期から中期および古墳時代前期の遺物等が出土した。以下、各遺構および遺物についての特徴を述べるが、数値等は遺構・遺物の観察表を参照されたい。なお、遺構実測図中の遺物に付す番号は遺物実測図の番号と同一である。

(1) 旧石器時代・縄文時代

旧石器時代・縄文時代については、遺構は確認されず遺物の出土のみであった。出土層位はほとんどが遺物包含層、古墳の盛土・旧表土からである。ナイフ形石器（1～13）はいずれもチャート製で、縦長剥片から作られた柳葉状のもの（１～７）、不定型剥片から作られた小型のもの（8～10）、切出形のもの（11･12）がある。13は基部のみの残存である。楔形石器（14）･角錐状石器（15）もチャート製で、14は上下縁に、15は側縁全体に片面からの調整が行われている。石鏃は4点出土した。16～18はチャート製の凹基無茎鏃、19はサヌカイト製の平基無茎鏃である。砂岩製の砥石(20)は一部欠損している。時期は不明である。このほかにチャート・サヌカイト・頁岩製の剥片・石核が多数出土した。内容は第１表のとおりで、チャートが最も多く89.7%、続いてサヌカイト5.8%、頁岩2.5%の割合である。

	製品	ＲＦ	ＵＦ	剥片	砕片	石核	合計（%）
チャート	18	8	18	313	124	83	564 (89.7)
サヌカイト	1	1	－	27	7	1	37 (5.8)
頁　岩	－	3	－	7	－	6	16 (2.5)
砂　岩	1	3	－	2	－	－	6 (1.0)
石　英	－	－	－	6	－	－	6 (1.0)
合計（%）	20 (3.2)	15 (2.4)	18 (2.9)	355 (56.4)	131 (20.8)	90 (14.3)	629 (100)

註）・ＲＦは二次調整の施された剥片、ＵＦは使用痕のある剥片を示す。
・剥片と砕片は個体の大きさで区分し、１㎝四方以下のものを砕片とした。

第１表　石器一覧表

(2) 弥生時代・古墳時代前期

弥生時代の遺構は方形周溝墓２基、土坑１基および溝１条を確認した。古墳時代前期については遺構は確認されず、遺物少量が出土したのみである。

A．方形周溝墓

ＳＸ22（第６図）１号墳の下層で確認した。周溝の中央で測って一辺 9.0mのものである。方向はN-35°-Eである。周溝は南隅が途切れている。埋葬施設は確認できなかった。遺物は、周溝南西辺の中央部及び周溝北東辺の北コーナー付近で完形に近い広口壺（21･22）が出土している。両者とも弥生時代後期初頭に位置づけられるもので、21には胴部下半に焼成後の穿孔が行われている。

ＳＸ23（第７図）３号墳の下層で確認した。周溝の中央で測って東西10.8m、南北11.6mである。方向はN-20°-Eである。周溝は北隅と南隅が途切れている。埋葬施設は確認できなかった。遺物は周溝北辺のやや西より及び周溝東辺の北コーナー付近で完形に近い広口壺（24･25）が確認された。24の肩部には粗い櫛描き波状文が施されていた。23は周溝内からの出土である。これらの遺物は弥生時代後期の初頭に位置づけられる。

B．土坑

ＳＫ13（第８図）ＳＸ23と重複して検出した。攪乱があるため前後関係は不明である。２層に分かれるが、遺物は上層に集中している。遺物には高杯、壺がある。高杯（26）は杯部・脚部を連続して形成したのち円盤を充填している。27は小型の広口壺で口縁が「く」の字状に屈曲する。28は体部の丸い広口壺で、肩部に櫛描き文が施されている。総じて弥生時代後期初頭に位置づけられよう。

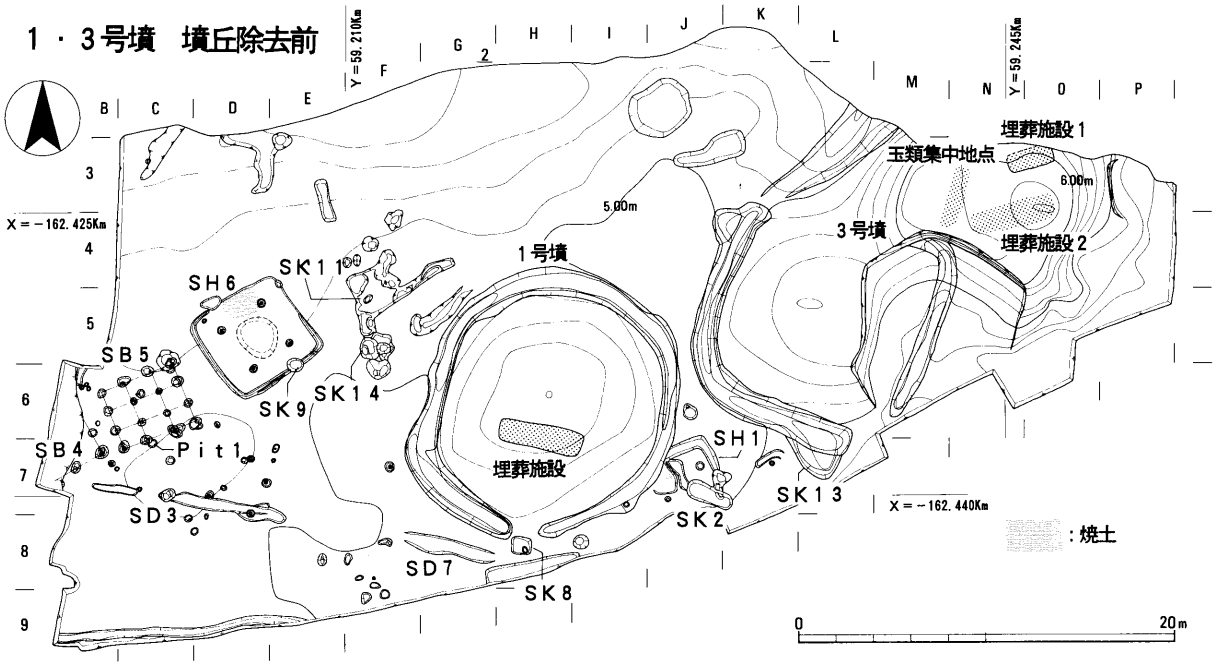
C．溝

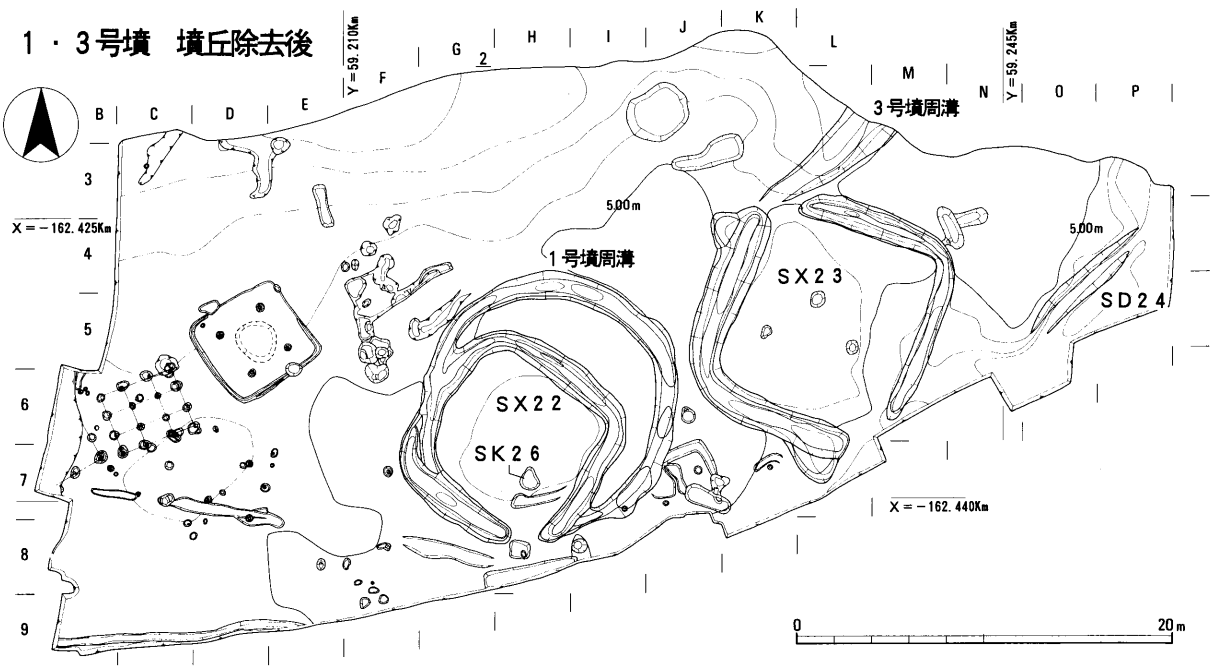
ＳＤ24（第５図）調査区東端で検出した。現存の長さ約８ｍ、N-48°-Eでほぼ直線状である。遺物には壺、甕がある。29は口縁端部・内面、頸部に装飾が施されたもので、体部は球形を呈する。30は肩部に簾状文が施されたもので体部はやや算盤玉状に近い球形である。これらの遺物は弥生時代後期初頭に位置づけられる。

D．遺構出土以外の弥生時代・古墳時代前期の遺物（34～82）

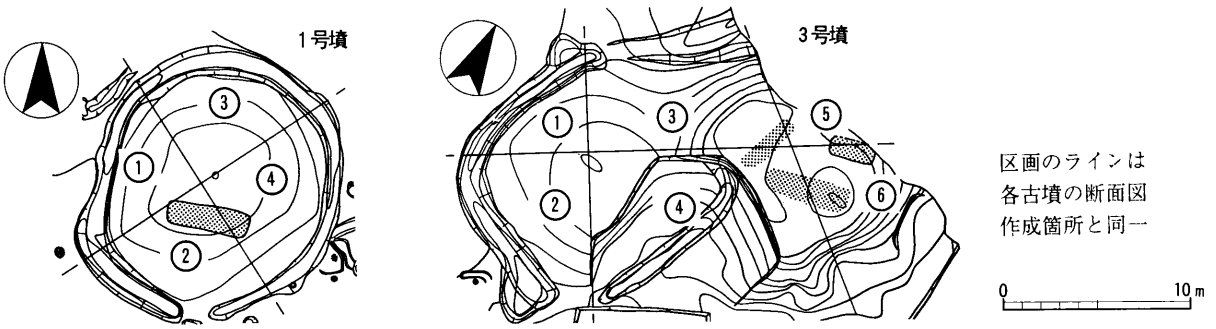
はっきりとした遺構は確認できなかったが、古墳の旧表土を中心として弥生時代前期から中期後半、および古墳時代前期の遺物が出土している。

34～47、64～77、は弥生時代前期の遺物と考えられるものである。34は壺の蓋と考えられる。壺の蓋は前期でも中段階[1]以前に多いとされ、鈴鹿市上箕田遺跡[2]や、四日市市永井遺跡[3]などで出土している。35は口縁部と頸部の境に段を持つ壺であるが、通例に反して頸部が高く口縁部が低く作られている。段をもつものでも新しい部類に入ろう。36･37･65はいずれも壺の口縁部で、削り出しによる段をもち、段で区画された口縁部側にヘラ描きや半截竹管による沈線を施したものである。38はSX22下層のSK26から出土したもので、頸部と胴部の境は削り出しによって区画が行われ、胴部側にヘラ描き沈線が施されている。外傾の接合痕が顕著に認められる。64も38と同様な区画が行われている。66～68は貼付凸帯の上にキザミを施した壺で、新段階に属する。45･71･72は頸部に多条の半截竹管で模様体をつくったもので、新段階に位置づけられよう。45は波状口縁の端部にキザミを施し、頂部からやや下がったところに２個の穴をもつ。頸部には現存で４単位の半截竹管文が施されている。73～77はいずれも器壁外面を貝殻条痕で調整する条痕文系の土器である[4]。74･75には貝殻条痕による波状文が施されている。前期末の水神平式に相当する。39～44の甕は、胴部無文のものとヘラ描きによる１～３条の沈線を持つものがあるが、いずれも「正統遠賀川式土器」に属する甕である。これに対して、69･70は半截竹管による沈線を持つ「亜流遠賀川式土器[5]」である。「正統遠賀川式土器」が割合緻密な胎土で浅黄橙色を呈するのに対し、「亜流遠賀川式土器」は細砂を多く含み、赤褐色を呈している。46は縄文時代晩期の凸帯文深鉢の流れをくむ土器であるが、口縁を外反させる器形や口縁端部の刻目など遠賀川式の甕の影響を受けていることが伺われる[6]。47は口縁に強いヨコナデが施された鉢で、Ⅰ様式併行の尾張・三河地方に類例がある。48～54、78～82は弥生時代中期の土器と考えられる。48は頸部に多条の沈線をもつ壺でⅡ様式からⅢ様式のものと考えられる。49は大きく外反させた口縁の下端が波状を呈する。Ⅱ様式ごろのものと

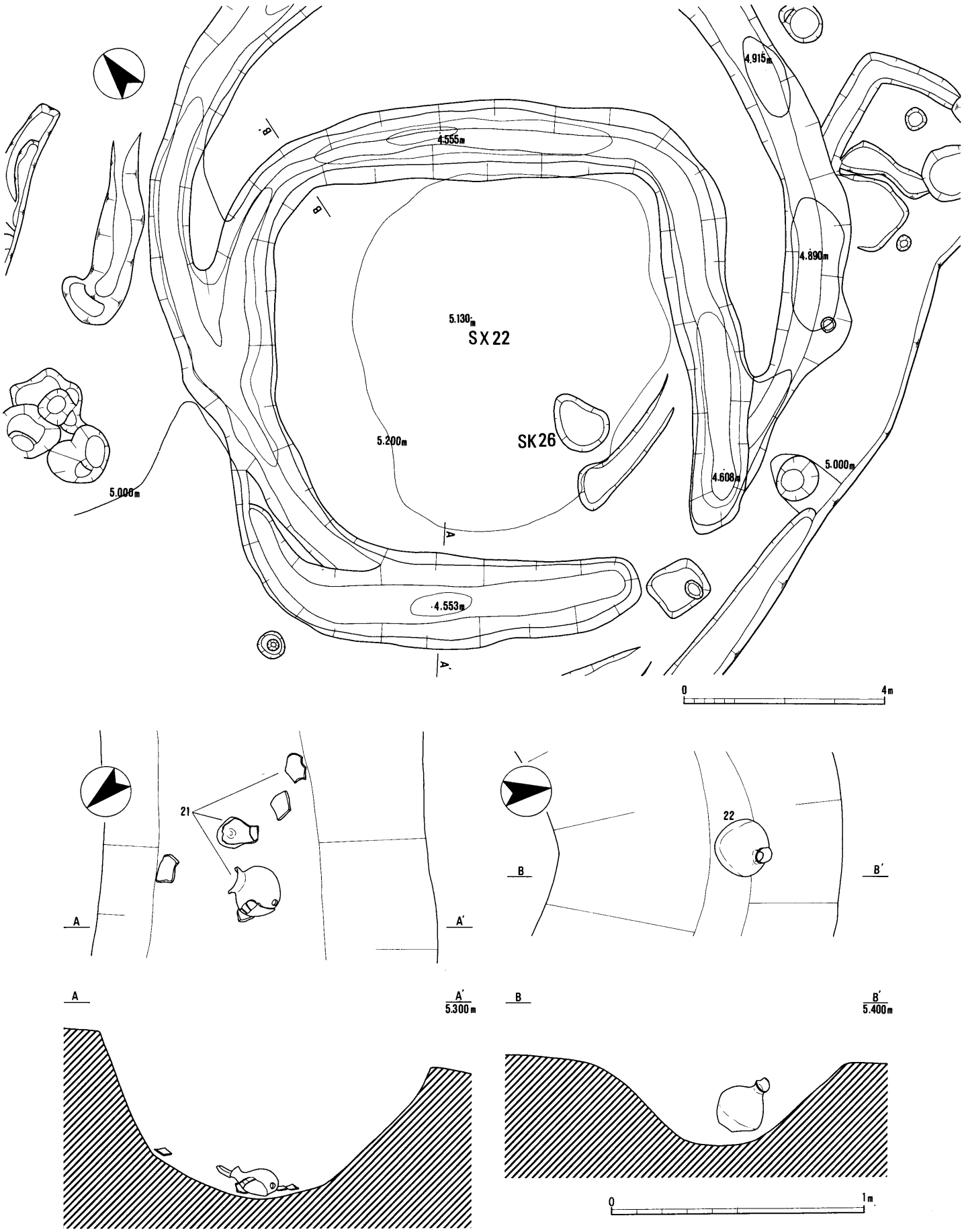




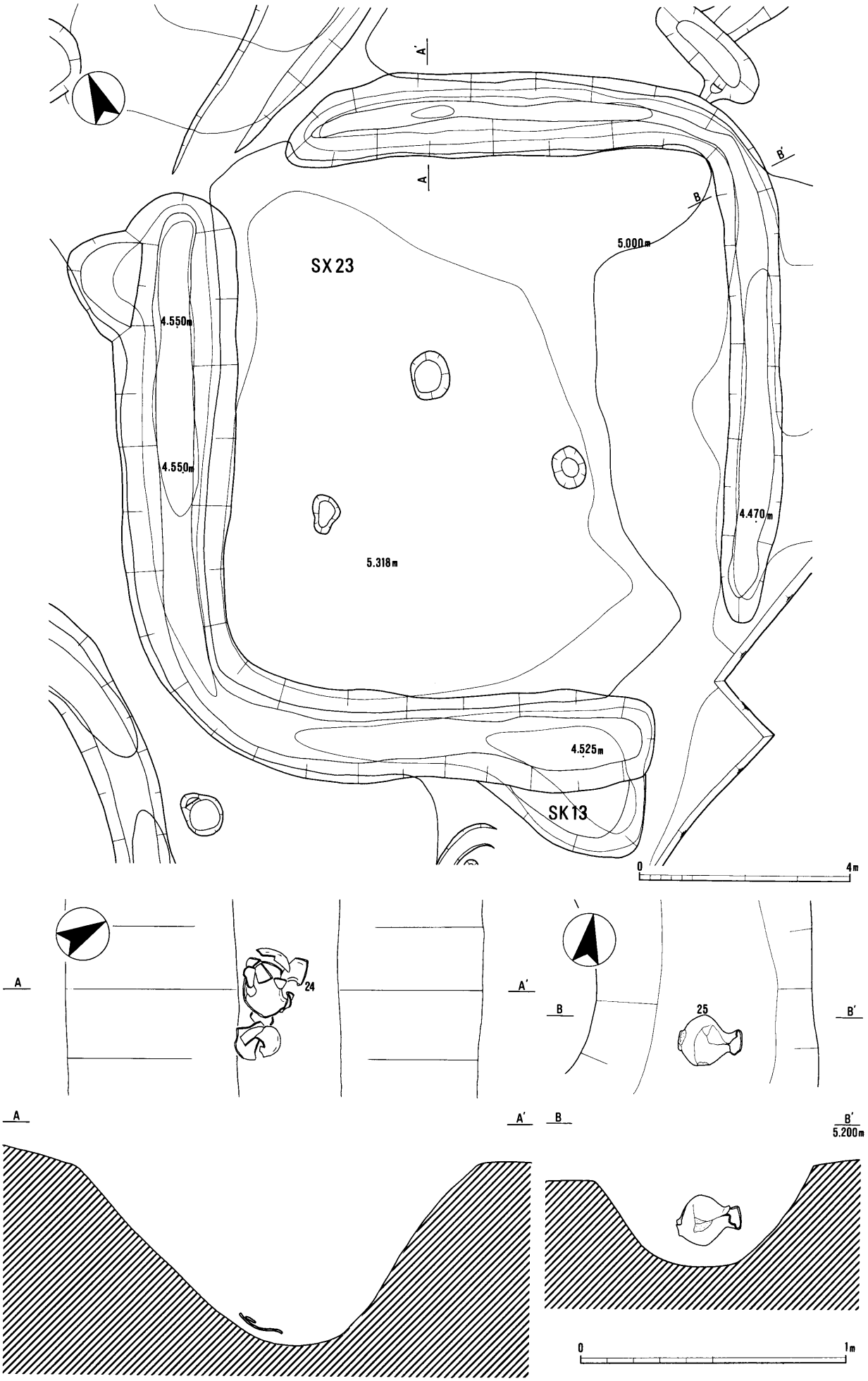
古墳地区割図



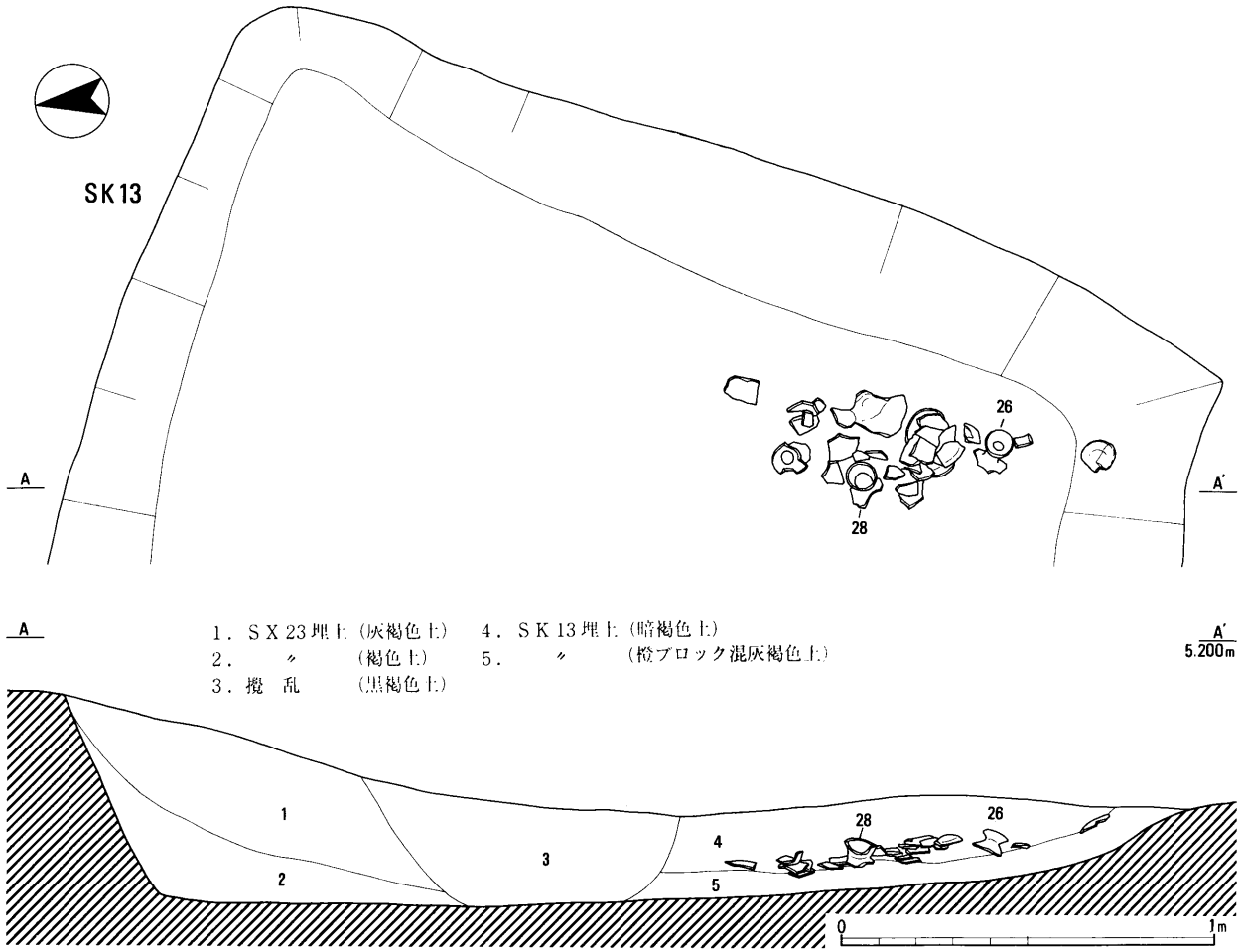
第５図　遺構平面図・古墳地区割図（１：400）



第6図　ＳＸ22平面図（1：100）・遺物出土状況図（1：20）



第７図　ＳＸ 23 平面図（１：100）・遺物出土状況図（１：20）



第８図　SK13遺物出土状況図（１：20）

考えられる。50は受け口状の口縁外面にヘラ描き、刺突、凸帯で模様を施している。尾張・三河地方での水神平式につぐ岩滑式に相当するものと考えられる。51は器壁が薄く、口縁を大きく外反させる甕、52は口縁端部に刻みを施さず、外反も小さい甕でいずれもⅡ様式ごろのものであろう。53は口縁端部にキザミを施し、体部はハケ調整した甕で、Ⅱ様式ごろの大和系の甕と考えられる。54はⅣ様式ごろの受口壺の口縁部であろうか。78は櫛描き波状文を施したもの、79は半截竹管で幾何学的文様を描いたものでいずれも壺の肩付近であろう。80は櫛描きにより疑似流水文を施したものでⅢ様式の壺と考えられる。

81･82は、櫛描き横線文と簾状文を施したもので同一個体であろう。Ⅲ～Ⅳ様式のものと考えられる。55は下ぶくれの小型壺である。祭祀用のものであろうか。56･57は壺の底部、58～59は甕の底部で、59は外面全体に二次焼成を受けている。61はいわゆる「宇田型甕」[7]の口縁部である。62は小型壺[8]の底部であろう。63は手捏土器で、３号墳の旧表土から出土している。

(3) 古墳時代末から飛鳥時代

古墳２基、竪穴住居１棟、掘立柱建物２棟、溝、土坑などを確認した。

A．古墳

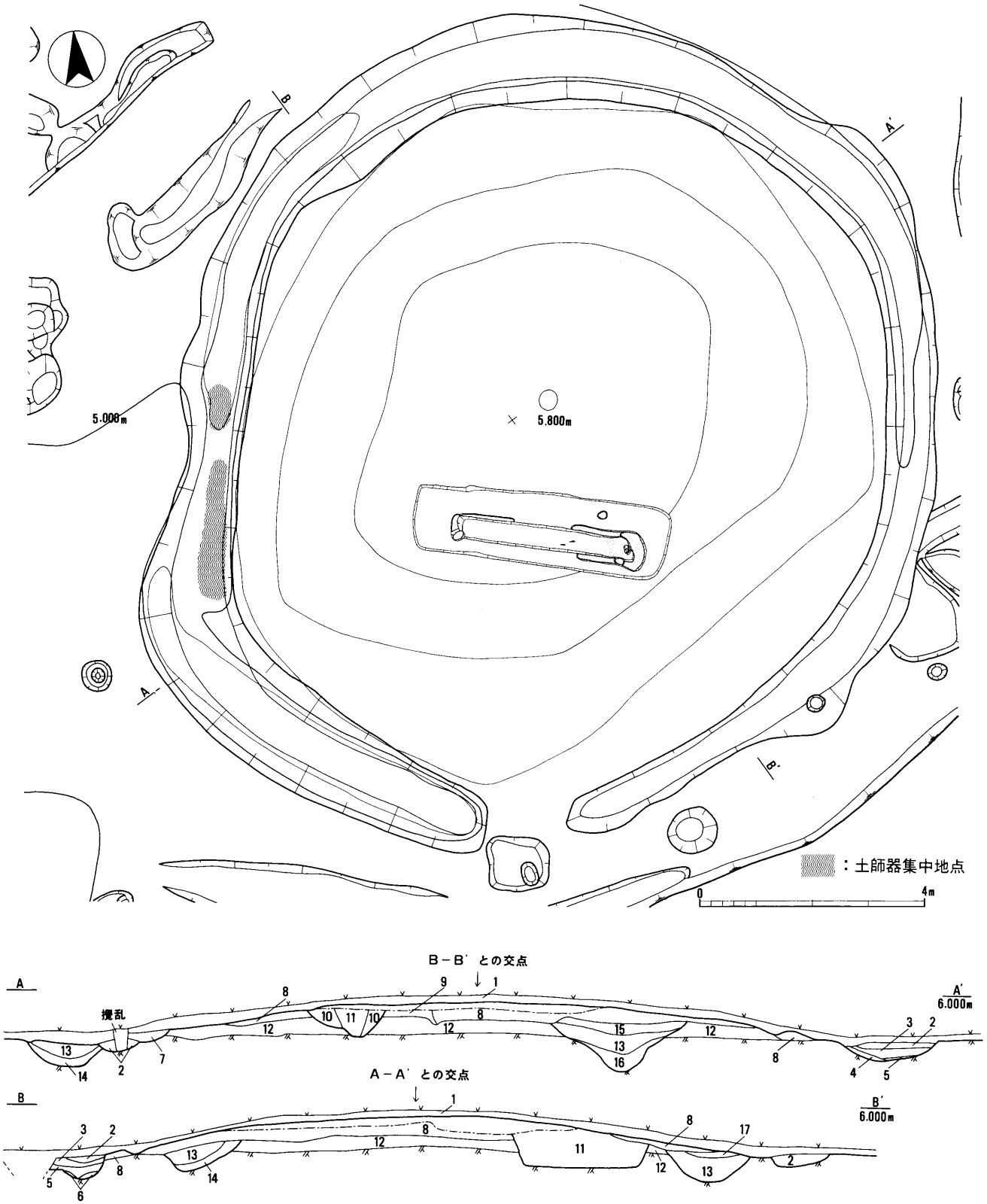
１号墳（第９図）

a．調査前の状況

調査前測量では、直径約13m、高さ約0.7ｍの円墳で、周溝は完全に埋まっていた。墳丘上に盗掘坑の痕跡は確認されなかった。

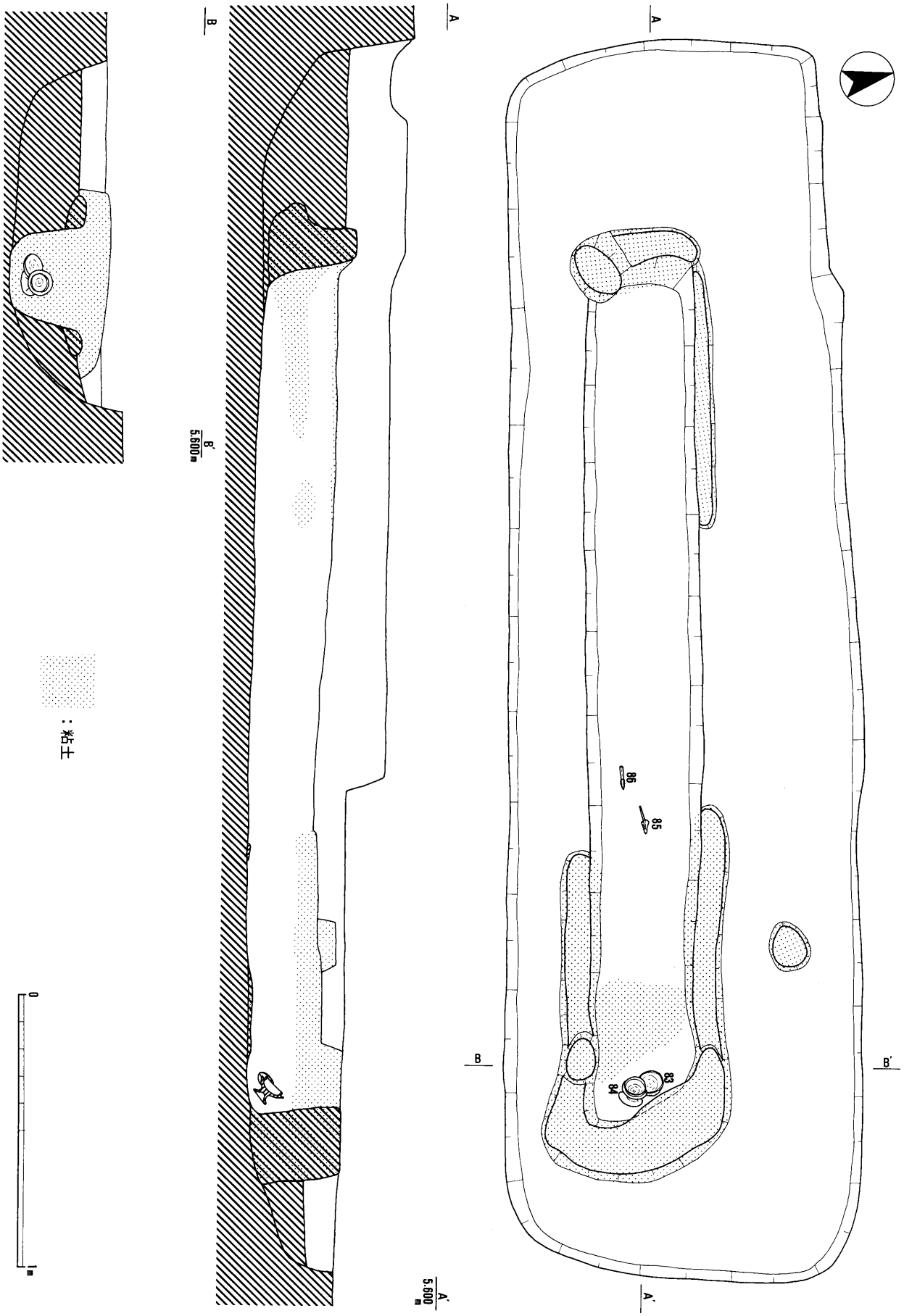
b．墳丘と周溝

発掘調査の結果、１号墳はSX22と大きく重複した場所で検出した。溝中央で測った場合の径は約12.5m、検出面からの高さは約0.8ｍ、周溝は幅0.8～1.3ｍ、深さ約0.4ｍであった。墳丘は黄褐色土の地山、黒褐色系の旧表土の上に褐色系の盛土が約45cm盛られていた。旧表土や盛土には弥生前・中期

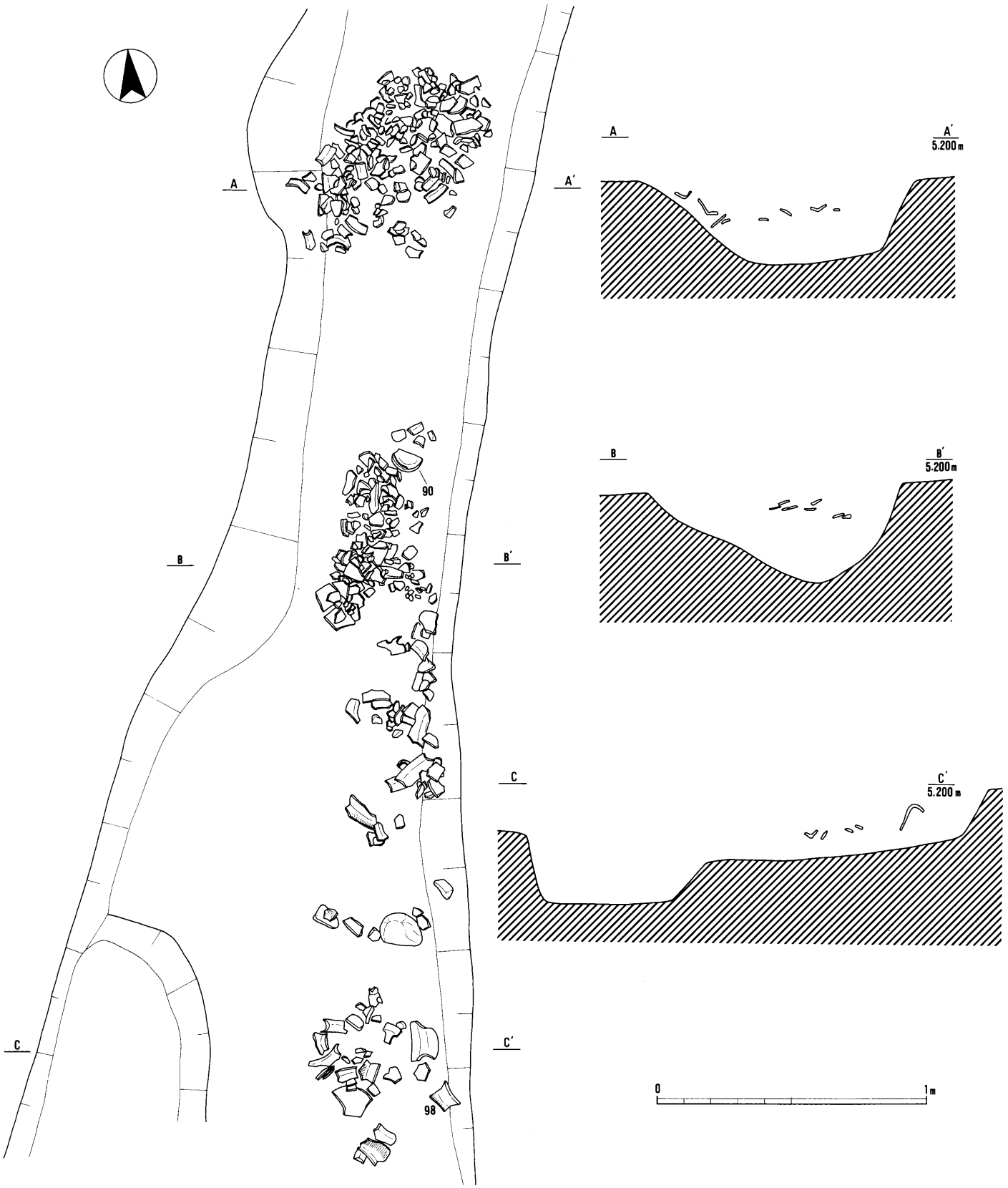


1．表　土
2．1号墳周溝埋土（暗灰褐色土）
3．　〃　（明灰褐色土）
4．　〃　（褐灰色土）
5．　〃　（灰褐色土）
6．　〃　（橙色土ブロック混灰褐色土）
7．1号墳墳丘崩落土（褐色土）
8．1号墳墳丘盛土　（明褐色土）
9．　〃　（明橙色土）
10．1号墳埋葬施設　（橙色土ブロック混褐色土）
11．　〃　（橙色土ブロック混明褐色土）
12．旧　表　土　（弥生土器を含む黒褐色土）
13．ＳＸ２２周溝埋土（黒褐色土）
14．　〃　（褐色土混暗灰褐色土）
15．　〃　（暗灰褐色土）
16．　〃　（灰褐色土）
17．　〃　（暗褐色土）

第９図　１号墳平面図・断面図（１：100）



第10図　1号墳埋葬施設平面図・断面図（1：20）



第11図　1号墳周溝西側遺物出土状況図（1：20）

の土器が目立つ。SX22の盛土を利用したと考えられるが、それぞれの峻別は出来なかった。

c．埋葬施設および副葬品（第10図）

墳丘のやや南寄りの地点で埋葬施設1基を確認した。盗掘は全く受けていない。長さ4.5m、幅1.2mの木棺直葬墓で、N-103°-Eの方向を向く。盛土途中から掘り込み、地山まで掘り込んでいる。検出できた深さは30cmである。構造は、掘り込みを行った後木棺を入れ、周囲を粘土で固定している。両端には特に厚く粘土が残っていた。木棺の大きさは長さ約3m、幅約42cmと細長い。木棺の形は粘土などの残り具合から方形のものであったと考えられるが木口板の痕跡などは確認できなかった。

副葬品は棺内東部で須恵器高杯（83）と蓋（84）が、中央部やや東よりで鉄鏃(85)と刀子(86)が出土している。須恵器は田辺昭三氏による陶邑編年[9]（以下、「田辺編年」と呼称）のTK43からTK209併行期のものと考えられる。鉄鏃は腸抉三角形鏃で類柳葉状の鏃身をもつ[10]。鉄鏃も刀子も切先を東に向けている。

d．その他の出土遺物（88～121）

1号墳では周溝内からも多量の遺物が出土している。須恵器は出土量が少く、集中箇所がみられないのに対し、土師器は西側に集中している。(第11図)出土した土師器の内容は甕を中心とし、甑や椀も含む。これらの遺物は底からかなり浮いた状態で出土していることから1号墳に関連するものではなく、後述のSH6等の集落で使われた土器が周溝の窪みに廃棄されたものだと考えられる。118の甕は頸部断面に粘土接合痕跡が認められ、製作の過程を復元していく上で注目される。

3号墳（第12図）

a．調査前の状況

調査前測量では、旧2号墳は直径約12m、高さ約0.6mの円墳、旧3号墳は直径約16m、高さ約1.7mで墳形は不明であった。両者共に周溝は確認できなかった。2基は重複しているように見え、重複部分の南側および南東部分は土取りのため大きく破壊されていた。また、旧3号墳の北側は現在も使われている水路で大きく崩されている。旧3号墳の墳丘上には中央部に径3m程の窪みがあり、盗掘坑の痕跡と考えられた。

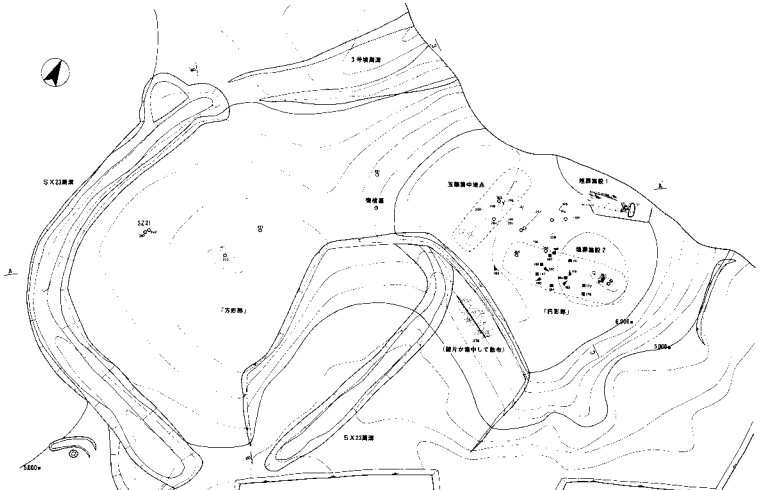
b．墳丘と周溝

発掘調査の結果、旧2号墳は弥生時代後期初頭の方形周溝墓であるSX23とほぼ重なった形で検出された。周溝は旧2・3号墳の北西で一連のものとして検出された。また、旧2号墳上ではいくつかの完形の土器を確認することはできたが、埋葬施設は確認されなかった。そして旧2号墳・旧3号墳の盛土に区分が行えず、一連のものとして観察できた。これらのことから、旧2・3号墳は一連のもので、当時残っていたと考えられるSX23の盛土を利用してSX23部分を前方部に見立て、それに一部覆いかぶせるような形で旧3号墳を築くといった前方後円形を意識した形のものであると考えた。曽祢崎古墳群は周知の遺跡であるため、旧2号墳を欠番とし前方後円形を意識したこの古墳を3号墳とする。この場合、旧2号墳が前方部を、旧3号墳が後円部をそれぞれ意識したものと考える。(以下、旧2号墳を「方形部」、旧3号墳を「円形部」と呼称）規模は長径21m以上、「方形部」の高さは0.6m、「円形部」の高さは1.5m程度である。墳丘の築造は「方形部」は地山・旧表土の上に35cm程度の盛土が行われている。旧表土や盛土には弥生土器が目立つ。SX23の盛土を利用していると考えられるがそれぞれの峻別はできなかった。「円形部」は地山・旧表土の上に橙色系土で1mほどの高さに数層にわたる盛土が行われている。

c．埋葬施設ほか

「円形部」北端で埋葬施設1を検出したほか、「円形部」中央やや東よりで須恵器の集中地点を確認した。この西側では鉄製品が散乱した状態で出土しており、本来は同一の埋葬施設であったものが、攪乱により須恵器が副葬された部分のみ残ったと考えられ、本報告では埋葬施設2とする。同じく「円形部」中央の西よりでは玉類が集中して出土した。これも埋葬施設であった可能性がある。このほかに、「円形部」の裾付近で甕棺墓1基、「方形部」で完形近く復元できる土器数点が出土した。

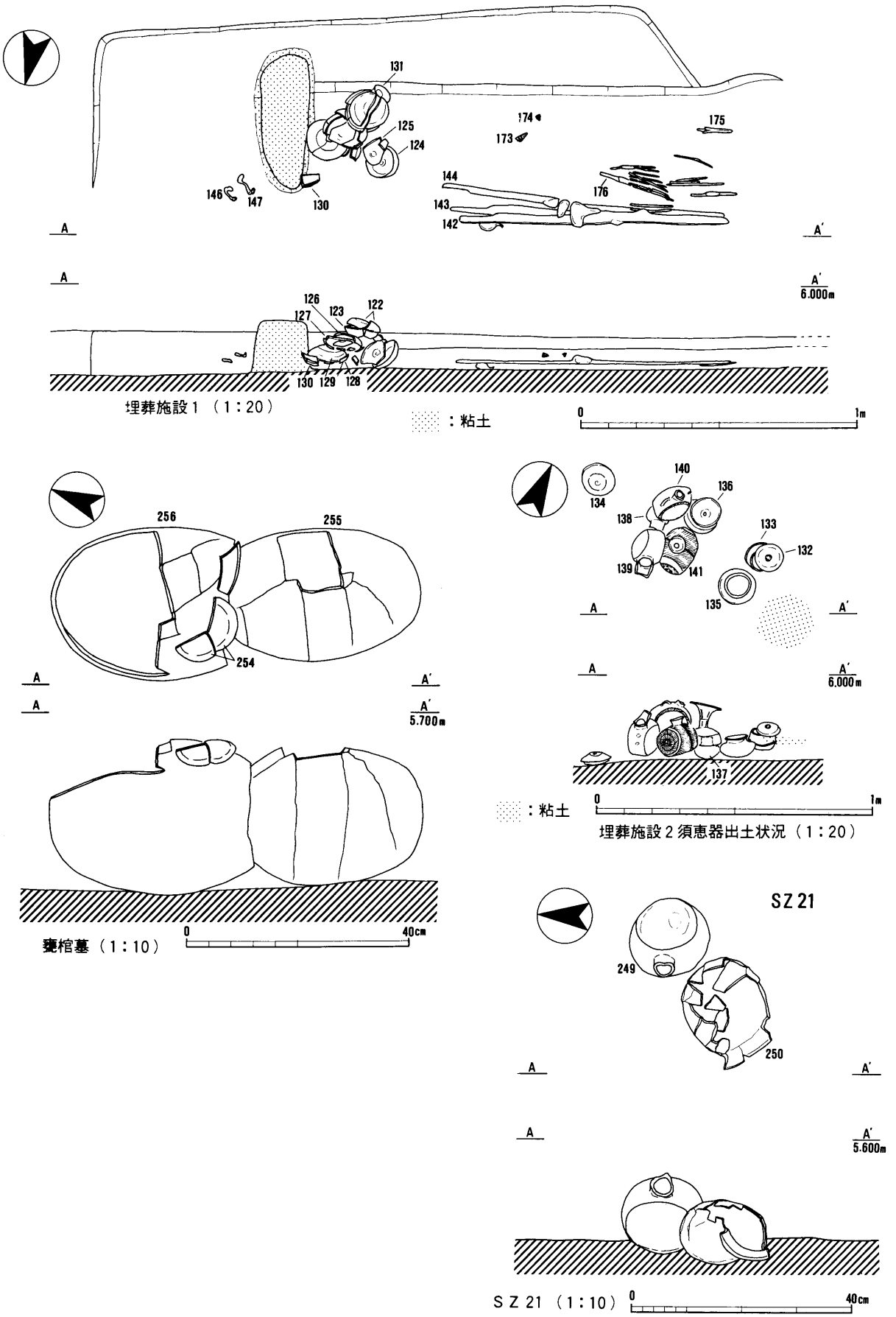
①埋葬施設1（第13図）「円形部」北端で検出した。北側は後世の流路により崩れ、西側は木の根によって攪乱されていた。掘形は長さ2.5m以上、幅0.8



○：土器
→：鉄製品（鉄（鉄刀）・剣・刀子方向のわかるもの
■：〃　〃　（石製品）
●：〃　〃　（その他）
：土師　：NO.のないものは1・2・3丸石
：鉄

1．赤　土
2．3号墳周溝埋土：褐色土
3．〃　　：灰褐色土
4．〃　　：暗色土ブロック混褐色土
5．3号墳盛土：明褐色土
6．〃　　：褐色土
7．〃　　：黄色粘土
8．〃　　：にぶい暗色土
9．〃　　：暗色土
10．〃　　：34よりやや明るいにぶい暗色土
11．〃　　：にぶい暗色土
12．〃　　：31よりやや明るいにぶい暗色土
13．〃　　：褐色土混にぶい暗色土
14．〃　　：暗色土ブロック混褐色土
15．〃　　：34より暗色土ブロック混入が少ない
16．〃　　：34より暗色土ブロック混入が多い
17．〃　　：暗色土に少量の黄色土が混入
18．〃　　：14に少量の黄色土が混入
19．〃　　：多量の暗色土ブロック混褐色土
20．〃　　：19に黄色土が混入
21．〃　　：19よりやや明るい褐色土
22．3号墳盛土：19に黄褐色土が混入
23．〃　　：多量の暗色土ブロック混明褐色土
24．〃　　：23に多量の黄色土が混入
25．〃　　：21よりやや明るい明褐色土
26．〃　　：暗色土ブロック混褐色土
27．〃　　：暗色土ブロック混にぶい黒褐色土
28．〃　　：暗色土ブロック混にぶい黒褐色土
29．埋葬施設21埋土：灰褐色土
30．埋葬施設22埋土：灰褐色土
31．旧表土：腐植土粘土を多く含む黒褐色土
32．SX23周溝埋土：灰褐色土
33．〃　　：黒褐色土
34．〃　　：明灰褐色土
35．〃　　：暗色土ブロック混灰褐色土
36．〃　　：33よりやや明るい黒褐色土
37．〃　　：33よりやや暗い黒褐色土
38．〃　　：34よりやや明るい褐色土
39．〃　　：新褐色土
40．〃　　：明灰褐色土
41．〃　　：緑黒褐色土

第12図　3号墳平面図・断面図（1：100）



第13図　３号墳埋葬施設ほか

m以上のものである。N-75°-Eの方向を向く。土層観察用のセクション下にあり、セクションを取り外した時に鉄刀が出土したために埋葬施設であることがわかった。木棺直葬と考えられ、東端に1号墳でみられた「木棺を固定していたと考えられる大きな粘土塊」があった。木口板の痕跡等は確認できなかった。副葬品は棺内には粘土付近で須恵器蓋杯・提瓶が、中央部北寄りで鉄刀3振りが、鉄刀の南で鉄鏃および刀子が、木棺中央部で石突が、棺外では木棺東側で馬具の一部が検出された。刀・鉄鏃はいずれも切先を西に向けていた。木棺の北半が破壊されているものの攪乱の痕跡がなく、これらの副葬品はほぼ原位置に遺存していたと考えられる。

＜須恵器＞（122～131）

蓋杯4セットと杯身・提瓶がそれぞれ1点出土した。出土状況は、横を向けた提瓶1点(131)と蓋をした杯4セット（122,123および126,127は正位、128,129は逆位、124,125は逆位か）がそれぞれ重なり合いながら配置されている。これらには意図的な打ち欠いた痕跡は認められない。130の杯身は蓋とセットにならず単独で出土しているが木棺の北側は崩れていたことから本来は蓋杯のセットであった可能性がある。これらの土器の所属年代は田辺編年のＴＫ209併行期と考えられる。

＜鉄製品＞

刀（142～144）

埋葬施設1の北端から出土した。切先を西に向けている。北辺では木棺の掘形が確認できておらず、これらが棺の内外いずれにあったのかはっきりしないが、棺内にあったと思われる鉄鏃と錆で付着していたので棺内出土であると判断した。3本は錆で付着しており、142・143の刃は棺の内側を、144の刃は外側を向いていた。142は平造の直刀で、微弱な反りがある。目釘孔を2個持ち、茎の先端は細くなり直角に曲げられている。143も平造の直刀で、反りは認められない。目釘孔を2個持ち、茎の先端は細くなっている。144は142・143より短い。142に錆で付着しているために詳細は不明だが、平造の直刀で、茎が内に反る。目釘孔を2個持つ。

馬具（145～147）

146・147は木棺東側の粘土の外から出土した。共に鞍の輪金と考えられ、鉸具状を呈さず楕円形の一部が張り出した形をとる。146の断面は方形、147の断面は円形である。145は鞍の座金具である。詳細な出土地点は不明である。円形を呈し、中央に方形の穴があく。図示できなかったがもう1点鞍の座金具が出土している。

鉄鏃（148～172）

埋葬施設1から出土した鉄鏃は27点以上あるが、鏃身の形のわかるもの25点を実測した。全て長三角形の鏃身をもつ長頸鏃で、全長18～20cm程度のものである。錆による腐食が激しいが、鏃身の造りは片丸造りが多い。鏃身関は方形関が多く、斜関、撫関、山形関と思われるものがあるが、錆による腐食が激しく、不明なものも多い。頸部の関部は棘状関を呈するものがほとんどで、円形輪関の可能性のあるもの(160)もある。まとまった位置でいずれも方向を揃えて（西側に鏃身を向ける）出土していることから埋葬時には胡籙などに入れられていたとも考えられる。

石突（173～174）

棺内の中央部で出土した。2点とも鉄板を丸めて三角錐状に形づくっている。大きさは173が径1.4cm、長さ3.4cm、174が径2cm、長さ4.5cmと違いがある。173の内部には棒状の鉄製品が錆により付着しているが、レントゲン撮影の結果から、別な個体が中に入ったものと考えられる。これらの石突はもともと何らかの木製品の先端についていたものであろう。出土位置が他の武器類から離れて、遺骸のあったと考えられる場所付近であり、他の武器類とは異なった扱いを受けていたと考えられる。

刀子（175～176）

175は鉄鏃の近くで、176は少し離れた位置でいずれも切先を西に向けて出土した。175は全体に木質が付着しており、鞘にはまったままの形で埋葬されたのであろう。

②埋葬施設2（第13図）「円形部」の中央部東寄り、埋葬施設1の南で検出した。完形の須恵器が集中して出土し、その東側に「棺を押さえるための粘土」を少量検出した。埋葬施設であると考えたため周辺を精査したが、埋土の区別が困難で、掘形を確認する事はできなかった。この西側で、鉄製の武器・武

具等が散乱した状態で出土した。この部分は、平面的には観察できなかったが断面観察で攪乱の跡を窺うことができた。もともと須恵器と鉄製品が同じ埋葬施設に副葬されていたのが、鉄製品が副葬された西側を攪乱され、須恵器の集中している部分だけ残ったものと考えられよう。

＜須恵器＞

須恵器の出土状況は、①蓋(132)・椀(133)のセットと短頸壺(135)、②横瓶(141)と小型壺(137)の上に高杯(136)を逆さにして被せたもの、③横を向けた小型壺(138)の上に提瓶2個(139·140)の①～③の2セット一組のものが3列に並び、少し離れて杯身(134)が伏せられている。133の底部は全面にヘラ削りが施されている。これに対し134は底部がヘラ切り未調整のままである。136は長脚で2段の透かしを持つ無蓋のものであるが、上の段の透かしは貫通していない。また頸部が傾き杯部内面には重ね焼きの痕跡が残るなど粗雑な作りが窺える。提瓶はいずれも口縁部を欠損している。これらの所属年代は、134の杯身や136の高杯の調整や形状から田辺編年のＴＫ209併行期に想定できよう。

＜鉄製品＞

両頭金具（177）

飾り弓の装飾品である。1点のみ出土した。

鍔（178）

倒卵形で無窓式の鍔である。内面に木質の付いた柄元金具が残っていた。

刀（179）

先端のみ出土した。平造りのものである。

槍（180）

先端のみ出土した。幅2.5cmのものである。

刀子（181·182）

両者共に柄の部分のみ出土した。木質が残り、目釘穴が開けられている。

鏃（183～195）

柳葉鏃(190～192)、三角形鏃（183·185·186·188)、腸抉三角形鏃(189)、三角形鏃系であるが鏃身が折れていて腸抉のあるなしの不明なもの（184·187)が出土した。長頸鏃(193～195)は、埋葬施設1の西からの出土であり、埋葬施設1に関連するものであろうか。

③玉類集中地点（第12図）埋葬施設1の南西で確認した。北よりに粘土が検出され、玉の分布状態から南北方向の埋葬施設があった可能性もあるが、埋土の区分が困難で、結局玉類を検出したに止まった。出土玉類には碧石製管玉1点(196)、ガラス製管玉1点(197)、琥珀製棗玉1点(198)、ガラス製丸玉2点(199,200)、ガラス製小玉5点(201～205)、土製丸玉43点(206～248)がある。

④甕棺墓（第13図）「円形部」の墳丘西端付近で確認した合わせ口の甕棺墓で[12]、掘形は確認できなかった。構造は土師器甕2点(255,256)の口縁部を打ち欠き、256の口縁に255の口縁を入れ込んだ形で合わせている。上に土師器椀(254)が伏せた形で置かれていた。甕は取り上げ後の接合によって口縁部が接合した。埋葬の際にその場で口縁部を打ち欠いたものと考えられる。棺内からの副葬品の出土はない。

⑤「方形部」出土土器（第13図）「方形部」ＳＺ21を検出した。掘形は確認できなかったが須恵器提瓶(249)と土師器甕(250)が並んで出土した。近くに粘土塊もみられ、小規模な埋葬施設の一部であった可能性もある。このほか、「方形部」及びくびれ部付近では墳丘上から完形の土師器甕(251)、把手付椀(252)、椀(253)が出土している。いずれも周囲を精査したが掘形及び粘土塊は検出できなかった。なんらかの祭祀用に供えられた土器であろうか。

⑥「円形部」南攪乱部付近出土の遺物（第12図）

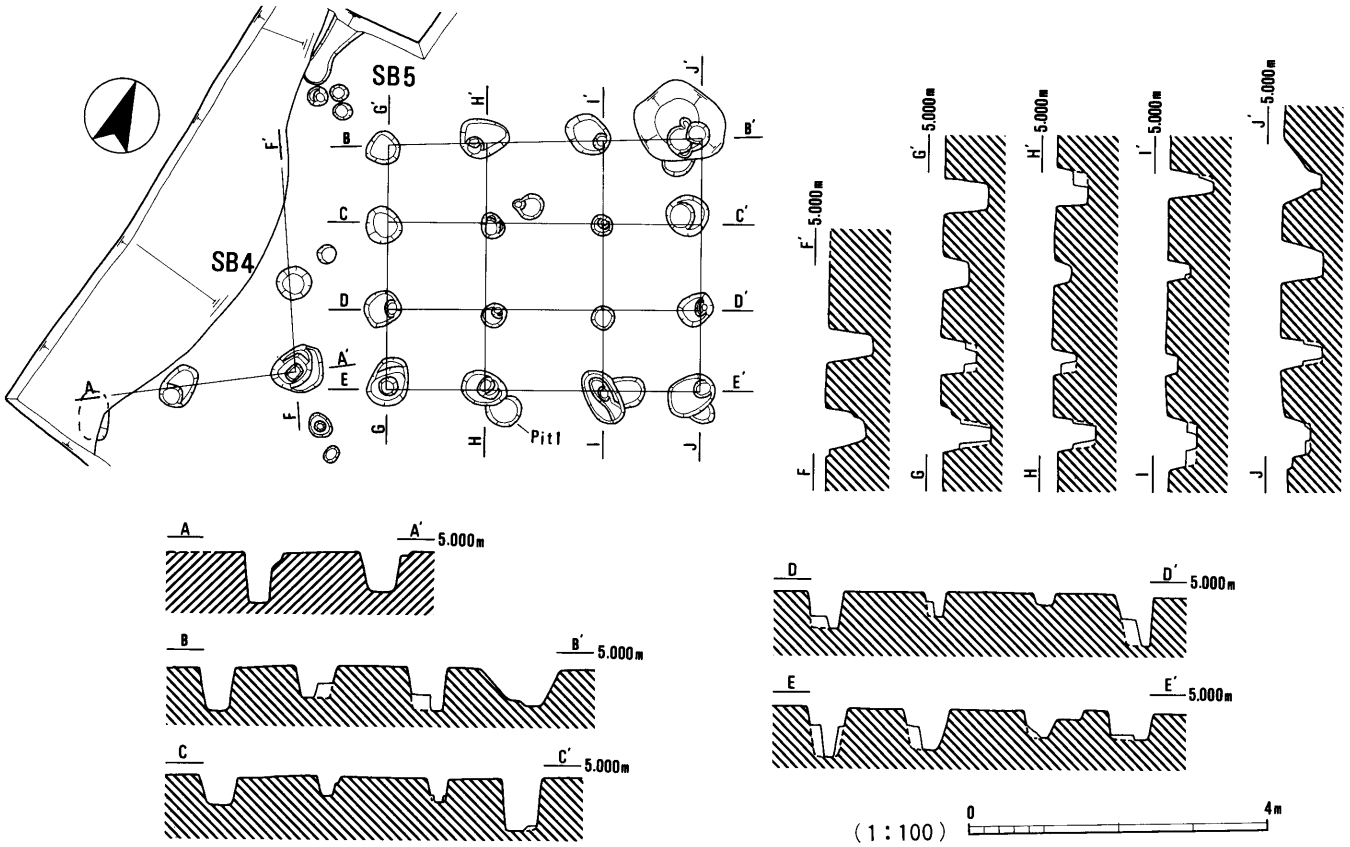
278は大型の甕で、「円形部」南攪乱部付近に破片が集中して出土した。本来は墳丘上に埋置されたものが後世の攪乱によって移動したものであろうか。

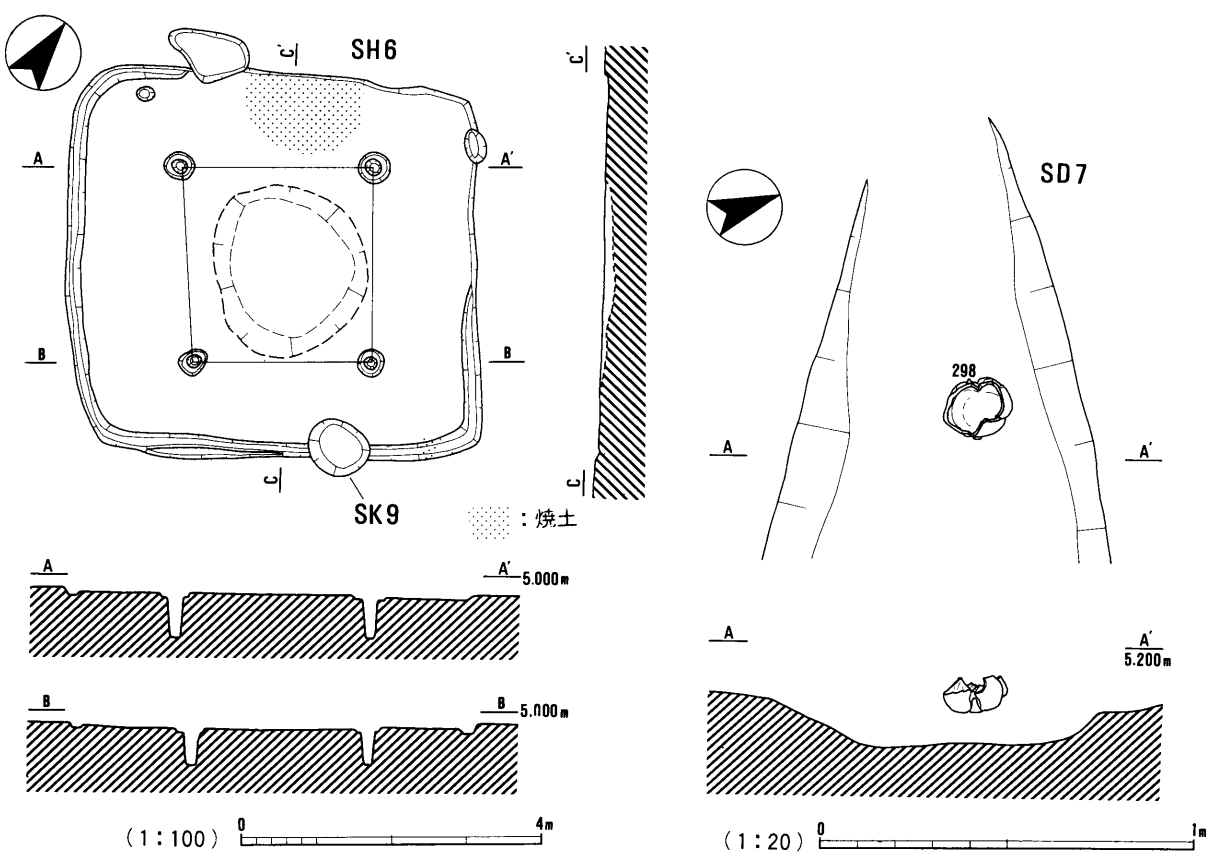
⑦墳丘・周溝出土の遺物(257～277、279～289)

須恵器蓋杯・鴟・提瓶・甕、土師器高坏・甕・椀(283)等が出土した。須恵器蓋杯は天井部および底部ヘラ切り未調整のものと回転ケズリを施したものの2種類あるが、埋葬施設1・2とあまり差のない時期のものと考えられる。特に墳丘上のものはもと埋葬施設にあった可能性がある。脚付坩(282)は、周溝からの出土であるが、小型で祭祀具と考えられているもので、鈴鹿市南山1号墳[13]、亀山市井田川茶臼山古墳[14]・松阪市白山4号墳[15]のものと類似している。

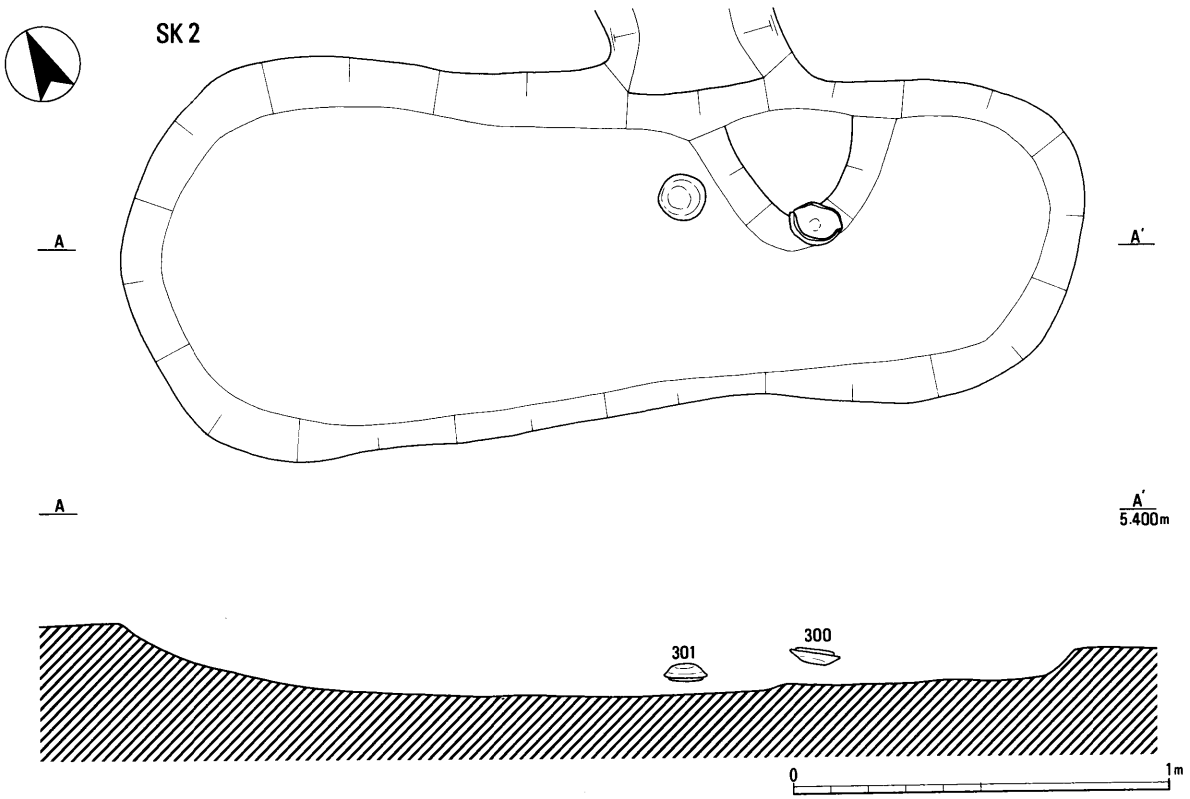
Ｂ．竪穴住居

ＳＨ6（第14図）調査区西方で確認した。一辺5.4





第14図　ＳＢ４、ＳＢ５、ＳＨ６、ＳＫ９、ＳＤ７平面図・断面図



第15図　ＳＫ２平面図・断面図（１：20）

mの方形のものである。N-34°-Wを向く。４本の主柱穴とカマドの痕跡及び周溝を検出した。床には粘土による貼床が行われている。貼床の作りは、竪穴住居中央部の地面を掘り窪めたあと中に粘土を入れ、上に褐色系の土を入れた後に黄色系粘土で床を貼っている。図示できなかったが、貼床は住居の中央で良く締まって残り、端近くでは残りが悪かった。遺物は土師器甕（290 ～292 ·294)、土師器甑（293）が出土しており、７世紀代のものと考えられる。

C．掘立柱建物

ＳＢ４（第14図）調査区西端で確認した。水道管埋設に伴う攪乱により、規模は不明である。方位はN-58°-Eで東西棟であろうか。遺物は少量出土したのみで時期は不明だが、ＳＢ５と並んで検出されており、あまり時期差のないものと考えられる。

ＳＢ５（第14図）ＳＢ４の東で確認した。桁行３間（4.15m)、梁行３間（3.25m）の総柱建物で方位はN-65°-Eの東西棟、柱掘方は円形である。床束の柱掘形は側柱の掘形より小く浅い。遺物の出土は少量であるが土師器甕（295 ·296)等の出土から７世紀代のものと考えられる。ＳＨ６との間隔は約1.4mと狭くまた方位も異なることから同時存在ではないと考えられるが、２棟の切り合いは無く前後関係は不明である。

D．溝

ＳＤ３・７（第14図)途中で途切れているが、同一の溝であったと考えられる。方位はN-75°-Wでほぼ直線状に延びる。深さは10cm程度である。ＳＤ７の中央部で須恵器提瓶(298)が出土している。

E．土坑

ＳＫ２（第15図)１・２号墳の間で検出した。長さ3.4m、幅0.9mの楕円形の土坑である。底部付近で須恵器杯身(300,301）が出土している。300は底部がヘラ切り未調整のもの、301は底部全面にヘラ削りを施したものである。この他天井部と口縁部の境に沈線を持つ須恵器杯蓋(299）も出土しており田辺編年TK43～TK209 型式相当のものと考えられる。形態、土器の出土状況より土坑墓と考えられる。

ＳＫ８（第５図）１号墳の南で検出した。長辺１m、短辺0.9 mの不定方形の土坑である。土師器、須恵器が少量出土した。

ＳＫ９（第14図)ＳＨ６の南東側周溝と重複する径

0.8 mの不定円形土坑である。土師器甕(302)、土師器甑(303) が出土した。302 は二次焼成を受けて赤変している。ＳＨ６との関係は不明である。

ＳＫ 11 （第５図） １号墳の西で検出した。１辺2.2 mの不定方形の土坑である。木の根で攪乱されていた。７世紀代の土師器甕（304 ･305）が出土した。

ＳＫ14 （第５図） １号墳の西で検出した。長辺1.7 m、短辺1.5mの不定方形の土坑である。木の根により攪乱されていた。７世紀代の土師器甕(306)が出土した。

(4) 時期不明の遺構・遺物

ＳＨ１ （第５図） 調査区南端中央で１号墳周溝とＳＫ２に切られる形で検出した。ほとんど削平されており、周溝の一部、焼土の痕跡と貼床の可能性のある粘土面を検出した。ピットが１点あるが周溝に近く、主柱穴ではないと思われる。遺物は周溝からごく微量の土師器が出土した。

〔註〕

①弥生時代前期の細分については、佐原真「畿内地方」(『弥生式土器集成　本編２』　1968年）を参照した。

②ア、仲見秀雄『上箕田』（三重県立神戸高等学校郷土研究クラブ 1961年）

イ、真田幸成ほか『上箕田　弥生式遺跡第二次調査報告』（鈴鹿市教育委員会・上箕田遺跡調査会、1970年）

③小玉道明ほか『永井遺跡発掘調査報告』（四日市市教育委員会 1973年）

④条痕文系土器については、佐藤由紀男氏にご教示いただいた。

⑤「正統遠賀川式土器」と「亜流遠賀川式土器」の区分については、鈴木克彦「亜流遠賀川式土器再考」(『Miehistory』三重歴史文化研究会、1990年）を参照した。

⑥この土器については、奥義次氏よりご教示いただいた。

⑦赤塚次郎「最後の台付甕」(『古代』 86号、早稲田大学考古学会、1988年）

⑧弥生時代後期後半から古墳時代初頭の内湾直口壺の底部と考えられる。

⑨田辺昭三『須恵器大成』(角川書店、 1981年）

⑩鉄鏃の分類については、杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」(『橿原考古学研究所論集』第八、吉川弘文館、 1988年）を参照した。

⑪鉄刀の名称等については、石井昌國・佐々木稔『古代刀と鉄の科学』(雄山閣、 1995年）を参照した。

⑫古墳出土の合口甕棺墓については、「たまたま古墳というか、荒陵を墓地に利用したもので、古墳築造時期より新しい後世のものであり、古墳との直接関係は薄く、古墳出土というには疑問がある。」(山田良三「土師式合口甕棺墓について」『橿原考古学研究所論集　第四』吉川弘文館、 1979年）という意見もある。曽祢崎３号墳では近くに甕棺墓と同時期の竪穴住居等があることから古墳に伴うものではなく後世の利用と考えることもできる。

⑬新田剛ほか『南山遺跡・南山６号墳』(鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会、 1991年）

⑭小玉道明『井田川茶臼山古墳』(三重県教育委員会、 1988年）

⑮福田昭『白山古墳群発掘調査報告書』(松阪市教育委員会、 1994年）

＜方形周溝墓＞

遺構名	規模(m)（東西×南北）	方位	周溝幅(m)	周溝深(cm)	時期	備考
ＳＸ２２	9.0×9.0	N35°E	1.5	40～60	弥生時代後期初頭	
ＳＸ２３	10.8×11.6	N20°E	1.5～2.0	40～60	弥生時代後期初頭	

＜溝＞

遺構名	幅(m)	長さ(m)	深さ(cm)	方位	時期	備考
ＳＤ３・７	0.7	21以上	5	N75°W	古墳時代後期	
ＳＤ24	1.5	8以上	70	N48°E	弥生時代後期初頭	

＜古墳＞

号墳	外形	規模(m)	埋葬施設				副葬品																
			遺構名	墓坑(m)	棺跡(m)	方位	須恵器								鉄製品					玉類			
							杯身	杯蓋	椀	椀蓋	高杯	高杯蓋	壺	提瓶	横瓶	直刀	槍	刀子	鏃	馬具	その他	管玉	丸玉	小玉	その他
1	円	径 12.5	埋葬施設	4.5×1.2	3.0×0.4	N103°E					1	1						1	1						
3	前方後円形	全長24.0［方形部］11.0［円形部］16.0以上	埋葬施設１	2.5×0.8	1.7×0.5	N75°E	5	4						1		3		2	27	鞍	石突				
			埋葬施設２	不明	不明	東西方向	1		1	1	1		3	2	1	1	1	2	10		両頭金具				
			玉類集中地点	―	―	不明																碧1 ガ1	ガ5 土43	ガ5	琥珀製 瑪瑙1

※　玉類の項の、「碧」は碧石製、「ガ」はガラス製、「土」は土製のものであることを示している。

＜竪穴住居＞

遺構名	規模（東西×南北）(m)	平均深さ(cm)	方位	焼土の位置	主柱穴掘形			主柱穴の柱痕径(cm)	時期	備考
					形状	径(cm)	深(cm)			
ＳＨ６	5.4×5.2	6	N34°W	北辺中央部	円形	約30～40	約50～60	約15～20	７世紀代	主柱穴の間で貼床を検出
ＳＨ１	不明	―	N29°W	中央付近？	―	―	―	―	不明	周溝と貼床の一部及び焼土のみ検出

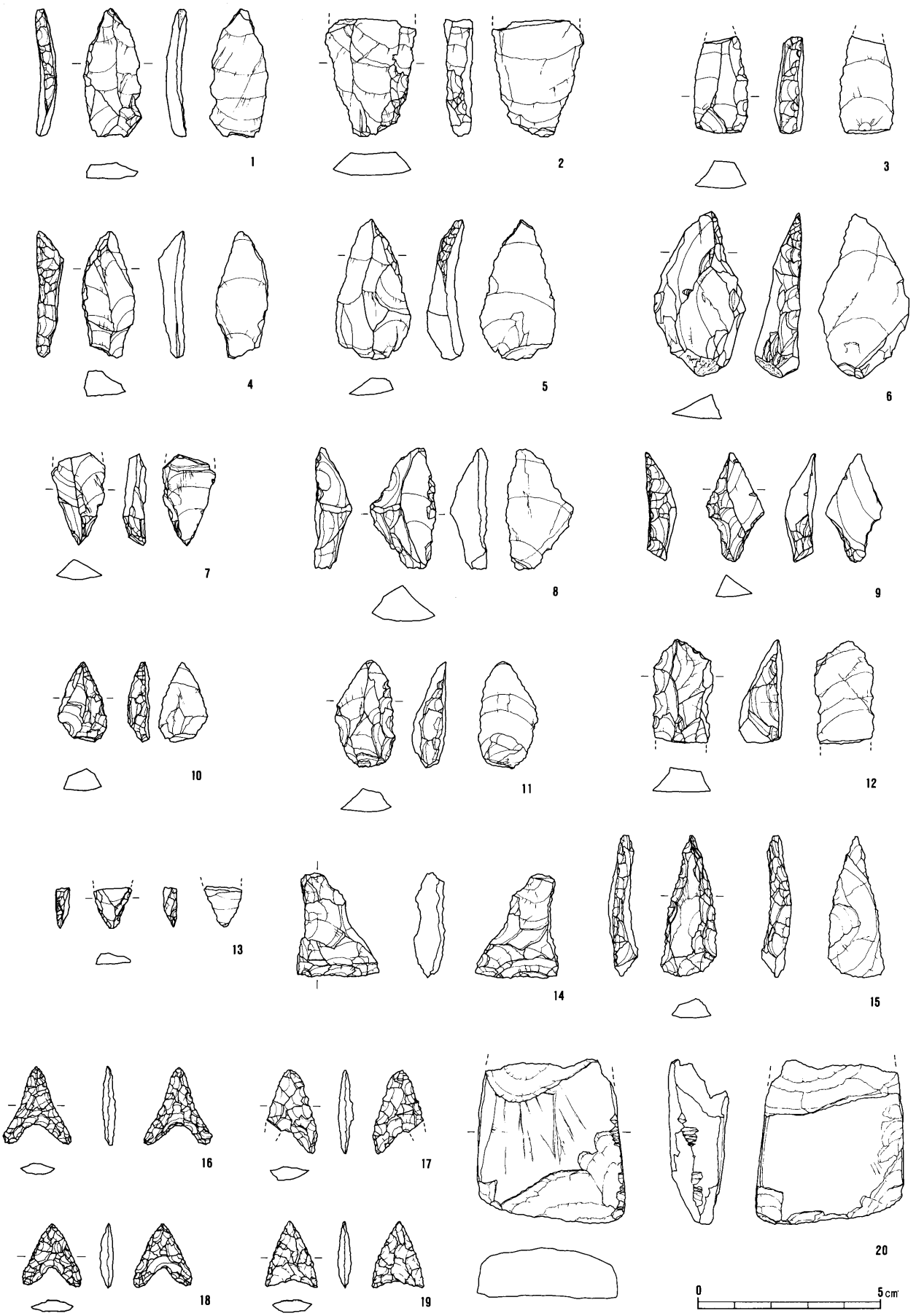
＜掘立柱建物＞

遺構名	規模 桁行×梁間	総柱・側柱の別	桁行(m) 柱間（西から）	梁行(m) 柱間（北から）	方位	柱穴掘形			柱痕径(cm)	時期	備考
						形状	径(cm)	深(cm)			
ＳＢ４	２間×１間 以上　以上	不明	2.7以上 ―＋1.05＋1.65	1.2以上 ―＋1.2	N58°E 東西棟？	円形	約50	約70	約20～30	７世紀代	
ＳＢ５	４間×３間	総柱	4.15 1.3＋1.55＋1.3	3.25 1.05＋1.15＋1.05	N65°E 東西棟	円形	約50（身舎） 約30（床束）	約70（身舎） 約40（床束）	約25～30	７世紀代	

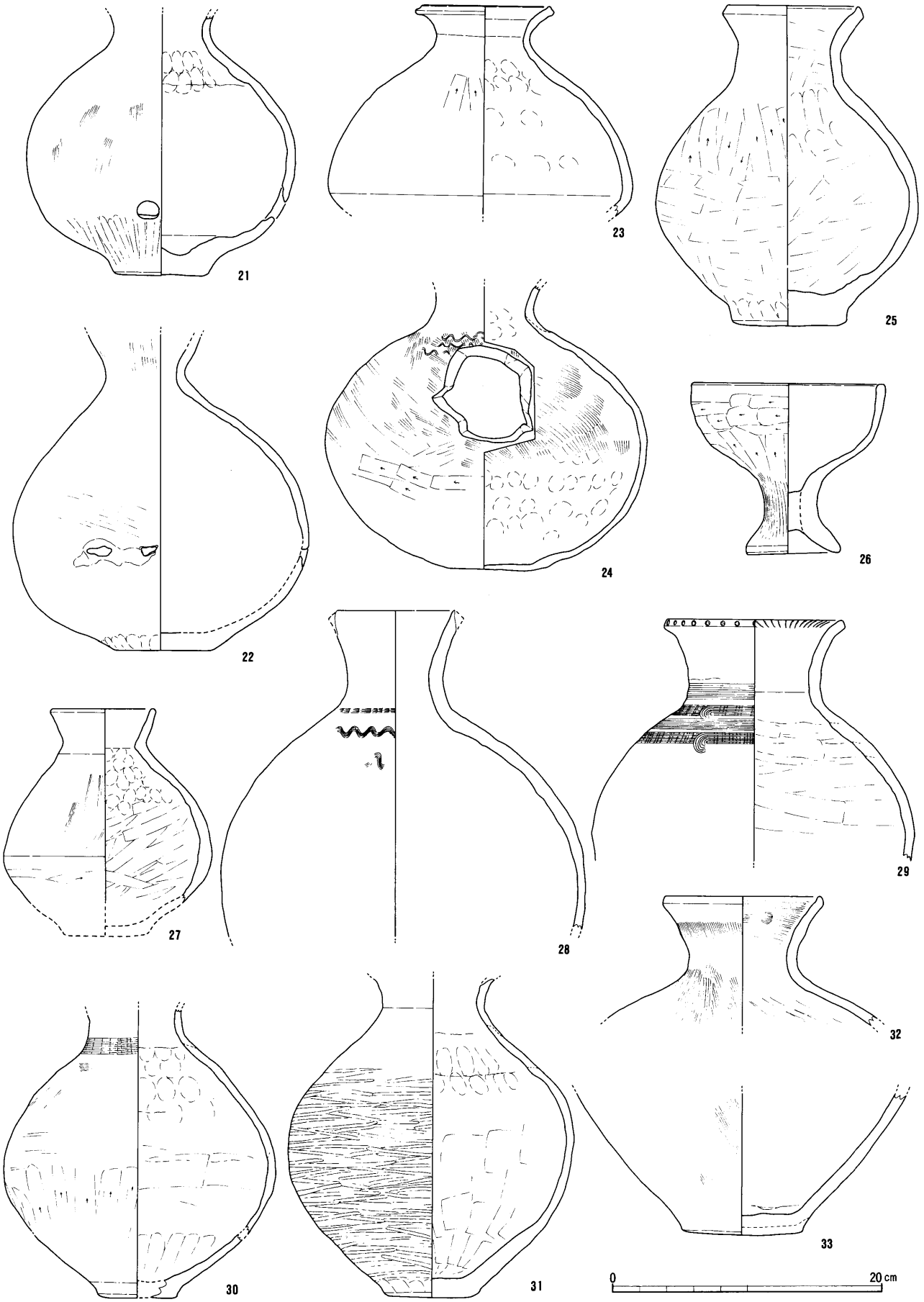
＜土坑＞

遺構名	規模(m)（東西×南北）	深さ(cm)	形状	時期	備考	遺構名	規模(m)（東西×南北）	深さ(cm)	形状	時期	備考
ＳＫ13	2.8×？	50	隅丸方形	弥生時代後期初頭		ＳＫ９	0.8×0.7	25	隅丸方形	７世紀代か？	
ＳＫ２	2.6×1.1	20	不定楕円形	古墳時代後期	土坑墓の可能性あり	ＳＫ11	1.8×4.0	35	不定形	７世紀代	
ＳＫ８	1.1×0.9	15	隅丸方形	古墳時代後期か？		ＳＫ14	2.4×2.4	5	不定形	７世紀代	

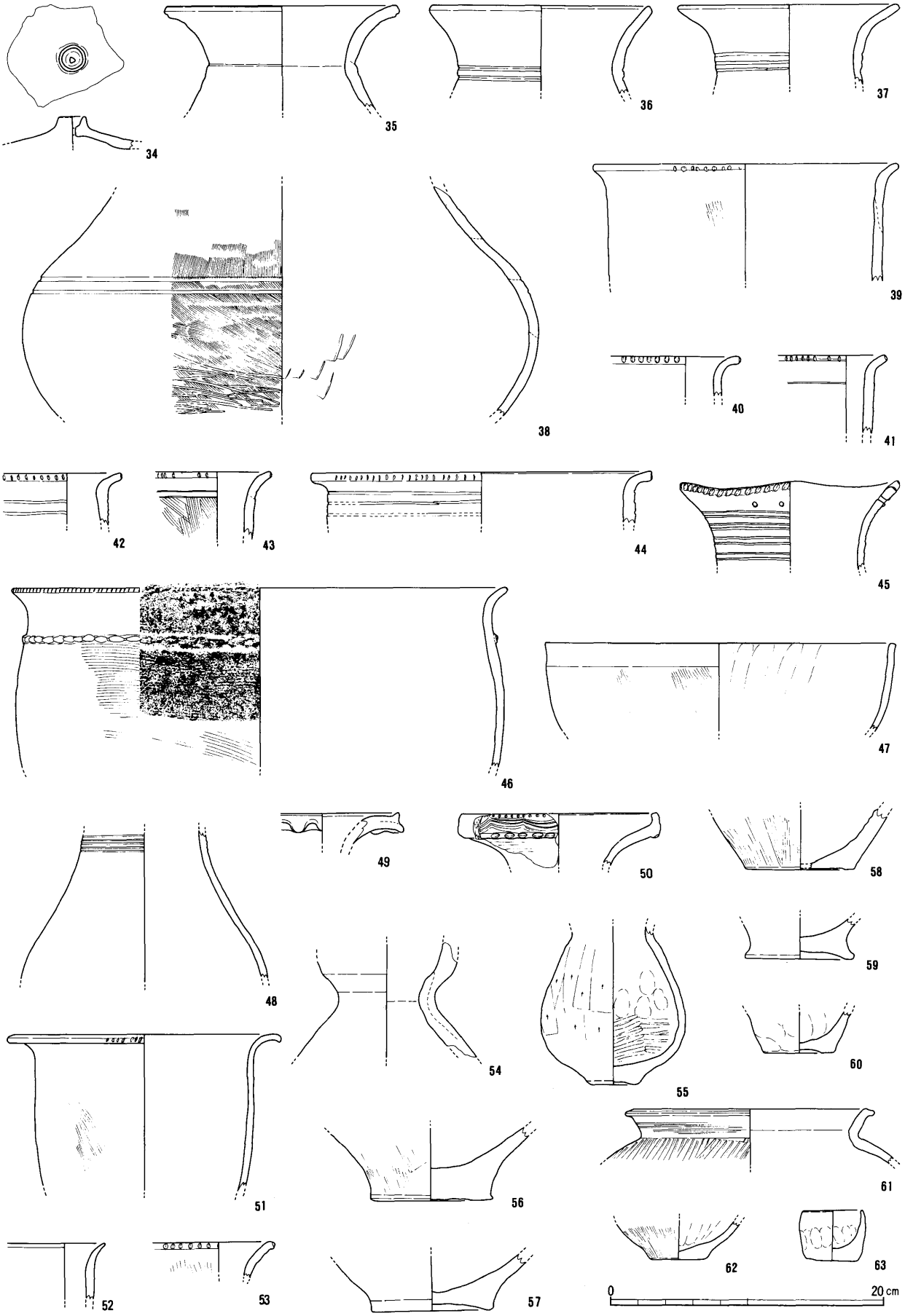
第２表　遺構観察表



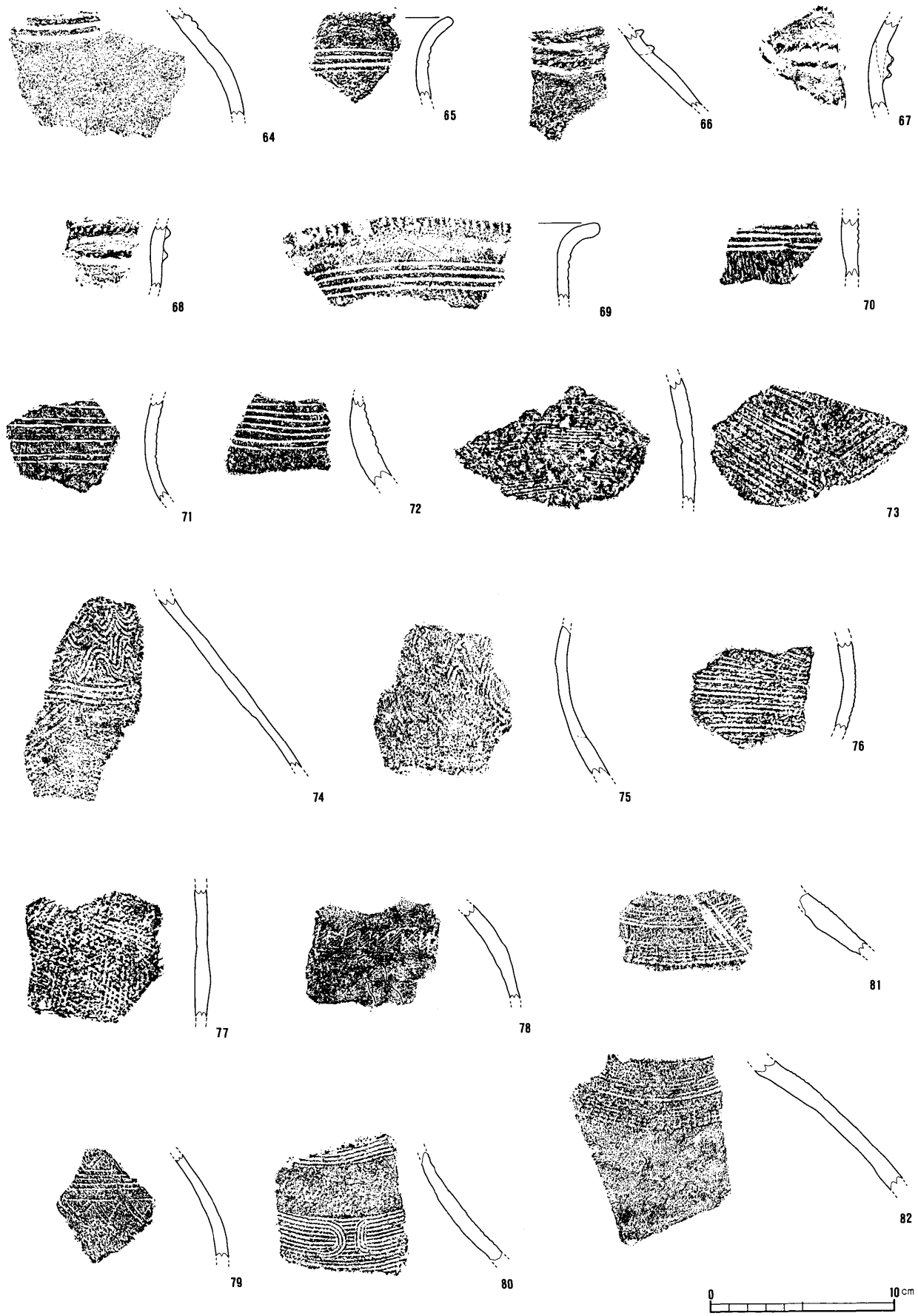
第16図　出土遺物実測図（1）旧石器時代・縄文時代（2：3）



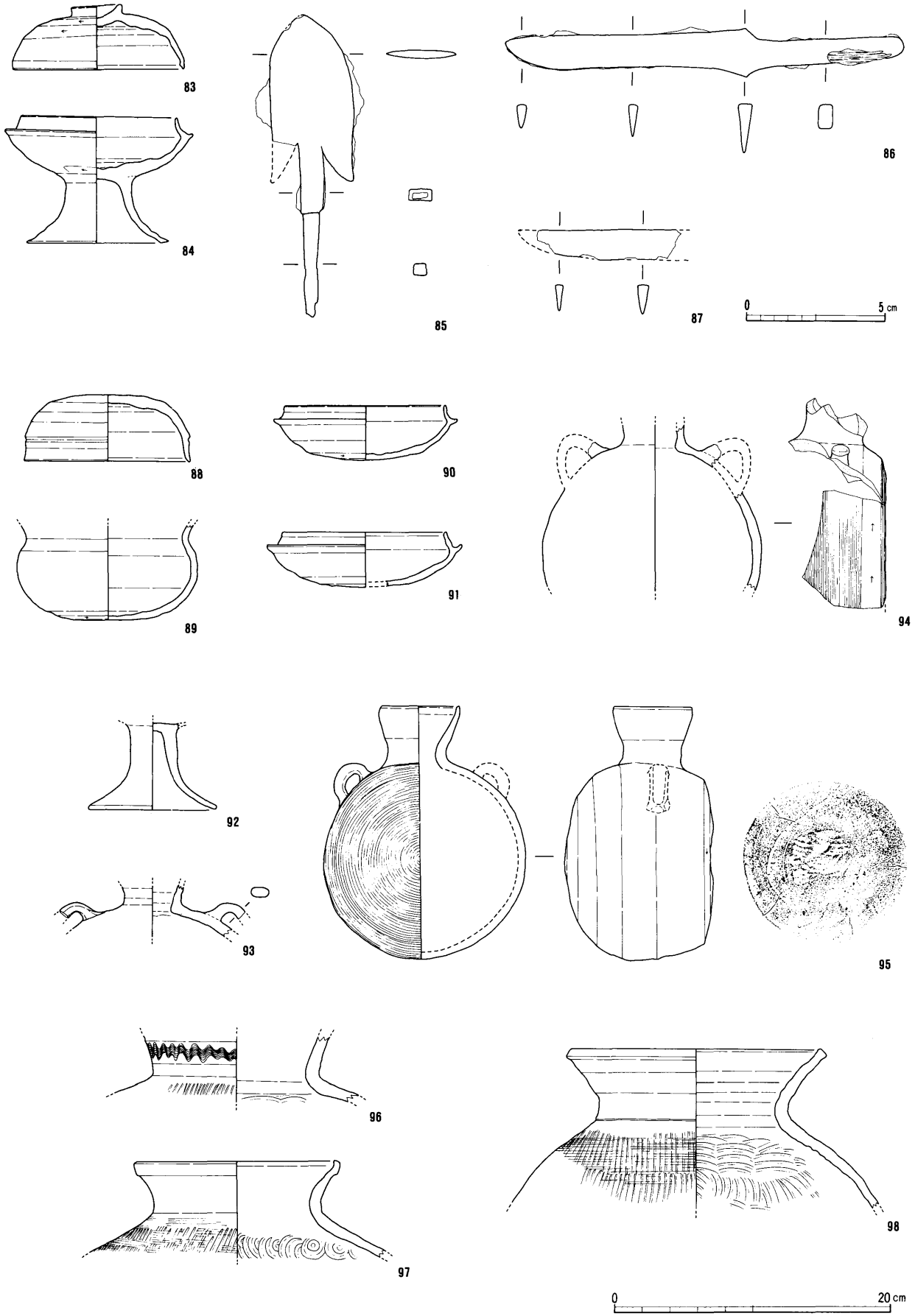
第17図　出土遺物実測図（2）弥生時代後期（1：4）



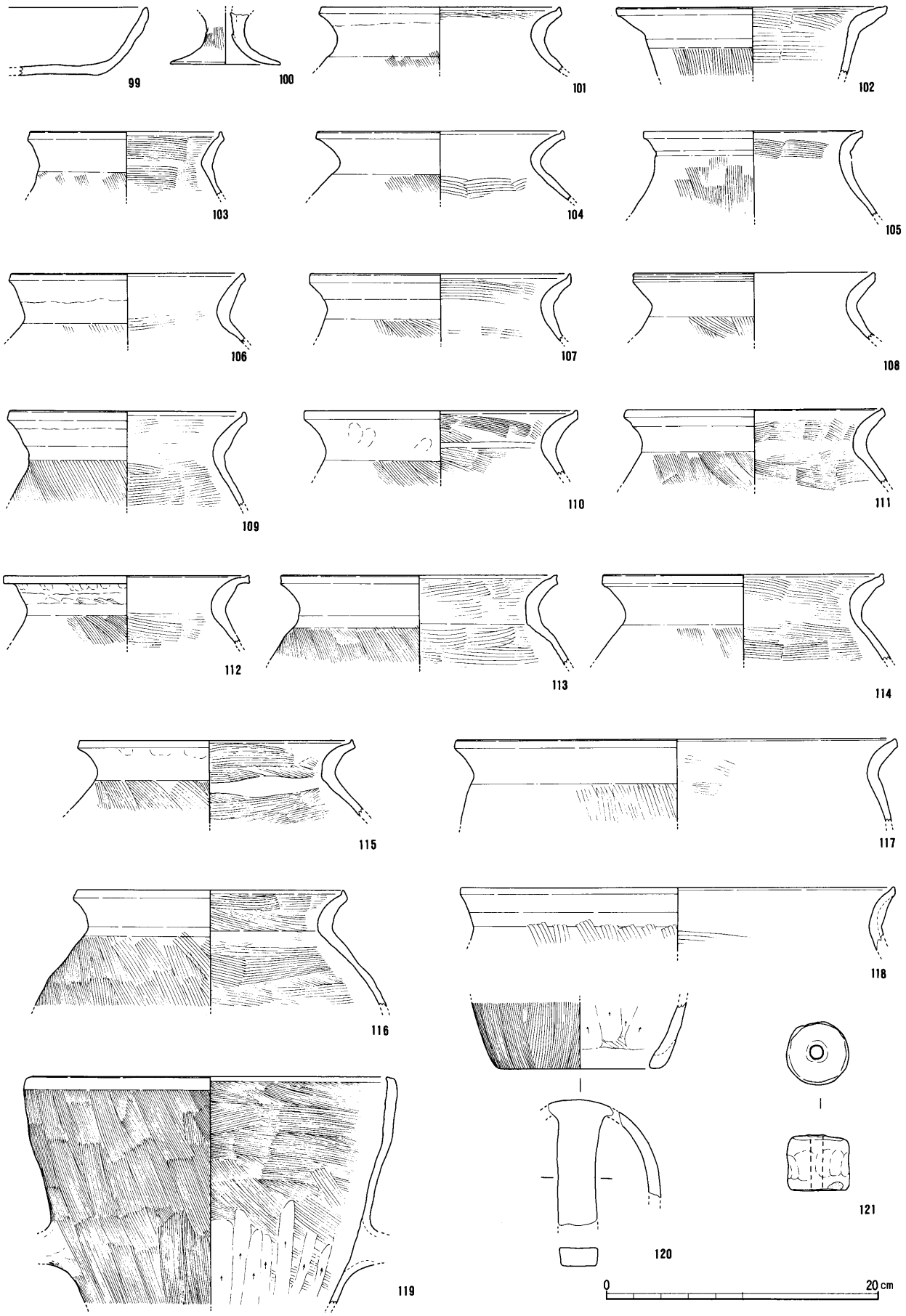
第18図　出土遺物実測図（3）弥生時代前期～中期・古墳時代前期（1：4）



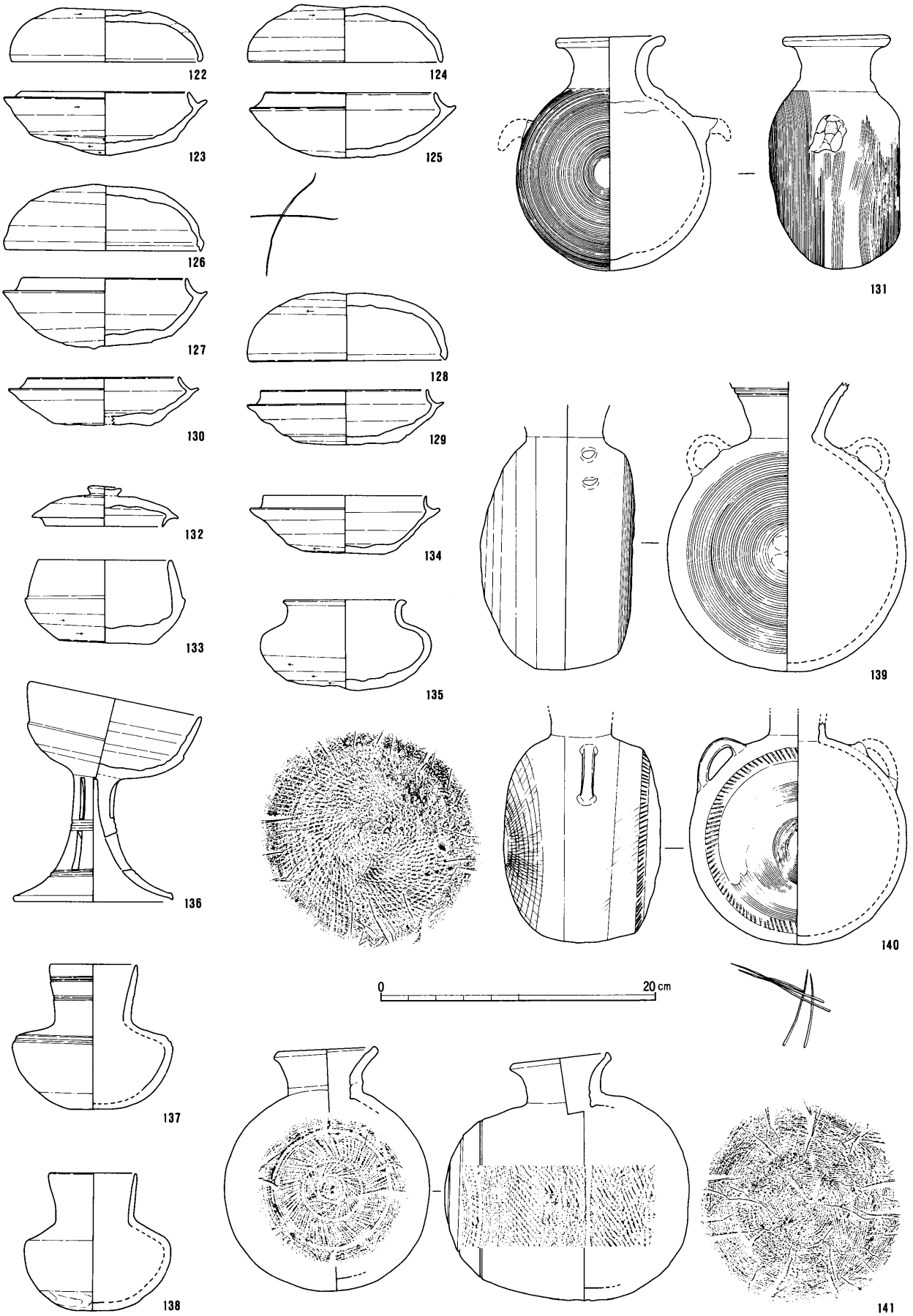
第19図　出土遺物実測図（4）弥生時代前期～中期（1：3）



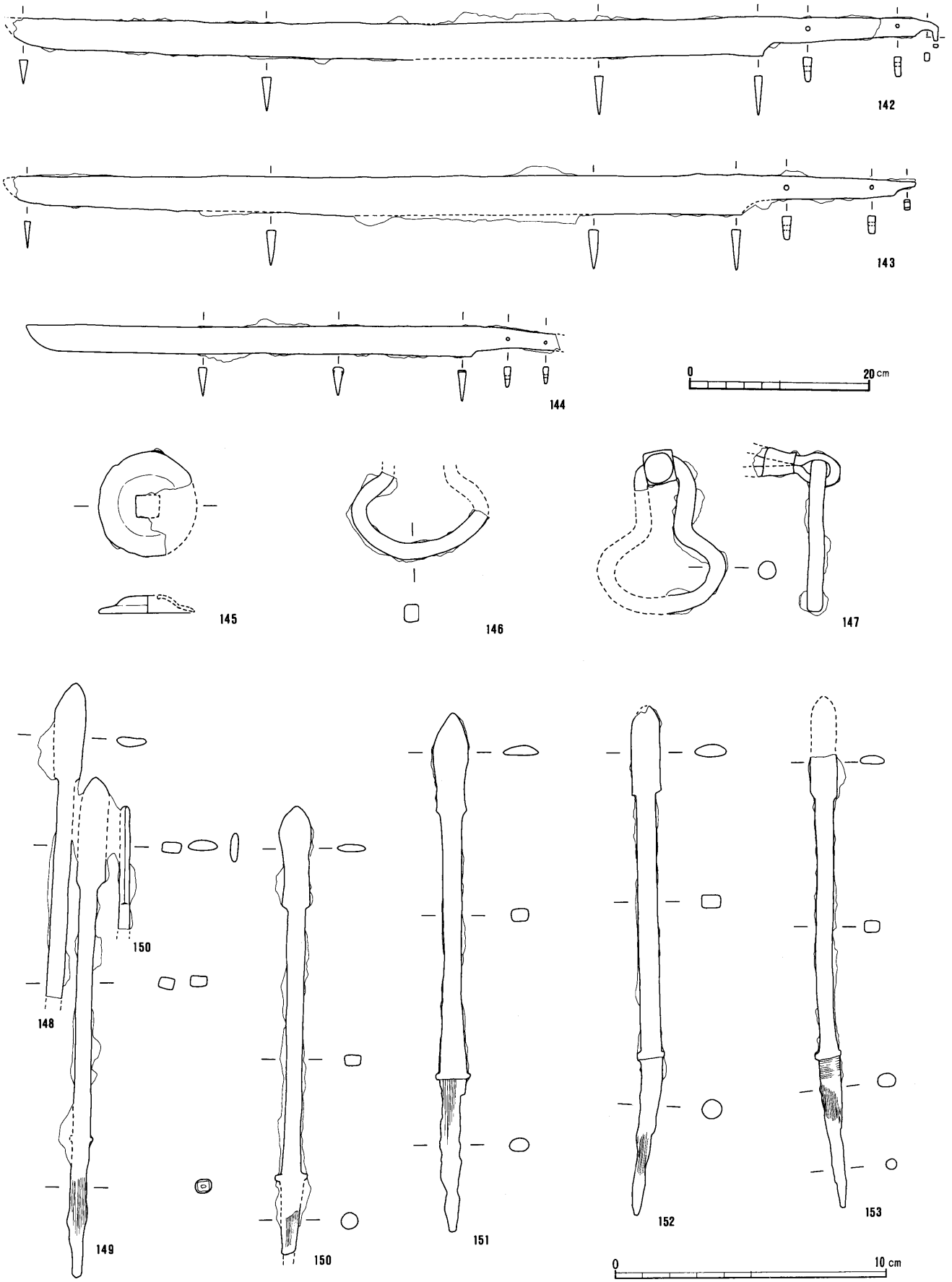
第20図　出土遺物実測図（5）1号墳出土遺物（須恵器ほか）（1：4、85～87のみ1：2）



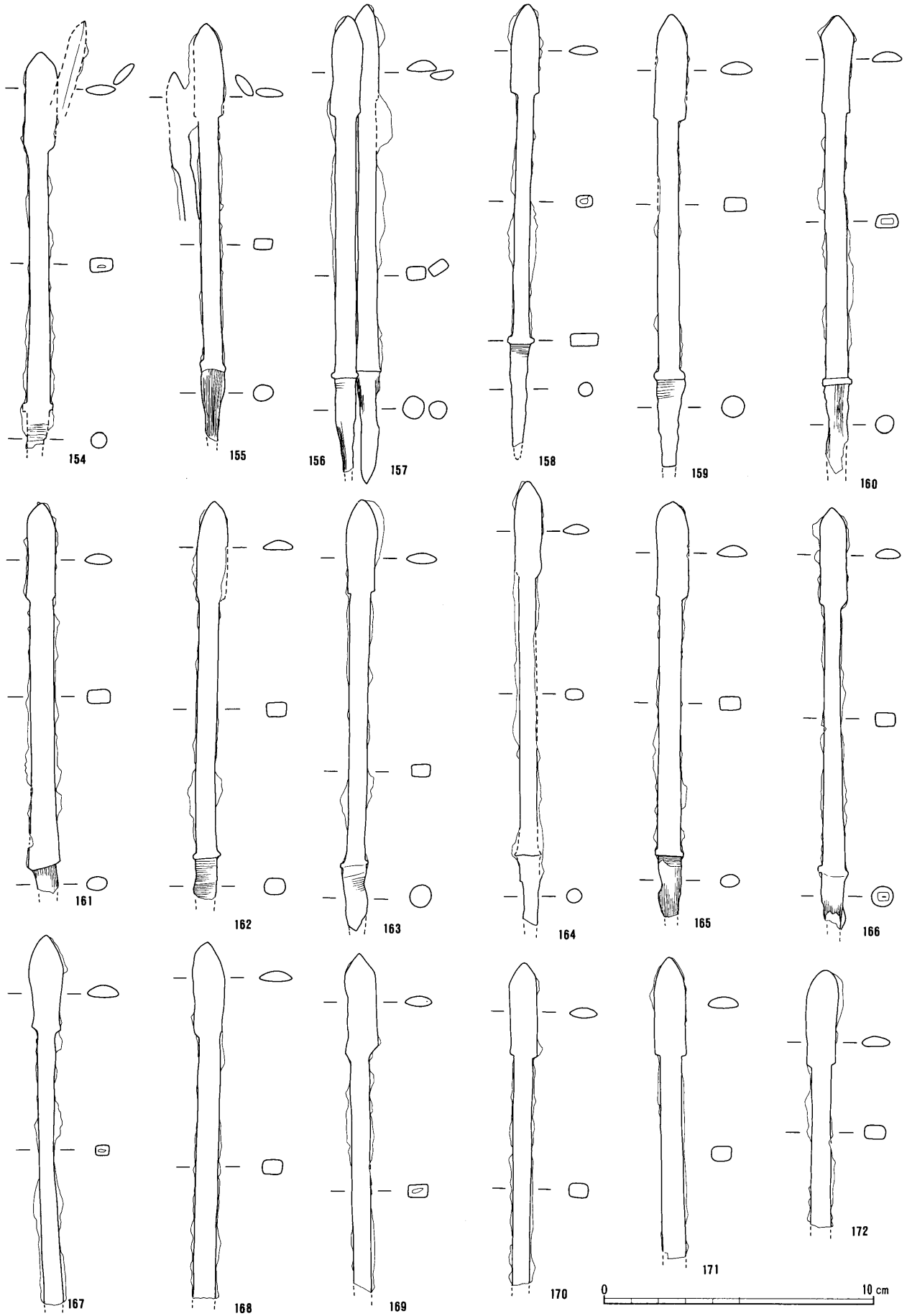
第21図　出土遺物実測図（6）1号墳出土遺物（土師器）（1：4）



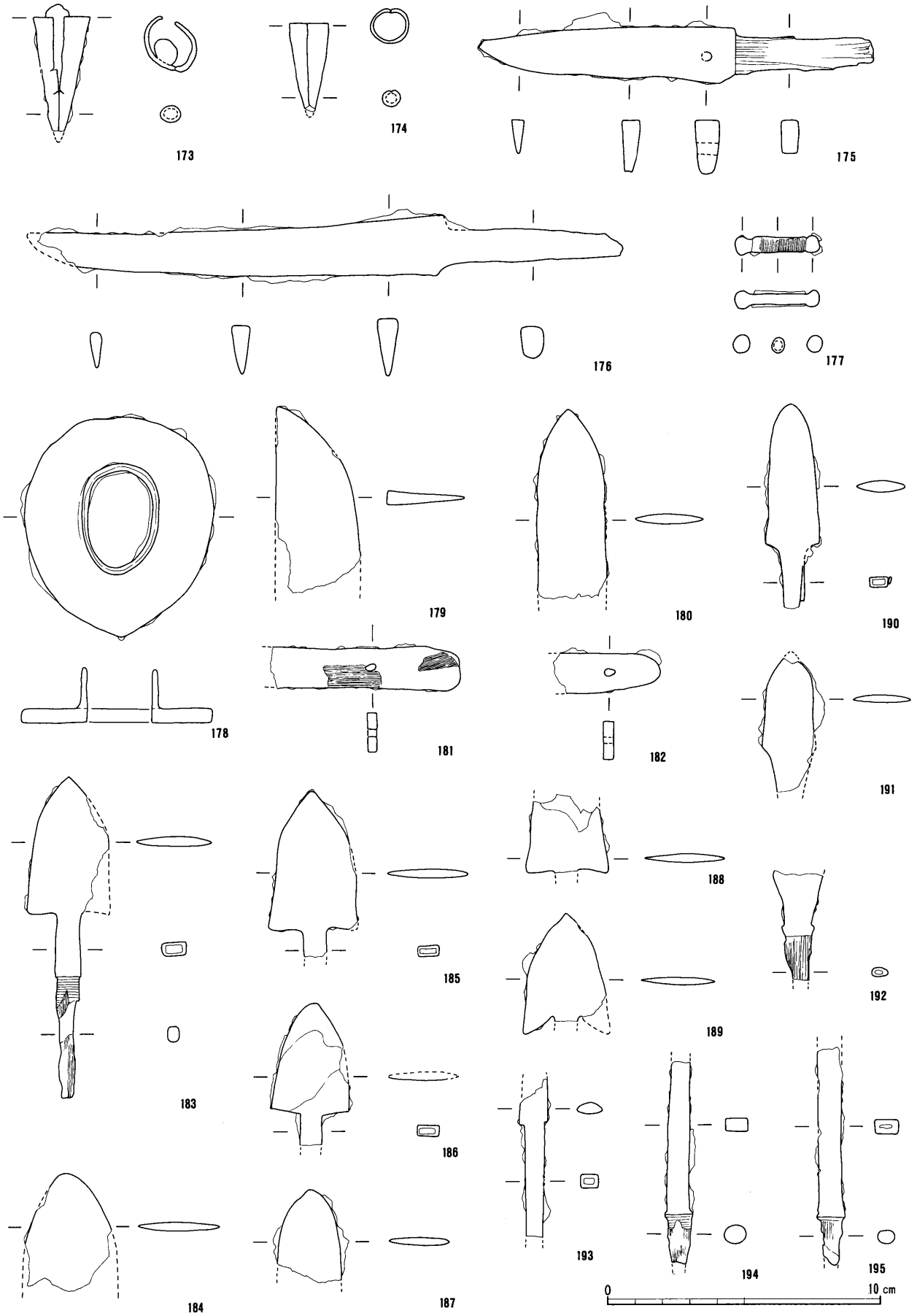
第22図　出土遺物実測図（7）３号墳埋葬施設１・埋葬施設２（１：４）



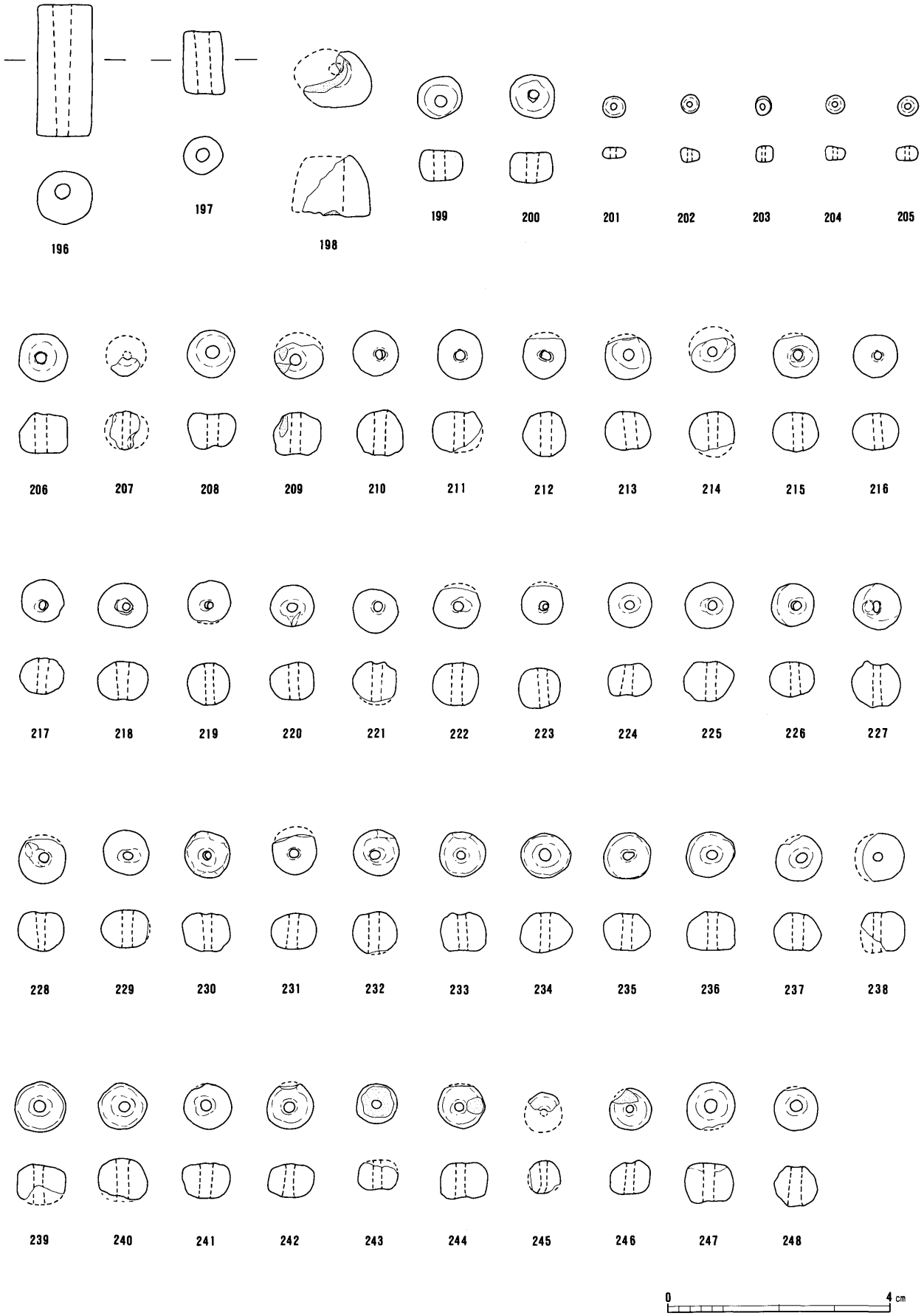
第23図　出土遺物実測図（8）3号墳出土鉄製品（142～144は1：6、145～153は1：2）



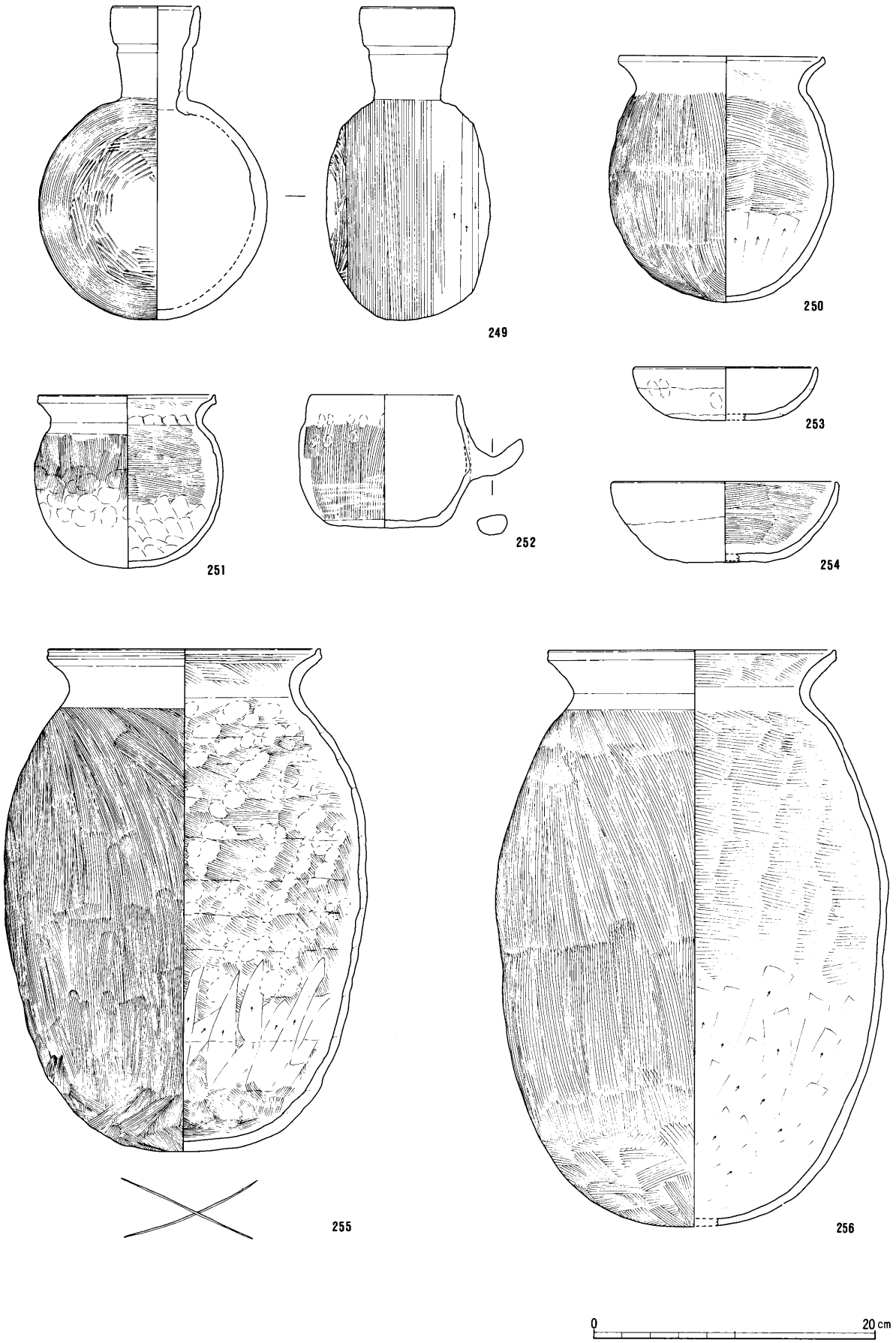
第24図　出土遺物実測図（9）3号墳出土鉄製品（1：2）



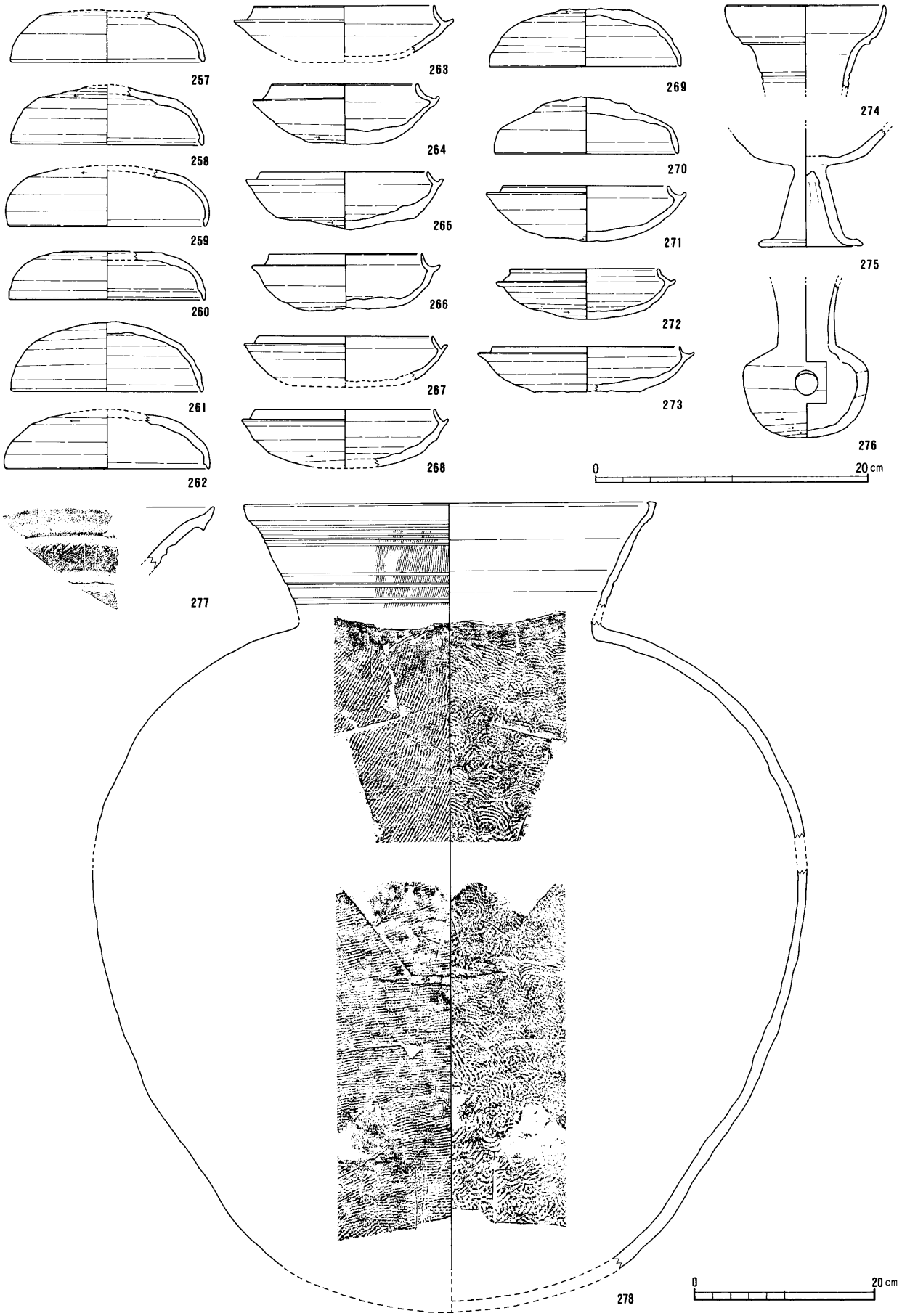
第25図　出土遺物実測図（10）3号墳出土鉄製品（1：2）



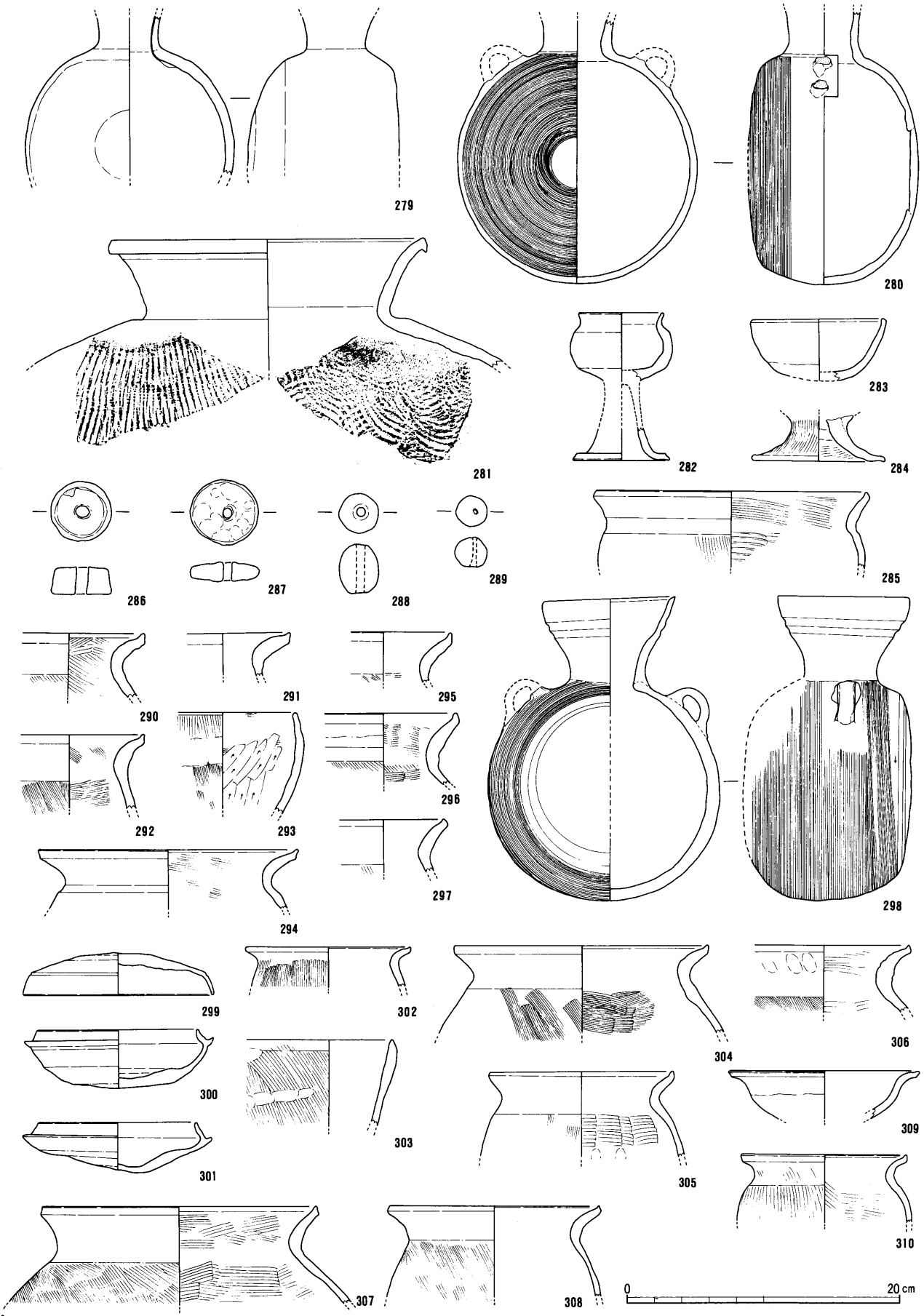
第26図　出土遺物実測図（11）３号墳出土玉類（１：１）



第27図　出土遺物実測図（12）３号墳甕棺墓・「方形部」出土遺物（１：４）



第28図　出土遺物実測図（13）３号墳墳丘・周溝出土遺物（１：４、278のみ１：６）



第29図　出土遺物実測図（14）３号墳墳丘・周溝、その他遺構出土遺物（１：４）

＜石器＞

報告番号	登録番号	器種	地区	遺構	計測値（cm、g） 長さ	幅	厚さ	重さ	石材	残存度
1	79-2	ナイフ形石器	G 4	S D 16	3.49	1.60	0.40	2.7	チャート	完存
2	81-1	ナイフ形石器	－	3号墳④旧表土	3.24	2.45	0.73	6.6	チャート	上部欠損
3	80-1	ナイフ形石器	－	3号墳②盛土	2.65	1.49	0.75	3.7	チャート	上部欠損
4	79-1	ナイフ形石器	F 6	S K 15	3.43	1.40	0.71	3.0	チャート	完存
5	82-1	ナイフ形石器	C 6	包含層	3.82	2.02	0.87	5.1	チャート	完存
6	87-1	ナイフ形石器	－	3号墳盛土	4.50	2.50	6.50	10.4	チャート	完存
7	77-3	ナイフ形石器	－	1号墳①周溝	2.50	1.40	0.60	4.0	チャート	上部欠損
8	81-2	ナイフ形石器	－	3号墳①盛土	3.29	1.79	0.93	4.0	チャート	完存
9	77-1	ナイフ形石器	－	3号墳④攪乱部	2.95	1.55	0.80	5.0	チャート	完存
10	77-2	ナイフ形石器	E 5	S H 6	2.20	1.30	0.70	4.0	チャート	完存

報告番号	登録番号	器種	地区	遺構	計測値（cm、g） 長さ	幅	厚さ	重さ	石材	残存度
11	78-1	ナイフ形石器	－	3号墳①盛土	2.90	1.60	0.88	3.7	チャート	完存
12	80-2	ナイフ形石器	H 3	包含層	2.83	1.60	1.13	5.5	チャート	下部欠損
13	78-2	ナイフ形石器	－	3号墳②盛土	1.10	0.98	0.35	0.4	チャート	大きく欠損
14	82-2	楔形石器	－	1号墳④盛土	2.85	2.24	0.82	4.2	チャート	完存
15	83-1	角錐状石器	－	3号墳②旧表土	3.82	1.51	0.61	5.5	チャート	完存
16	84-2	石鏃	－	3号墳旧表土	2.08	1.83	0.31	1.5	チャート	完存
17	85-2	石鏃	－	1号墳④盛土	2.30	1.30	0.36	0.7	チャート	一部欠損
18	85-1	石鏃	－	3号墳③墳丘	1.73	1.57	0.35	0.7	チャート	完存
19	84-1	石鏃	－	3号墳②盛土	1.80	1.41	0.32	1.1	サヌカイト	完存
20	86-1	砥石	－	1号墳①周溝	8.96	8.0	2.86	294	砂岩	上部欠損

＜土器＞

報告番号	登録番号	器種	地区	遺構	計測値（cm） 口径	器高	その他	調整・技法上の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
21	1-1	弥生土器　広口壺	G 7	S X 22	不明	不明	底部径7.0前後	内：ヨコナデ・オサエ・工具ナデ 外：ヨコナデ・オサエ・タテハケ・ミガキ	やや粗	良	にぶい橙	底部完存	底部付近に穿孔あり
22	37-1	弥生土器　広口壺	H 5	S X 22	不明	不明	底部径7.0前後	内：ナデ 外：体部摩耗により不明・低部オサエ・ナデ	やや粗	良	にぶい黄橙	底部完存	
23	51-1	弥生土器　広口壺	K 5	S X 23	10.2	不明		内：口縁部ヨコナデ・体部オサエ・ナデ 外：体上部ミガキ・体下部ナデ	やや粗	良	浅黄橙	口縁部ほぼ完存	
24	50-1	弥生土器　広口壺	L 3	S X 23	不明	不明	体部径24.0前後	内：ナデ・体中央タテハケ 外：体上半ハケ後櫛描波状文・体下半ケズリ	やや密	良	橙	体部径2/3	体部穿孔か
25	37-2	弥生土器　広口壺	L 3	S X 23	9.5前後	23.5	底部径8.5前後	内：ヨコナデ・ナデ・オサエ・体下半工具ナデ 外：ヨコナデ・ナデ・体上部ケズリ・体下半ナデ	粗	良	にぶい橙	口径1/3	
26	48-1	弥生土器　高杯	L 7	S K 13	14.5前後	12.6	底部径7.0前後	内：ヨコナデ・ナデ・オサエ 外：ヨコナデ・体部ケズリ・脚部ハケメ	密	良	橙	口径3/4	
27	48-2	弥生土器　広口壺	L 7	S K 13	9.0前後	不明	体部径15.3	内：ヨコナデ・オサエ・工具ナデ 外：ヨコナデ・工具ナデ・ミガキ	やや粗	良	にぶい橙	口径1/2	
28	49-1	弥生土器　広口壺	L 7	S K 13	不明	不明	頸部径7.0前後	内：ヨコナデ・ナデ・オサエ 外：ヨコナデ・ナデ後櫛描波状文	粗	良	浅黄橙	頸部完存	
29	54-1	弥生土器　広口壺	P 4	S D 24	13.0前後	不明		内：口縁部ナデ後櫛原体刺突文・体部工具ナデ 外：口縁端部竹管文・体上部櫛描簾状文	やや粗	良	淡黄	口径1/3	
30	52-1	弥生土器　広口壺	P 4	S D 24	不明	不明	底部径6.0前後	内：ナデ・オサエ・板ナデ 外：体上部ヨコハケ・頸部櫛描簾状文・体下部ケズリ	やや粗	良	にぶい黄橙	体部径1/5	
31	53-1	弥生土器　壺	P 4	S D 24	不明	不明	底部径6.0前後	内：頸～体上部ナデ・オサエ・体下部工具ナデ 外：頸～体上部ヨコナデ・体下部ミガキ	やや粗	良	橙	体部2/3	
32	70-1	弥生土器　壺	P 4	S D 24	11.5前後	不明		内：口縁部ヨコハケ・体部工具ナデ 外：口縁部ヨコナデ・頸部～体部タテハケ	密	良	黄橙	口径1/2	
33	70-2	弥生土器　壺	P 4	S D 24	不明	不明	底部径9.0前後	内：工具ナデ・ナデ 外：タテハケ・底部ナデ	密	良	内：灰黄褐色 外：黄橙色	底部9/10	
34	25-6	弥生土器　壺蓋	－	3号墳③旧表土	不明	不明	ツマミ径2.0前後	内：ナデ 外：ナデ・ツマミ中央に穿孔	やや粗	良	浅黄橙	つまみ完存	
35	56-2	弥生土器　壺	－	1号墳①旧表土	16.5前後	不明		内：ナデ 外：ナデ？・口縁部と頸部との境を段で区画	粗	良	にぶい黄橙	口径1/4	
36	21-3	弥生土器　壺	－	1号墳盛土	16.0前後	不明		内：ヨコナデ・ナデ 外：ヨコナデ・２条のヘラ沈線	やや粗	良	明黄褐	口径1/6	
37	55-3	弥生土器　壺	H 5	1号墳①旧表土	16.0前後	不明		内：ヨコナデ 外：ヨコナデ・口縁部と頸部の境は段＋２条の沈線	やや粗	良	浅黄橙	口径1/8	
38	68-1	弥生土器　壺	H 7	S K 26	不明	不明	最大径37.5前後	内：ナデ・工具ナデ 外：タテハケ後ミガキ・頸、体部の境は段＋沈線１条	良	良	橙	体部径1/6	
39	70-3	弥生土器　甕	－	3号墳⑤旧表土	22.0前後	不明		内：不明 外：口縁端部にキザミ、体部タテハケ	粗	良	灰白	口径1/3	
40	72-6	弥生土器　甕	－	3号墳⑥旧表土	不明	不明		内：ナデ 外：ナデ、口縁端部に太いキザミ	粗	良	淡黄灰	小片	
41	72-8	弥生土器　甕	－	1号墳③旧表土	不明	不明		内：ヨコナデ、ナデ 外：口縁端部にキザミ・体部に１条のヘラ描文	やや粗	良	淡黄灰	小片	
42	35-4	弥生土器　甕	N 7	S X 22	不明	不明		内：ヨコナデ・ナデ 外：口縁端部にキザミ・体部に２条のヘラ沈線	やや粗	良	浅黄橙	小片	
43	73-8	弥生土器　甕	I 6	1号墳④旧表土	不明	不明		内：ヨコナデ・ナデ 外：口縁端部キザミ・体部タテハケ２条のヘラ沈線	密	良	淡黄灰	小片	
44	20-2	弥生土器　甕	－	1号墳盛土	25.0前後	不明		内：ナデ・ヨコナデ 外：口縁端部にキザミ・体部３条のヘラ沈線	やや粗	良	浅黄橙	口径1/6	
45	56-3	弥生土器　壺	－	3号墳⑤旧表土	15.8	不明		内：ナデ　外：ナデ後半截竹管で４組以上の沈線文・波状口縁・口縁部に２点穿孔	やや粗	良	橙	口径1/5	
46	55-1	弥生土器　甕	－	3号墳⑤旧表土	36.0前後	不明		内：ナデ 外：体部貝殻条痕・頸部突帯貼り付け後指オサエ	やや粗	良	浅黄橙	口径1/5	
47	71-6	弥生土器　鉢	－	3号墳⑥旧表土	25.5前後	不明		内：ナデ 外：口縁端面取り・体部タテハケ	やや粗	良	浅黄橙	口径1/10	
48	56-1	弥生土器　壺	－	3号墳⑥旧表土	不明	不明		内：ナデ 外：ナデ後頸部に４条のヘラ描沈線文	粗	良	浅黄橙	頸部径1/4	
49	71-2	弥生土器　壺	－	1号墳③旧表土	不明	不明		内：ナデ 外：ナデ・口縁端部オサエにより波状を呈する	粗	良	淡黄	小片	
50	1-3	弥生土器　壺	－	1号墳周溝直上	14.5前後	不明		内：ナデ 外：ミガキ後口縁部に施文	やや粗	良	橙	口縁1/5	
51	70-4	弥生土器　甕	－	3号墳⑥旧表土	18.5前後	不明		内：ナデ 外：口縁端部にキザミ、体部タテハケ	粗	良	黄橙	口径1/8	
52	73-7	弥生土器　甕	－	1号墳①旧表土	不明	不明		内：ヨコナデ・ナデ 外：ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい橙	小片	
53	74-3	弥生土器　甕	－	3号墳⑥旧表土	不明	不明		内：ナデ 外：タテハケ・口縁部部にキザミ	やや粗	良	明赤褐	小片	
54	21-2	弥生土器　壺	－	1号墳盛土	不明	不明	頸部径7.0	内：ナデ 外：ナデ	やや粗	良	黄灰	頸部完存	

第３表　遺物観察表（1）

報告番号	登録番号	器種	地区	遺構	計測値(cm) 口径	器高	その他	調整・技法上の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
55	56-4	弥生土器 ミニチュア壺	－	1号墳(3) 旧表土	不明	不明	底部径3.3	内：体上部オサエ・ナデ・体下部ヨコミガキ 外：体上部ケズリ・体下部ナデ	やや粗	良	にぶい橙	体部径4/5	
56	35-1	弥生土器 壺	G5	包含層	不明	不明	底部径9.0前後	内：ナデ 外：体部ハケメ・底部オサエ・ナデ	やや粗	良	にぶい橙	底径1/2	
57	21-4	弥生土器 壺	－	1号墳 旧表土	不明	不明	底部径8.4	内：ナデ 外：ナデ	粗	良	浅黄橙	底部完存	
58	35-5	弥生土器 甕	H6	SX22	不明	不明	底部径8.0前後	内：摩耗大きく不明 外：タテハケ・底部ナデ	粗	良	浅黄橙	底径1/2	
59	21-6	弥生土器 甕	－	1号墳 盛土	不明	不明	底部径8.0	内：ナデ 外：ナデ	やや粗	良	橙	底部完存	外面～底に二次焼成を受ける
60	71-3	弥生土器 甕	－	3号墳(4) 下層	不明	不明	底部径5.2	内：ナデ・オサエ 外：ナデ	密	良	黄橙	底部完存	
61	55-2	土師器 甕	－	3号墳(4) 旧表土	17.0前後	不明		内：ヨコナデ・ナデ 外：口縁部ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	にぶい黄橙	口径1/5	
62	71-4	土師器 小型壺	P4	SD24	不明	不明	底部径4.0	内：ナデ 外：タテハケ・底ナデ	やや粗	良	浅黄橙	底部完存	
63	55-4	土製 手捏土器	－	3号墳(3) 旧表土	4.0前後	不明	底部径3.8	内：オサエ・ナデ 外：オサエ・ナデ	やや粗	良	浅黄橙	底部完存	
64	1-2	弥生土器 壺	－	1号墳 周溝直上	不明	不明		内：ナデ 外：ナデ・頸、体部の境は段＋沈線1条	やや粗	良	にぶい黄橙	小片	
65	73-3	弥生土器 壺	－	3号墳(5) 旧表土	不明	不明		内：ナデ 外：ナデ・口縁、頸部境を段＋3条の沈線で区画	やや粗	良	暗い黄灰	小片	
66	72-1	弥生土器 壺	－	1号墳(3) 旧表土	不明	不明		内：ナデ 外：ナデ後突帯貼り付け後キザミ	やや粗	良	黄灰	小片	
67	21-1	弥生土器 壺	－	1号墳 盛土	不明	不明		内：ナデ 外：ナデ後突帯貼り付け後キザミ	やや粗	良	橙	小片	
68	20-4	弥生土器 壺	－	1号墳 盛土	不明	不明		内：ナデ 外：突帯貼り付け後キザミ	やや粗	良	浅黄橙	小片	
69	25-5	弥生土器 甕	－	3号墳(1) 旧表土	不明	不明		内：ハケメ 外：口縁端部右下がりキザミ・半截竹管2条	やや粗	良	橙	小片	
70	73-6	弥生土器 甕	－	3号墳(4) 旧表土	不明	不明		内：摩耗により不明 外：タテハケ後半截竹管による2単位の沈線文	やや粗	良	浅赤褐	小片	
71	73-4	弥生土器 壺	－	3墳号(6) 旧表土	不明	不明		内：摩耗により不明 外：ナデ後半截竹管による4単位以上の沈線文	やや粗	良	橙	小片	
72	73-5	弥生土器 壺	－	3号墳(6) 旧表土	不明	不明		内：ナデ 外：ナデ後半截竹管による4単位以上の沈線文	やや密	良	橙	小片	
73	72-5	弥生土器 壺？	－	3号墳(6) 旧表土	不明	不明		内：ナデ 外：貝殻条痕による羽状文	粗	良	暗黄灰	小片	
74	72-3	弥生土器 壺	－	3号墳(6) 旧表土	不明	不明		内：ナデ 外：貝殻条痕による波状文・羽状文	粗	良	暗黄灰	小片	
75	72-2	弥生土器 壺	－	3号墳(6) 旧表土	不明	不明		内：ナデ 外：貝殻条痕による波状文	粗	良	黄灰	小片	
76	74-1	弥生土器 壺？	－	3号墳(6) 旧表土	不明	不明		内：オサエ・ナデ 外：貝殻条痕	粗	良	浅黄橙	小片	
77	74-2	弥生土器 壺？	－	3号墳(6) 旧表土	不明	不明		内：オサエ・ナデ 外：貝殻条痕	粗	良	浅黄橙	小片	
78	48-3	弥生土器 壺	L7	SK13	不明	不明		内：ナデ 外：櫛描弧状文・波状文	やや粗	良	内：黄灰 外：黒褐	小片	
79	73-2	弥生土器 壺	－	3号墳 旧表土	不明	不明		内：摩耗により不明 外：ナデ後半截竹管による幾何学文	やや粗	良	茶褐色	小片	
80	35-3	弥生土器 壺	H6	SX22	不明	不明		内：ナデ？ 外：ナデ後櫛描文（疑似流水文）	やや粗	良	にぶい黄橙	小片	
81	28-5	弥生土器 壺	－	3号墳(6) 盛土	不明	不明		内：オサエ・ナデ 外：櫛描文・簾状文	やや粗	良	にぶい黄橙	小片	82と同一個体か
82	28-4	弥生土器 壺	－	3号墳(6) 盛土	不明	不明		内：オサエ・ナデ 外：櫛描文・簾状文	やや粗	良	にぶい黄橙	小片	82と同一個体か
83	19-5	須恵器 蓋	－	1号墳 埋葬施設	12.4	4.7	ツマミ径3.6	内：回転ナデ 外：回転ナデ・回転ケズリ・ツマミ貼付け	密	良	灰 赤灰	完存	84とセット
84	19-6	須恵器 高杯	－	1号墳 埋葬施設	11.3	9.1	受部径13.5 底部径10.2	内：回転ナデ 外：回転ナデ・ケズリ	密	良	灰 赤灰	完存	83とセット
88	3-1	須恵器 杯蓋	－	1号墳(2) 周溝上面	12.0前後	4.7		内：回転ナデ 外：回転ナデ・回転ケズリ	やや粗	良	にぶい黄橙	口径1/6	
89	4-2	須恵器 小型壺	－	1号墳 周溝	不明	不明	体部最大径13.0前後	内：回転ナデ 外：回転ナデ・底部回転ケズリ	やや粗	良	にぶい黄	体部1/2	
90	3-2	須恵器 杯身	－	1号墳(1) 周溝	13.5前後	3.9	受部径13.5前後	内：回転ナデ・オサエ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	やや粗	良	灰白	口径1/4	
91	3-5	須恵器 杯身	－	1号墳(4) 周溝	12.0前後	4.0前後	受部径14.0前後	内：回転ナデ 外：回転ナデ・回転ケズリ	密	良	灰	口径1/4	
92	3-4	須恵器 高杯	－	1号墳(1) 周溝	不明	不明	底部径9.0前後	内：回転ナデ 外：回転ナデ	やや粗	やや不良	灰白	脚上部完存	
93	18-4	須恵器 提瓶	－	1号墳(1) 周溝	不明	不明	頸部径4.0	内：回転ナデ・ナデ 外：回転ナデ・把手貼り付け	密	良	灰黄	頸部完存	
94	18-3	須恵器 提瓶	－	1号墳(4) 周溝	不明	不明	頸部径4.5	内：回転ナデ・ナデ 外：回転ナデ・カキメ・把手貼り付け	密	良	灰白	頸部完存	
95	6-1	須恵器 提瓶	－	1号墳(4) 周溝	6.0前後	18.1	体部14.5×10.5	内：回転ナデ・ナデ 外：カキメ・タタキ後回転ケズリ	密	良	灰	口径1/6	
96	4-1	須恵器 甕	－	1号墳(2) 周溝	不明	不明	頸部径12.0前後	内：頸部回転ナデ・体部あて具痕 外：頸部回転ナデ後波状文・体部タタキ	やや密	良	灰	頸部径1/6	
97	18-2	須恵器 甕	－	1号墳(2) 周溝	15.0前後	不明		内：回転ナデ・体部あて具痕 外：回転ナデ・体部タタキ後カキ目	密	良	灰	口径1/8	
98	5-1	須恵器 甕	－	1号墳(1) 周溝	18.0前後	不明		内：回転ナデ・あて具痕 外：ヨコナデ・タタキ後カキ目	やや密	良	灰	口径1/3	
99	16-1	土師器 杯	－	1号墳(3) 周溝	不明	不明		内：摩耗のため不明 外：摩耗のため不明	密	良	橙	小片	
100	19-1	土師器 高杯	－	1号墳 盛土	不明	不明	底部径8.0前後	内：絞り目を残す・端部ヨコナデ 外：ハケメ・端部ヨコナデ	やや粗	やや不良	にぶい黄橙	底径1/2	
101	2-3	土師器 甕	－	1号墳(1) 周溝	17.7	不明		内：ヨコナデ・体部タテハケ 外：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ・体部不明	粗	良	橙	口径3/4	
102	16-3	土師器 甕	－	1号墳(2) 周溝	20.0前後	不明		内：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	にぶい黄橙	口径1/8	内面の一部が赤変
103	2-2	土師器 甕	－	1号墳(1) 周溝	14.5前後	不明		内：ヨコナデ・体部タテハケ 外：ヨコナデ口縁部までヨコハケ	やや密	良	浅黄橙	口径1/2	
104	13-4	土師器 甕	－	1号墳(1) 周溝	18.0前後	不明		内：ヨコナデ・体部タテハケ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	やや不良	明赤褐・橙	口径1/5	二次焼成を受ける
105	18-1	土師器 甕	－	1号墳(3) 周溝	16.0前後	不明		内：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ・体部不明 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	やや不良	浅黄橙	口径1/4	
106	13-2	土師器 甕	－	1号墳(1) 周溝	17.5前後	不明		内：ヨコナデ・体部タテハケ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	浅黄橙	口径1/4	口縁部外面に粘土接合痕あり
107	14-2	土師器 甕	－	1号墳(1) 周溝	19.0前後	不明		内：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	にぶい黄橙	口径1/6	

第3表　遺物観察表(2)

報告番号	登録番号	器種	地区	遺構	計測値(cm) 口径	器高	その他	調整・技法上の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
108	17-4	土師器 甕	—	1号墳4)周溝	18.0前後	不明		内：摩耗が激しく不明瞭 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	にぶい黄橙	口径1/4	
109	13-1	土師器 甕	—	1号墳1)周溝	17.5前後	不明		内：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	浅黄橙	口径1/6	
110	15-4	土師器 甕	—	1号墳1)周溝	20.0前後	不明		内：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ 外：ヨコナデ・オサエ・体部タテハケ	やや粗	良	浅黄	口径3/8	
111	17-2	土師器 甕	—	1号墳4)周溝	19.0前後	不明		内：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	にぶい黄橙	口径1/4	
112	15-1	土師器 甕	—	1号墳1)周溝	18.0前後	不明		内：ヨコナデ・体部ヨコハケ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	浅黄橙	口径3/8	口縁部外面に粘土接合痕あり
113	2-1	土師器 甕	—	1号墳1)周溝	20.0前後	不明		内：ヨコナデ・体部タテハケ 外：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ	やや粗	良	浅黄橙	口径1/4	
114	19-4	土師器 甕	—	1号墳丘	20.5前後	不明		内：ヨコナデ・体部タテハケ 外：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ	やや粗	良	にぶい黄橙	口径1/5	
115	15-3	土師器 甕	—	1号墳1)周溝	19.0前後	不明		内：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ 外：ヨコナデ・オサエ・体部タテハケ	やや粗	良	浅黄橙	口径1/4	
116	2-4	土師器 甕	—	1号墳1)周溝	20.0前後	不明		内：ヨコナデ・体部タテハケ 外：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ	やや粗	良	にぶい黄橙	口径1/3	
117	14-1	土師器 甕	—	1号墳1)周溝	32.5前後	不明		内：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	にぶい黄橙	口径1/4	
118	16-2	土師器 甕	—	1号墳3)周溝	32.0前後	不明		内：ヨコナデ・体部ヨコハケ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	にぶい黄橙	口径6/1	頸部の粘土接合痕が明瞭
119	12-1	土師器 甑	—	1号墳1)周溝	27.0前後	不明		内：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ・ケズリ 外：ヨコナデ・体部にタテハケ・把手押入	密	良	浅黄橙	口径1/3	
120	12-2	土師器 甑	—	1号墳1)周溝	不明	不明	底部径12.0前後	内：ケズリ・底端部ヨコナデ 外：タテハケ・橋部貼付	やや粗	良	浅黄橙	口径1/3	
121	1-4	土製 紡錘車	—	1号墳周溝直上	径4.5	4.1	穴径0.9 重量103g	ナデ・オサエ	やや粗	良	にぶい橙 浅黄橙	完存	
122	42-3	須恵器 杯蓋	—	3号墳埋葬施設1	13.6	3.8		内：回転ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	やや粗	良	灰白	完存	
123	43-1	須恵器 杯身	—	3号墳埋葬施設1	12.2	4.6	受部径14.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ・回転ケズリ	粗	良	灰	ほぼ完存	
124	40-2	須恵器 杯蓋	—	3号墳埋葬施設1	14.0前後	4.2		内：回転ナデ・天井部ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	密	良	灰	完存	
125	40-1	須恵器 杯身	—	3号墳埋葬施設1	12.3	4.8	受部径14.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	密	やや不良	灰白	ほぼ完存	底部に「×」のヘラ記号
126	43-2	須恵器 杯蓋	—	3号墳埋葬施設1	14.2	4.7		内：回転ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	やや粗	良	灰白	口径1/8	
127	43-3	須恵器 杯身	—	3号墳埋葬施設1	11.8	5.0	受部径14.6	内：回転ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	やや粗	良	灰白	口径2/3	
128	40-5	須恵器 杯蓋	—	3号墳埋葬施設1	14.2	5.0		内：回転ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	やや粗	やや不良	灰白	口径1/2	
129	40-4	須恵器 杯身	—	3号墳埋葬施設1	12.0前後	3.9	受部径14.0前後	内：回転ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	密	良	灰白	ほぼ完存	底部に輪状に線がめぐる
130	40-3	須恵器 杯身	—	3号墳埋葬施設1	11.0前後	3.5	受部径13.8前後	内：回転ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	密	やや不良	浅黄 灰白	口径1/3	
131	41-1	須恵器 提瓶	—	3号墳埋葬施設1	8.0前後	17.0	体部14.0×9.5	内：口縁回転ナデ・体部ナデ 外：口縁回転ナデ・体部カキ目	やや密	良	にぶい赤褐	ほぼ完存	
132	57-1	須恵器 蓋	—	3号墳埋葬施設2	8.5	2.9	最大径10.7	内：回転ナデ・ 外：回転ナデ・回転ケズリ・つまみ貼り付け	粗	良	灰白	ほぼ完存	133の蓋
133	57-2	須恵器 椀	—	3号墳埋葬施設2	9.7	6.1	最大径10.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ・底部ヘラ切り未調整	粗	良	灰白	ほぼ完存	132の身
134	57-4	須恵器 杯身	—	3号墳埋葬施設2	11.7	4.1	受部径13.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ・回転ケズリ	やや密	良	外：暗青灰 内：灰白	ほぼ完存	
135	57-3	須恵器 短頸壺	—	3号墳埋葬施設2	9.0	12.3	最大径12.3	内：回転ナデ 外：回転ナデ・回転ケズリ	粗	やや不良	灰白	ほぼ完存	
136	57-5	須恵器 高杯	—	3号墳埋葬施設2	12.7	平均14.8	底部径11.5	杯部：内外面回転ナデ 脚部：2段透かし・上方は完全に穿孔しない	やや粗	良	暗灰	ほぼ完存	
137	61-2	須恵器 小型壺	—	3号墳埋葬施設2	6.3	10.5	最大径11.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ・ナデ・2条一組の沈線文3段	粗	良	灰	ほぼ完存	
138	61-1	須恵器 小型壺	—	3号墳埋葬施設2	6.4	10.1	最大径10.4	内：回転ナデ 外：回転ナデ・底回転ケズリ・ナデ	粗	良	灰白	ほぼ完存	
139	60-1	須恵器 提瓶	—	3号墳埋葬施設2	不明	不明	体部17.5×11.2	内：回転ナデ・ナデ 外：カキメ・回転ナデ・回転ケズリ	やや粗	良	灰白	体部完存	
140	58-1	須恵器 提瓶	—	3号墳埋葬施設2	不明	不明	体部15.8×10.4	内：ナデ 外：回転ナデ後タタキ・カキメ	やや粗	良	灰	体部完存	底部にヘラ記号
141	59-1	須恵器 横瓶	—	3号墳埋葬施設2	7.1	17.5	体部14.8×17.6	内：ヨコナデ・ナデ 外：タタキ後カキメ、ハケメ	やや粗	良	灰	ほぼ完存	
249	22-1	須恵器 提瓶	—	3号墳1)SZ21	6.0	22.1	体部16.0×11.5	内：回転ナデ・ナデ 外：回転ナデ・体部タタキ後カキメ	やや密	良	灰	ほぼ完存	
250	42-1	土師器 甕	—	3号墳1)SZ21	14.5前後	17.3		内：ヨコナデ後口縁からヨコナデ・体底部ケズリ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	にぶい黄橙	口径1/8	
251	28-1	土師器 甕	—	3号墳3)墳頂	12.4	12.2		内：ヨコナデ後ヨコハケ・底部オサエ 外：ヨコナデ・タテハケ・底部オサエ	やや粗	良	にぶい橙	完存	
252	42-2	土師器 把手付甕	—	3号墳3)墳頂	10.4	9.4		内：ヨコナデ・体部オサエ・ナデ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや密	良	明黄褐	口径1/6	
253	35-2	土師器 椀	—	3号墳4)墳頂	13.0前後	3.8		内：ナデ 外：ナデ・オサエ・粘土接合痕残す	やや粗	良	にぶい橙	口径1/9	
254	27-4	土師器 椀	—	3号墳甕棺墓	16.0前後	5.7		内：ヨコハケ 外：ナデ・接合痕残す	やや粗	密	橙	口径1/2	
255	38-1	土師器 甕	—	3号墳甕棺墓	19.0	35.7		内：体部ヨコハケ・体下部ケズリ 外：口縁ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	にぶい橙	口径ほぼ完存	底部に「×」のヘラ記号
256	39-1	土師器 甕	—	3号墳甕棺墓	20.3	40.8		内：体部ヨコハケ・体下部ケズリ 外：口縁ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	にぶい黄橙	頸部ほぼ完存	
257	29-5	須恵器 杯蓋	—	3号墳墳頂	14.0前後	3.8		内：回転ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	やや粗	良	外：青灰 内：灰	口径1/4	
258	29-6	須恵器 杯蓋	—	3号墳墳頂	14.0前後	4.5前後		内：回転ナデ 外：回転ナデ・回転ケズリ	やや粗	良	青灰	口径2/3	
259	45-2	須恵器 杯蓋	—	3号墳盛土	15.0前後	不明		内：回転ナデ 外：回転ナデ・回転ケズリ？	やや粗	良	灰	口径1/8	
260	29-1	須恵器 杯蓋	—	3号墳墳頂	14.0前後	3.5		内：回転ナデ 外：回転ナデ・回転ケズリ	やや粗	良	灰	口径1/4	
261	44-2	須恵器 杯蓋	—	3号墳盛土	14.0前後	5.0		内：回転ナデ・ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	密	良	灰	ほぼ完存	
262	45-3	須恵器 杯蓋	—	3号墳盛土	15.0前後	不明		内：回転ナデ 外：回転ナデ・回転ケズリ？	やや粗	良	灰	口径1/8	
263	44-5	須恵器 杯身	—	3号墳盛土	13.0前後	不明	受部径16.0前後	内：回転ナデ 外：回転ナデ・底部不明	密	良	灰	口径1/6	
264	29-2	須恵器 杯身	—	3号墳墳頂	10.5前後	4.4	受部径13.5前後	内：回転ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	やや粗	良	灰	口径1/2	

第3表　遺物観察表(3)

報告番号	登録番号	器種	地区	遺構	計測値(cm) 口径	器高	その他	調整・技法上の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
265	29-4	須恵器 杯身	—	3号墳墳頂	12.2	4.2	受部径14.5前後	内：回転ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	やや粗	良	緑灰	口径2/3	
266	29-3	須恵器 杯身	—	3号墳墳頂	11.0前後	4.2	受部径14.0前後	内：回転ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	密	良	灰	口径1/5	
267	29-7	須恵器 杯身	—	3号墳墳頂	12.5前後	不明	受部径15.0前後	内：回転ナデ 外：回転ナデ・底部不明	やや粗	良	青灰	口径1/4	
268	44-3	須恵器 杯身	—	3号墳盛土	13.0前後	4.2	受部径15.0前後	内：回転ナデ 外：回転ナデ・回転ケズリ	やや密	良	灰	口径1/4	
269	24-1	須恵器 杯蓋	—	3号墳③盛土	14.0前後	4.25		内：回転ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	密	良	明褐灰	口径1/3	
270	24-2	須恵器 杯蓋	—	3号墳③盛土	13.5前後	4.2		内：回転ナデ・ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	密	良	灰白	口径1/3	
271	25-4	須恵器 杯身	—	3号墳④盛土	12.0前後	4.1	受部径14.5前後	内：回転ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	密	やや不良	灰白	口径1/4	
272	24-3	須恵器 杯身	—	3号墳③周溝	10.8	3.65	受部径12.9	内：回転ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	密	良	灰 にぶい黄色	受部完存	
273	24-4	須恵器 杯身	—	3号墳①盛土	13.5前後	3.3	受部径15.5前後	内：回転ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	密	良	灰白	受部1/8	
274	45-1	須恵器 甕	—	3号墳盛土	12.0前後	不明		内：回転ナデ 外：回転ナデ	やや密	良	灰	頸径完存	
275	26-3	土師器 高杯	—	3号墳③周溝	不明	不明	底部径7.7	摩滅が厳しく調整不明	やや粗	良	にぶい黄橙 浅黄橙	底径1/3	
276	27-1	須恵器 甕	—	3号墳③周溝	不明	不明	体部径9.0	内：回転ナデ・ナデ 外：回転ナデ・回転ケズリ	やや粗	良	灰白	体部完存	
277	47-5	須恵器 甕	—	3号墳墳丘	不明	不明		内：回転ナデ 外：回転ナデ後波状文	密	良	灰白	小片	
278	75-1	須恵器 甕	—	3号墳④攪乱部	44.0前後	不明	最大径80前後	内：口縁部ヨコナデ・体部あて具痕 外：タテハケ後沈線・体部タタキ	やや粗	良	外：暗オリーブ灰 内：灰白	口径1/6	
279	45-4	須恵器 提瓶	—	3号墳盛土	不明	不明	体部15.0×10.5	内：回転ナデ 外：回転ナデ・体部不明	やや粗	良	灰	頸径完存	
280	23-1	須恵器 提瓶	—	3号墳③周溝	不明	不明	体部17.5×12.5	内：回転ナデ・ナデ 外：回転ナデ・カキメ・把手貼り付け	やや密	良	灰	頸径完存	
281	46-1	須恵器 甕	—	3号墳盛土	23.0前後	不明		内：回転ナデ・タタキ 外：回転ナデ・あて具痕	やや密	良	灰	口径1/4	
282	25-7	土師器 脚付坩	—	3号墳③周溝	6.0前後	不明	底部径7.1	内：ヨコナデ・ナデ・オサエ・絞り痕 外：ヨコナデ・ナデ・オサエ	やや粗	良	浅黄橙	口径1/3	
283	44-1	土師器 椀	—	3号墳③周溝	11.0前後	4.5		内：ヨコナデ 外：ヨコナデ・ナデ	密	やや不良	灰オリーブ	ほぼ完存	
284	28-3	土師器 高杯	—	3号墳⑥盛土	不明	不明	底部径10.0前後	内：オサエ・ヨコハケ 外：ヨコナデ・タテハケ	やや密	良	橙	底径1/3	
285	26-1	土師器 甕	—	3号墳③周溝付近	20.5前後	不明		内：口縁部・体部ヨコハケ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	浅黄橙	口径1/6	
286	27-3	土師質 紡錘車	—	3号墳④盛土	—	2.0	径4.4穴径0.9 重量41.1g	ナデ・オサエ	やや粗	良	にぶい黄橙	完存	
287	24-6	土師質 紡錘車	—	3号墳②盛土	—	1.4	径4.8穴径0.6 重量9.7g	ナデ・オサエ	やや粗	良	橙 浅黄橙	完存	
288	25-2	土師質 土錘	—	3号墳①墳丘	—	3.6	径2.9穴径0.7 重量27.6g	ナデ・オサエ	やや粗	良	にぶい黄橙	完存	
289	24-7	土師質 土錘	—	3号墳①包含層	—	2.1	径2.3穴径0.3 重量30.9g	ナデ・オサエ	やや密	良	浅黄橙 にぶい黄橙	完存	
290	31-2	土師器 甕	D5	SH6	不明	不明		内：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ 外：ヨコナデ・体部調整不明	やや密	良	にぶい黄橙	小片	
291	31-1	土師器 甕	D5	SH6	不明	不明		内：摩耗により調整不明 外：ヨコナデ	やや密	良	にぶい黄橙	小片	
292	31-3	土師器 甕	D5	SH6	不明	不明		内：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ 外：ヨコナデ・体部調整不明	やや密	良	にぶい黄橙	小片	
293	31-4	土師器 甑	D5	SH6	不明	不明		内：ヨコナデ・ヨコハケ後体部ケズリ 外：ハケメ・ナデ・接合痕残る	やや粗	良	にぶい黄橙	小片	
294	30-6	土師器 甕	D5	SH6	20.0前後	不明		内：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ 外：ヨコナデ・体部調整不明	やや粗	良	にぶい黄橙	口径1/3	
295	30-5	土師器 甕	C7 pit1	SB5	不明	不明		内：ヨコナデ・体部ヨコハケ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや密	良	にぶい黄橙	小片	柱痕跡出土
296	30-4	土師器 甕	C6 pit8	SB5	不明	不明		内：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや密	良	にぶい橙	小片	
297	33-1	土師器 甕	F8	SD7	不明	不明		内：口縁部ヨコナデ 外：ヨコナデ・タテハケ	やや粗	良	橙	小片	
298	32-1	須恵器 提瓶	F8	SD7	9.6	22.0	体部17.0×?	内：ロクロナデ 外：回転ナデ・回転ケズリ・カキメ・把手貼付	密	良	灰オリーブ 浅黄	ほぼ完存	
299	30-3	須恵器 杯蓋	J7	SK2	14.0前後	3.1		内：回転ナデ 外：回転ナデ・回転ケズリ	やや粗	良	灰黄	口径1/5	
300	30-1	須恵器 杯身	J7	SK2	11.8	4.2	受部径13.6	内：回転ナデ 外：回転ナデ・ヘラ切り未調整	密	良	灰 灰オリーブ	完存	
301	30-2	須恵器 杯身	J7	SK2	11.6	3.7	受部径13.6	内：回転ナデ 外：回転ナデ・回転ケズリ	密	良	灰黄	口径4/5	
302	33-2	土師器 甕	E6	SK9	20.0前後	不明		内：ヨコナデ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	内：にぶい黄橙 外：浅黄	口径1/8	
303	33-3	土師器 甑	E6	SK9	不明	不明		内：ヨコナデ・ナデ 外：ヨコナデ・タテハケ・オサエ	やや粗	良	明黄橙	小片	
304	33-4	土師器 甕	E6	SK11	18.5前後	不明		内：ヨコナデ・体部ヨコハケ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	浅黄橙	口径1/2	
305	33-5	土師器 甕	F5	SK11	13.5前後	不明		内：ヨコナデ・体部ヨコハケ 外：ヨコナデ・体部タテハケ？（風化大）	やや密	良	浅黄橙	ほぼ完存	
306	34-1	土師器 甕	F5	SK14	不明	不明		内：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ・オサエ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	良	明黄褐	小片	
307	31-6	土師器 甕	F5	SK11	20.0前後	不明		内：ヨコナデ後口縁部までヨコハケ 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや密	良	にぶい黄橙	口径1/2	
308	31-5	土師器 甕	C7 pit2	pit1	15.3	不明		内：ヨコナデ・体調調整不明 外：ヨコナデ・体部タテハケ	やや粗	やや不良	にぶい黄橙	完存	
309	36-3	土師器 ?	不明	包含層	13.5前後	不明		内：ヨコナデ 外：ヨコナデ・ナデ・粘土接合痕残る	やや密	良	浅黄橙	口径1/4	
310	36-4	土師器 甕	D5	包含層	12.0前後	不明		内：ヨコナデ・体部ヨコハケ 外：ヨコナデ・タテハケ	やや密	良	浅黄橙	口径1/4	

第3表　遺物観察表(4)

＜鉄器＞

報告番号	登録番号	器種	地区	遺構	計測値(cm) 全長	刃部長	頸部長	茎部長	その他	特徴	備考
85	62-2	鏃	－	1号墳埋葬施設	10.9	6.0	2.4	3.8		腸抉三角形	
86	62-3	刀子	－	1号墳埋葬施設	14.2	8.5	－	5.7			茎に木質付着
87	63-8	刀子	－	1号墳周溝	5.1+	5.1+	－	欠損			
142	67-1	直刀	－	3号墳埋葬施設1	103.3+	83.5+	－	19.5	幅4.0		
143	67-2	直刀	－	3号墳埋葬施設1	100.3+	81.0+		19.3	幅4.0		
144	67-3	直刀	－	3号墳埋葬施設1	59.5+	49.5?	－	10.0+	幅4.0		
145	64-8	鞘座金具	－	3号墳埋葬施設1	－		－	－	径3.5	方形の穴があく	
146	64-2	鞍輪金	－	3号墳埋葬施設1	不明	－	－	－	復元幅5.1	断面方形	
147	64-1	鞍輪金	－	3号墳埋葬施設1	6.0	－	－	－	復元幅4.8	断面円形	
148	64-9	鏃	－	3号墳埋葬施設1	11.6+	3.5	8.1+	欠損		長頸鏃	149、150と付着
149	64-10	鏃	－	3号墳埋葬施設1	18.4	3.9	9.5	5.0		長頸鏃	148、150と付着
150	64-11	鏃	－	3号墳埋葬施設1	16.6+	3.6	10.2	2.8+		長頸鏃	148、149と付着
151	63-15	鏃	－	3号墳埋葬施設1	19.2	3.6	9.9	5.7		長頸鏃	
152	63-16	鏃	－	3号墳埋葬施設1	19.1	3.4	9.8	5.9		長頸鏃	
153	65-11	鏃	－	3号墳埋葬施設1	16.7+	1.5+	9.7	5.5		長頸鏃	
154	65-6	鏃	－	3号墳埋葬施設1	14.7+	3.4	9.9	1.4+		長頸鏃	155と付着
155	65-7	鏃	－	3号墳埋葬施設1	15.4+	3.3	9.4	2.7+		長頸鏃	154と付着
156	64-4	鏃	－	3号墳埋葬施設1	16.9+	3.6	9.8	3.5+		長頸鏃	157と付着
157	64-5	鏃	－	3号墳埋葬施設1	17.8	3.6?	10.0?	4.2		長頸鏃	156と付着
158	64-6	鏃	－	3号墳埋葬施設1	16.3+	3.3	9.2	3.8+		長頸鏃	
159	65-5	鏃	－	3号墳埋葬施設1	16.7+	3.8	9.7	3.2+		長頸鏃	
160	63-14	鏃	－	3号墳埋葬施設1	16.9+	3.6	10.0	3.3+		長頸鏃	
161	65-8	鏃	－	3号墳埋葬施設1	14.2+	3.4	9.9	0.9+		長頸鏃	
162	64-7	鏃	－	3号墳埋葬施設1	14.6+	3.6	9.5	1.5+		長頸鏃	
163	65-4	鏃	－	3号墳埋葬施設1	15.9+	3.4	10.1	2.4+		長頸鏃	
164	66-1	鏃	－	3号墳埋葬施設1	16.5+	3.3	10.5	2.7+		長頸鏃	
165	65-9	鏃	－	3号墳埋葬施設1	15.2+	3.4	9.5	2.3+		長頸鏃	
166	65-10	鏃	－	3号墳埋葬施設1	15.4+	3.5	10.0	1.9+		長頸鏃	
167	65-2	鏃	－	3号墳埋葬施設1	13.7+	3.4	10.3+	欠損		長頸鏃	
168	65-1	鏃	－	3号墳埋葬施設1	13.2+	3.2	10.0+	欠損		長頸鏃	
169	65-3	鏃	－	3号墳埋葬施設1	12.7+	3.7	9.0+	欠損		長頸鏃	
170	65-12	鏃	－	3号墳埋葬施設1	11.9+	3.1	8.8+	欠損		長頸鏃	
171	65-14	鏃	－	3号墳埋葬施設1	11.2+	3.6	7.6+	欠損		長頸鏃	
172	65-13	鏃	－	3号墳埋葬施設1	9.5+	3.5	6.0+	欠損		長頸鏃	
173	63-11	石突	－	3号墳埋葬施設1	4.1+	－	－	－	径2.0		中に別の鉄製品が付着
174	63-12	石突	－	3号墳埋葬施設1	3.1+	－	－	－	径1.4		
175	64-3	刀子	－	3号墳埋葬施設1	14.3	9.3	－	5.0			全面に木質付着
176	64-12	刀子	－	3号墳埋葬施設1	20.0+	13.6+	－	6.4			
177	63-17	両頭金具	－	3号墳埋葬施設2	3.1	－	－				木質付着
178	62-1	鍔	－	3号墳埋葬施設2	－				8.0×6.8	倒卵形無窓式	柄元金具が付着
179	62-4	刀	－	3号墳埋葬施設2	6.7+	6.7+	－	欠損	幅3.1		
180	62-5	剣	－	3号墳埋葬施設2	6.7+	6.7+	－	欠損	幅2.5		
181	63-9	刀子	－	3号墳埋葬施設2	6.8+	欠損	－	6.8+			木質付着
182	63-10	刀子	－	3号墳埋葬施設2	3.8+	欠損	－	3.8+		目釘穴1カ所	
183	62-6	鏃	－	3号墳埋葬施設2	11.1	4.9	2.4	4.4		三角形	
184	62-14	鏃	－	3号墳埋葬施設2	4.3+	4.3+	欠損	欠損		(腸抉？)三角形	
185	62-7	鏃	－	3号墳埋葬施設2	6.0+	5.0	1.0+	欠損		三角形	
186	62-10	鏃	－	3号墳埋葬施設2	5.1+	4.0	1.1+	欠損		腸抉三角形	
187	63-1	鏃	－	3号墳埋葬施設2	3.5+	3.5+	欠損	欠損		(腸抉？)三角形	
188	62-13	鏃	－	3号墳埋葬施設2	2.6+	2.6+	欠損	欠損		三角形	
189	62-8	鏃	－	3号墳埋葬施設2	4.4+	4.4	欠損	欠損		腸抉三角形	
190	62-9	鏃	－	3号墳埋葬施設2	7.4+	5.1	2.3+	欠損		柳葉形	
191	62-11	鏃	－	3号墳埋葬施設2	4.8+	3.1+	1.7+	欠損		柳葉形	
192	62-12	鏃	－	3号墳埋葬施設2	3.9+	欠損	2.0	1.9+		柳葉形	
193	63-3	鏃	－	3号墳墳丘	5.8+	1.1+	4.7+	欠損		長頸鏃	埋葬施設1関連？
194	63-4	鏃	－	3号墳墳丘	7.8+	欠損	5.6+	2.2+		長頸鏃	埋葬施設1関連？
195	63-2	鏃	－	3号墳墳丘	7.9+	欠損	6.1+	1.8+		長頸鏃	埋葬施設1関連？

＜玉類＞

報告番号	登録番号	器種	地区	遺構	計測値(cm, g) 径	高さ	重量	色調	残存度	備考
196	10-8	碧玉製 管玉	－	3号墳墳丘上	0.9	2.4	4.51	緑のマーブル状	完存	
197	10-7	ガラス製 管玉	－	3号墳墳丘上	0.7	1.2	0.85	緑	完存	分析試料6
198	7-7	琥珀製 嚢玉	－	3号墳墳丘上	不明	不明	不明	褐色	1/2欠け	分析試料7
199	7-2	ガラス製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.6	0.45	青	完存	分析試料5
200	9-3	ガラス製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.6	0.51	青	完存	分析試料4
201	7-8	ガラス製 小玉	－	3号墳墳丘上	0.2	0.2	0.05	青	完存	
202	76-5	ガラス製 小玉	－	3号墳墳丘上	0.3	0.3	0.05	青	完存	
203	76-8	ガラス製 小玉	－	3号墳墳丘上	0.3	0.6	0.05	青	完存	
204	76-7	ガラス製 小玉	－	3号墳墳丘上	0.4	0.2	0.04	青緑	完存	
205	76-6	ガラス製 小玉	－	3号墳墳丘上	0.4	0.3	0.06	青緑	完存	
206	7-1	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.7	0.44	外：黒 断面：明褐灰	少し欠けあり	
207	7-4	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	不明	0.7	0.08	外：黒 断面：明褐灰	1/4残	
208	7-3	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.7	0.36	外：黒 断面：明褐灰	完存	
209	7-6	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.8	0.25	外：黒 断面：明褐灰	1/2欠け	
210	8-1	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.8	0.47	外：黒	完存	
211	8-2	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.9	0.8	0.35	外：黒	少し欠けあり	
212	8-3	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.8	0.35	外：黒	少し欠けあり	分析試料1
213	8-4	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.7	0.43	外：黒	少し欠けあり	
214	8-5	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.7	0.8	0.27	外：黒	2/3欠け	分析試料2
215	8-6	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.7	0.42	外：オリーブ黒	少し欠けあり	
216	8-7	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.7	0.38	外：黒	完存	
217	8-8	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.7	0.36	外：黒	完存	
218	8-9	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.9	0.7	0.44	外：黒	完存	
219	8-10	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.8	0.42	外：黒	少し欠けあり	
220	8-11	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.7	0.35	外：黒	少し欠けあり	
221	8-12	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	不明	0.39	外：黒	少し欠けあり	分析試料3
222	9-1	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.8	0.40	外：黒	少し欠けあり	
223	9-2	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.7	0.8	0.36	外：黒	少し欠けあり	
224	9-4	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.6	0.35	外：オリーブ黒	完存	
225	9-5	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.9	0.7	0.48	外：黒	完存	
226	9-6	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.7	0.37	外：黒	完存	
227	9-7	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.9	0.8	0.50	外：黒	完存	
228	9-8	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.7	0.45	外：黒	少し欠けあり	
229	9-9	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.9	0.7	0.41	外：黒	完存	
230	9-10	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.9	0.7	0.40	外：黒	完存	
231	9-11	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.7	0.7	0.35	外：緑黒	少し欠けあり	
232	9-12	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.8	0.42	外：黒	完存	
233	10-1	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.7	0.44	外：黒 断面：明褐灰	少し欠けあり	
234	10-2	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.9	0.8	0.43	外：オリーブ黒	完存	
235	10-3	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.7	0.45	外：黒 断面：灰	完存	
236	10-4	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.7	0.50	外：オリーブ黒 断面：灰	完存	
237	10-5	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.7	0.38	外：黒 断面：灰	少し欠けあり	
238	10-6	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.7	0.35	外：黒 断面：灰	少し欠けあり	
239	11-1	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.9	不明	0.42	外：オリーブ黒 断面：灰	少し欠けあり	
240	11-3	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.9	0.7	0.43	外：黒 断面：黄灰	少し欠けあり	
241	11-4	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.9	0.6	0.40	外：黒 断面：褐灰	少し欠けあり	
242	11-5	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.6	0.40	外：黒 断面：褐灰	少し欠けあり	
243	76-3	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.7	不明	0.30	外：黒 断面：黄灰	少し欠けあり	
244	76-4	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.7	0.44	外：黒 断面：灰	少し欠けあり	
245	76-2	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	不明	0.6	0.09	外：黒 断面：黄灰	1/2欠	
246	76-1	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.6	0.32	外：黒 断面：暗灰	少し欠けあり	
247	7-5	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.9	0.7	0.43	外：黒 断面：暗灰	少し欠けあり	
248	11-2	土製 丸玉	－	3号墳墳丘上	0.8	0.7	0.40	外：黒 断面：灰	少し欠けあり	

第3表　遺物観察表(5)

Ⅳ 結　　語

1 旧石器時代の遺物について

ナイフ形石器12点、楔形石器１点、角錐状石器１点およびチャートを主体とする石核・剥片が多量に出土した。大仏山丘陵とその周辺にはカリコ遺跡、ママ田遺跡を中心に中小の旧石器時代の遺跡が分布している[1]。曽祢崎遺跡はこれらのなかで中規模の遺跡として、一定期間の滞在の跡が見いだされる。沖積地を望む段丘端部で近くに水源も求められることから、居住には適地であったことが窺える。

2 弥生時代前期の遺物について

今回の調査では古墳の旧表土を中心として弥生時代前期から中期にかけての遺物が出土した。前期の土器には口縁部と胴部の区画に段を用いるもの（第18図35）や広口壺の蓋（同34）など中段階に属すると考えられるものも含む[2]。これまで、伊勢地方における弥生文化の受容は前期中段階にまず三渡川流域の中ノ庄遺跡に伝わり、伊勢平野を南北方向に伝播していったと考えられている[3]。南勢地方を見た場合、中段階と考えられる遺物が出土している遺跡は現在のところ曽祢崎遺跡のほか、宮川河口付近の自然堤防上に立地する大藪遺跡[4]のみである。現在の曽祢崎遺跡は、海岸から２kmほど内陸に入っているが、弥生時代の地形を復元した場合、ごく近くまで海が入ってきていたと考えらる。また、大藪遺跡も宮川の河口付近に位置し、いずれの遺跡も海上交通には便利な場所であったと考えられる。両遺跡付近の弥生時代前期遺跡を見た場合、櫛田川の河岸段丘に位置する古里遺跡[5]・金剛坂遺跡[6]などの一連の大集落があるが、いずれも新段階からの遺物しか確認されていない。最近、県内においても文化の伝播における海上交通の重要性について改めて注意が向けられてきている[7]。南勢地方における弥生文化の受容についても、従来の陸上交通による伝播に加えて海上交通の重要性にも着目していく必要があろう。

曽祢崎遺跡からは縄文時代晩期の凸帯文系土器は出土していないが、弥生時代前期のものと考えられる凸帯文深鉢的な要素を持った甕（第18図46）が出土している。周辺の遺跡では、凸帯文系土器と弥生前期土器との明確な共伴は認められおらず、奥義次氏は「両者の併存は地域的な土器編年の対応関係から十分想定されるとしても、厳密には分離した扱いをしたほうが事実に即している」とし、「伊勢最古の弥生土器の様相を持つ中ノ庄遺跡で、（中略）なお不確定な部分を残しつつも、凸帯文ではなくて条痕文土器（樫王式）が存在すると言う事実は、（中略）より客観的、整合的に理解する必要があろう」と指摘している[8]。曽祢崎遺跡の46の土器の共伴関係は明らかではないものの、凸帯文深鉢と弥生時代前期甕の融合した形態が注目される。曽祢崎遺跡に住み、弥生文化を受け入れた集団は縄文文化と断絶するのではなく、縄文文化の系譜を引きながらも先進的に弥生文化を受け入れていった集団といえよう。

また、曽祢崎遺跡における壺・甕の割合は、壺の全てが「正統遠賀川式土器」に属するのに対し、甕は「正統遠賀川式土器」が「亜流遠賀川式土器」の２倍ほどの割合を示す。この様相は、金剛坂遺跡などの櫛田川の河岸段丘に立地する遺跡群で「亜流遠賀川式土器」が壺・甕ともに高い割合を占めるのと異なった様相を示す[9]。「亜流遠賀川式土器」については鈴木克彦氏の論考が詳しく[10]、氏は「亜流遠賀川式土器」を、前期新段階に「伊勢地方中南部を中心として伊勢湾西岸地方に分布する、第１系列（「正統遠賀川式土器」）とは別系統の土器様式」であり、「遺跡の立地・分布や出土状況からは、第３系列（「亜流遠賀川式土器」）の中に縄文的要素を見出すことができる」と指摘している。曽祢崎遺跡では中段階と考えられる壺や蓋が出土しており、当然のことながら中段階の甕も存在したであろうことが考えられる。前期の甕の細分は明確には行われておらず、中段階に属するのか新段階に属するのかを峻別するのは難しいが[11]、曽祢崎遺跡では「正統遠賀川式土器」が「亜流遠賀川式土器」の２倍になるという事実は甕も中段階から存在していることを示唆してくれよう。この点からも、曽祢崎遺跡が櫛田川の河

岸段丘に立地する遺跡群より古い様相をもった遺跡と考えることができる。

3 弥生時代後期の遺構・遺物について

SX22･23･SD24出土の遺物はいずれも広口壺であるが、多くは頸部が「く」の字状に屈曲せずにゆるやかに外反している。23は中期後葉に位置づけられている波瀬Ｂ遺跡[12]ＳＸ１出土のものと形態的には類似するが、波瀬Ｂ遺跡のものの口縁端部は受口状を呈するのに対し曽祢崎遺跡のものはまっすぐに終わっており、新しい要素をもつ。SK13出土の高杯は、脚部と杯部を一緒に作り円盤充填により杯部を作っている。これらの遺物に類似するものに、金剛坂遺跡（1971年調査[13]）のSX14･26、同（1985年調査[14]）のＳＸ３～８、大藪遺跡[15]のＳＸ１・２、北野遺跡（第３次[16]）SH17、松阪市に所在する川原表Ｂ遺跡[17]のＳＢ１～５の資料がある。このうち大藪遺跡のＳＸ２は若干新しいものと考えられるが総じて後期初頭、いわゆる山中式以前のものと考えられる。曽祢崎遺跡では壺、高杯のみの出土であるが北野遺跡、川原表Ｂ遺跡では他に甕・鉢・器台・甑・蓋などが出土しており、良好な一括資料となっている。

曽祢崎遺跡のSX22･23の立地は中位段丘の端部で、周囲に同時期の竪穴住居はみつかっていない。金剛坂遺跡では微高地端部に墓が、その内部に住居群の存在が想定されているが[18]、曽祢崎遺跡でも同様に調査区南部ないし南西部に住居群の存在が想定される。曽祢崎の「ムラ」は方形周溝墓が２基であることや立地している微高地が比較的小規模であることから金剛坂遺跡など祓川右岸の大集落とは異なり小規模な「ムラ」であったと考えられる。この「ムラ」は前期中段階から後期初頭まで生活の痕跡が連綿と続き、その後一時途絶えるが、古墳時代前期以降また生活の場として利用されていた。なお、後期中葉から古墳時代にかけて、北野遺跡で大規模な集落が確認されており、関連が注目される。

4 曽祢崎古墳群について

(1) 墳丘上祭祀について

３号墳埋葬施設２の須恵器出土状況は、単独や上下に重ねられた土器２単位が３列並び、少し離れて杯１点が置かれている。この出土状況は須恵器祭式でいう「六文銭」と類似している。「六文銭」祭式とは、６世紀前半を中心とし、６世紀後半まで長く存続していく「墓壙周辺を含めた棺側・棺内の祭式」で、杯は蓋も身も内側を上に向けて、内容物の存否（無いということ）を露にしており、杯以外の各器種は使用不能な状態で埋置している。例えば、高坏・瓌などはほとんどの場合横倒しにされている。それは「あなた（死者）への現世での食事の提供はすでにすべて終えており、新たな食事は冥界において用意されている」という意味の宣告で、「死穢ただよう死者に対する復活拒否の宣言である。」とされている[19]。埋葬施設２の須恵器は棺内外のいずれに設置されたのか明らかではない。また、それぞれの土器の置かれた向きは、杯が逆さ向けられ、高杯が直口壺の上に逆さにかぶせられた以外は提瓶・横瓶・短頸壺はほぼ正位で置かれ、椀は蓋をした状態で置かれていたものと考えられる。この状況は「六文銭」祭式が「内容物の存否を露に」するのとは異なった状況を呈している。６世紀末から７世紀初頭に至って祭式が形骸化したものであろうか。

また、「円形部」南攪乱部付近で、同一個体と考えられる須恵器大甕の破片が集中して出土した。これはもとは墳丘上にあったものが攪乱により移動したと考えらる。このような大甕を掘り据える祭式は現世と死者の世界を隔絶する儀式「コトドワタシ」を表したものであると考えられており[20]、曽祢崎３号墳でもこの儀式が行われた可能性がある。

(2) ３号墳埋葬施設１出土の馬具について

曽祢崎３号墳の埋葬施設１からは、鉄製の鞍の座金具及び輪金が出土している。県内では現在37古墳から馬具の出土が見られ、このうち、曽祢崎古墳群周辺では山添古墳・塚山３号墳・河田Ａ６号墳・河田Ａ７号墳・河田Ｂ２号墳・まこも１号墳・塚山古墳群・南山古墳・高倉山古墳での出土が確認されている[21]。時期は６世紀中葉から７世紀後半に及ぶ。また山添古墳と塚山古墳群からは金銅製品も出土している。これら馬具の出土する遺跡の性格については直径15m以上の円墳で群集墳の盟主格となるものが多く、「極めて小地域の首長クラス以上であるという感が強い」とされている[22]。馬具からみた曽祢崎３

号墳の被葬者は、金銅製品をもたず、種類も鞍の金具のみと貧弱であり、小地域の首長クラスの域をでない存在であったと考えられる。

(3) 両頭金具について

3号墳の埋葬施設2から両頭金具1点（第25図177）が出土した。両頭金具については、福島県の小申田横穴群出土資料から飾り弓の金具であることが想定されている[23]。小申田横穴群出土資料は金銅製であるが、曽祢崎3号墳出土のものは鉄製で、両頭棒の部分のみの出土である。県内での両頭金具出土は、不明鉄製品とされたものを含めると曽祢崎3号墳のほか井田川茶臼山古墳[24]と西野5号墳[25]の2基で確認されている。小さい部品のため、検出が困難であることを考えるともう少し多くの古墳に埋葬されていたと考えられるが、飾り弓という性格上埋葬される古墳には限りがあろう。この遺物の出土からも曽祢崎3号墳の被葬者のクラスについて想定ができよう。

(4) 曽祢崎古墳群の位置づけ

A．周辺の同時期の群集墳について

曽祢崎古墳群の位置づけを行うため、ここでは発掘調査の行われた周辺の群集墳について概述する。河田古墳群[26]ではA～C支群計50基もの調査が行われた。A支群では6世紀後半から7世紀半ばにかけての築造で、盟主的な存在として4基が考えられている。B支群では6世紀半ばから7世紀初頭にかけての築造で盟主的な存在として4基が考えられている。C支群ではいずれも6世紀末から7世紀初頭にかけての築造で、盟主的な存在として4基が考えられている。埋葬施設は木棺直葬を中心とするが、A・B支群では7世紀に入って横穴式石室が採用される。副葬品は須恵器・土師器数点のほか直刀がA支群で1基、B支群では4基、C支群では1基確認されている。本数は1本が普通で1基のみ2本の埋葬である。鉄鏃は三角形鏃および長頸鏃で10本未満がほとんどである。馬具は前述のとおりA支群で2基、B支群で1基から出土している。玉類はメノウ製勾玉、水晶製切子玉、碧石製管玉、コハク製棗玉、ガラス製小玉のセットを基本とし、土製丸玉は認められない。また、耳環を出土する古墳は多く、盟主墳以外の古墳からも1・2点のセットで出土している。

明星古墳群[27]では、盟主墳とおもわれる前方後円墳は保存のため調査されていないが、6基の調査が行われた。いずれも木棺直葬で副葬品は少なく、鉄製品は1基で1点の刀子が出土したに止まり、装身具は確認できなかった。時期は6世紀末から7世紀の初頭があてはめられている。

戸峯古墳群[28]では本報告が行われていないので詳細は不明だが9基の調査が行われ木棺直葬が4基、小石室が1基で確認されている。これらのうち3古墳で鉄刀が出土している。

また、大仏山古墳群[29]では径33mの円墳である32号墳で鉄刀、鉄鏃、ガラス小玉、須恵器が採集され6世紀後半から7世紀初頭に位置づけられている。この他、明野台地東端の丁塚古墳周辺では6世紀初頭から7世紀前半にいたる古墳群の存在が想定され、勾玉、ガラス丸玉および須恵器が採集されている[30]。

カリコ古墳[31]では6世紀末～7世紀初頭の木棺直葬による4基の埋葬施設が確認されており、第1主体部には鉄刀4振、須恵器16点、玉類が、第2主体部には直刀2振が、第3主体部には玉類が埋葬され、有力な家族の墓として位置づけられている。

B．造営時期について

曽祢崎古墳群の築造時期は、1号墳は埋葬施設の時期である田辺編年のTK43～TK209併行期であると考えられる。3号墳は位置関係から埋葬施設2→埋葬施設1の順で埋葬されたと考えられるが遺物はいずれもTK209併行期におさまると考えられる。また、「方形部」からも遺物が出土しているが、2基の埋葬施設より新しい時期のものであると考えられる。これらの時期は、河田古墳群A・B支群の築造開始時期より遅れ、河田古墳群C支群、明星古墳群、カリコ古墳の築造時期とほぼ重なっている。

C．墳形について

曽祢崎古墳群の墳形については、1号墳を円墳、3号墳を前方後円形を意識したものであると考えた。周辺の同時期の古墳のうち、坂本1号墳は前方後方墳、明星7号墳は前方後円墳と考えられている。いずれも平野部の群集墳の盟主墳と考えられている。当地域においてはこの時期まで前方後円墳を盟主墳とするという意識が残っていたのであろうか。

D．埋葬施設について

曽祢崎古墳群の主たる埋葬施設はいずれも木棺直

葬で、副次的な埋葬施設に土坑墓１基と甕棺墓がある。周辺の古墳群の主たる埋葬施設を考えた場合、玉城丘陵上の上村池３号墳で横穴式石室が６世紀前半に採用され、その後６世紀後半に玉城丘陵を中心に拡大していくと考えられているが、同時に木棺直葬が７世紀前半まで残ることも確認されている。木棺直葬と横穴式石室の採用は、竹内氏によって「集団ごとの自主的な選択権を保持し得」ていた可能性が指摘されている。[32] ６世紀末から７世紀初頭の段階では木棺直葬がより一般的であったと考えられる当地では、曽祢崎古墳群はこの点において特異な存在ではなかったと考えられる。

Ｅ．副葬品について

曽祢崎１号墳の副葬品は須恵器高杯・蓋1セット、刀子・鉄鏃各１点と明星古墳群や河田古墳群の中小規模の古墳と似ている。これに対し、曽祢崎３号墳は埋葬施設１から須恵器10点、直刀３振、鉄鏃20数点、馬具（鞍関係）が出土しており、埋葬施設２からは須恵器10点、刀、槍先、直刀の鍔、鉄鏃14点が、このほかに墳丘上から玉類53点が出土しており第3の埋葬施設があった可能性がある。これらは、カリコ古墳より若干劣るが、河田古墳群と比較した場合盟主墳に相当ないしはそれを凌ぐ内容である。副葬品のセット関係においては、曽祢崎古３号墳では装飾品に耳環を使用せず、土製丸玉を多用し、鉄鏃は長頸鏃の多量副葬と三角形鏃の数点副葬の２種類が存在する。これはカリコ古墳と類似し河田古墳群とは異なった様相を見せる。地理的にも大仏山丘陵には近いが、それぞれの所属する集団の類縁性を示すのであろうか。

Ｆ．まとめ

櫛田川と宮川の間の地域には、第Ｉ章で述べたとおり多くの古墳があり、祓川右岸の段丘上、玉城丘陵、大仏山丘陵に大規模な古墳群が集中している。曽祢崎古墳群はこれらとは異なり、明野台地の中央部北端に位置する。同様な立地には明星古墳群ほかの小規模な古墳群が散在するが、これらは間に広がる沖積地で分断され独立性が強い。曽祢崎古墳群の被葬者は、これらの小規模な古墳を形成する小集団の長であり、玉城丘陵や櫛田川の河岸段丘に立地する古墳群の集団から独立した割合勢力のある集団の長であると考えることができよう。（西村美幸）

〔註〕

①森田幸伸「大仏山とその周辺のナイフ形石器について」（『研究紀要』１号　三重県埋蔵文化財センター、1990年）

②弥生時代前期の壺の区分は、佐原真氏の区分に従う。
佐原真「畿内地方」（『弥生土器集成本編』東京堂出版、1968年）

③ア、谷本鋭次『中之庄遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会、1972年）
イ、村山邦彦「伊勢に於ける前期弥生文化巧」（『三重考古』第２号、三重考古学研究会、1978年）

④吉水康夫「大藪遺跡」（『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告書』三重県教育委員会、1973年）

⑤ア、山澤義貴ほか『古里遺跡発掘調査報告－Ｃ地区－』（三重県教育委員会、1973年）
イ、谷本鋭次『古里遺跡発掘調査報告－Ｄ地区－』（三重県教育委員会、1974年）
この他、斎宮跡の各概報参照。

⑥ア、山澤義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』1971年、明和教育委員会）
イ、田村陽一ほか「金剛坂遺跡」（『昭和59年県営農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1985年）

⑦伊藤裕偉『宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ｉ』（三重県埋蔵文化財センター、1997年）で海路による文化伝達の重要性が示唆されている。

⑧奥義次「三重県における凸帯文系土器出土遺跡の分布相」（『Miehistory』vol.1、三重歴史文化研究会、1990年）

⑨少し離れるが上の山遺跡では、新段階の壺は全て「正統な遠賀川式土器」、甕は全て「亜流遠賀川式土器」が出土している。〔上村安生『上の山遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1992年）〕

⑩鈴木克彦「「亜流遠賀川式土器」再考」（『Miehistory』vol12　三重歴史文化研究会、1990年）引用文中の（　）は西村による。

⑪伊藤久嗣『納所遺跡－遺構と遺物－』（三重県教育委員会、1980年）では甕の口縁部が「ゆるやかに外反するもの」から「逆Ｌ字状口縁」への移行が新段階の中で行われたとしている。

⑫上村安生『波瀬Ｂ遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1992年）

⑬註⑥ア、参照。

⑭註⑥イ、参照。

⑮註④参照。

⑯上村安生氏のご教示による。

⑰西田尚史「川原表Ｂ遺跡」『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』（松阪市教育委員会、1990年）

⑱註⑥参照。
岩中淳之「伊勢（南勢）・志摩のムラ」（『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』東海埋蔵文化財研究会、1990年）

⑲楠本哲夫「六文銭－古墳における須恵器祭式成立の意義とその背景－」（『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズＶ、1992年）

⑳ア、亀田博「後期古墳に埋納された土器」（『考古学研究』第23巻第４号、1977年）
イ、伊達宗泰「古墳墳丘上祭祀の問題－新沢千塚古墳群の事例を中心として－」（『橿原考古学研究所論集』第６冊、1984年）

㉑伊勢野久好『天花寺山』（一志町・嬉野町遺跡調査会、1991年）

㉒註㉑参照。

㉓樫村友延『小中田横穴群』（福島県いわき市、1988年）

㉔小玉道明『井田川茶臼山古墳』（三重県教育委員会、1988年）

㉕註㉑参照。
㉖ア、吉水康夫『河田古墳群発掘調査報告Ⅰ』（多気町教育委員会、1974年）
イ、山澤義貴『河田古墳群発掘調査報告Ⅱ』（〃、1975年）
ウ、下村登良男『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』（〃、1986年）
エ、川村輝夫ほか『河田古墳群発掘調査報告Ⅳ』（〃、1983年）
㉗奥義次・下村登良男ほか『明星古墳群発掘調査報告』（明和町教育委員会、1975年）
㉘『丁峰古墳群』現地説明会資料（明和町教育委員会、1990・1991年）
㉙ア、皇學館大学考古學研究會『小俣町の遺跡』（皇學館大学考古學研究會、1992年）
イ、大西素行ほか『大仏山32号墳（倉子古墳）発掘調査報告書』（玉城町教育委員会、1986年）
㉚ア、岩中淳之「伊勢市丁塚古墳と周辺消滅古墳の再検討」（『三重考古学研究』1、1985年）
イ、皇學館大学考古學研究會『伊勢市とその周辺の古墳文化』（皇學館大学考古學研究會、1992年）
㉛山澤義貴『カリコ古墳・カリコ遺跡発掘調査報告』（玉城町郷土会、1972年）
㉜竹内英昭「後期古墳の埋葬施設～伊勢地方の木棺直葬墳をめぐって」（『Miehistory』vol1　三重歴史文化研究会、1990年）

Ⅴ　付編　～曽祢崎３号墳から出土した玉類の素材～

パリノサーヴェイ株式会社

１　はじめに

曽祢崎３号墳からは、須恵器・鉄製品とともに多数の玉類が出土した。玉類には土製・ガラス製・コハク製が確認されている。古墳時代後期の玉類は装飾的な性格が強いことや、地域色がほとんど見られないことが指摘されている（伊藤、1991）。そのため、玉類の素材やその組成を明らかにすることは、過去の流通などを知る上でも重要である。

本報告では、３号墳から出土した土製･ガラス製･琥珀製の各玉類について分析を行い、その素材を明らかにする。土製玉類については、岩石薄片の手法を応用し、顕微鏡下の観察から鉱物組成を明らかにする。ガラス製玉類については、蛍光Ｘ線分析によりその成分組成を明らかにする。琥珀製棗玉については、赤外線吸収スペクトル法（赤外線分光分析）により、その成分組成を明らかにする。

２　土製丸玉の素材について

(1) 試料

試料は出土した土製丸玉３点（試料番号１～３）である（第４表）。玉は、いずれも直径8.3㎜前後で、径1.7㎜程の穴が開けられている。

番　号	試料名	報告番号	登録番号
1	土製丸玉	２１２	８－　３
2	土製丸玉	２１４	８－　５
3	土製丸玉	２２１	８－１２

第４表　土製丸玉胎土薄片試料

(2) 方法

各試料を切断して研磨薄片を作製し、顕微鏡による観察を行う。

(3) 観察結果

Ａ．玉の構成物質

細粒の淡褐色粘土を原土とし、0.02㎜以下の含鉄セリサイトと微粒の石英を主な粘土構成鉱物としているが、このほかに基質と比較すると粒度が粗い石英・斜長石・雲母鉱物・泥岩等の砕屑片を含んでいる。各鉱物について以下記す。

ａ．石英

少量存在し、粒径0.02～0.15㎜の他形粒状を呈する。比較的粒度の粗い石英は変質岩起源とみられる。同種の石英で構成される径0.50㎜の珪質岩片が、試料番号１研磨片の穴の部分に未変質の粘土と共に付着した状態で残留している。この部分の粘土は加熱変化を被っていないことから、埋設された際に付着したものと認定される。石英は、このほか基質の粘土の組成鉱物として存在し、径0.02㎜以下の微粒で少量存在している。

ｂ．斜長石

微量存在し、粒径最大0.15㎜の他形破片状を呈する。加熱変化は見られず、集片双晶が発達している。

ｃ．雲母鉱物

粘土の主成分鉱物となっている。雲母鉱物の産状は、以下の３種が認められる。

（ａ）長さ0.05～0.07㎜の板状を示す黒雲母で微量存在する。

（ｂ）長さ0.03～0.15㎜の柱状を示す加水黒雲母および白雲母で、微量存在する。

（ｃ）粘土基質を構成する含鉄セリサイト。粒径0.02㎜以下の鱗片状を呈する粘土鉱物で多量～中量存在する。

d．泥岩

きわめて微量存在し、粒径最大0.08㎜の亜円礫状を呈する。スメクタイト質粘土で構成された組織を残存している。

e．不透明鉱物

微量存在し、粒径0.04㎜の他形粒状を呈する。黒色不透明鉱物である。反射顕微鏡下の観察で磁鉄鉱と判定される。

B．加熱変化

加熱による変質鉱物として、酸化鉄の生成が認められる。各試料の表面から0.3㎜の間および中心部の穴から0.4㎜の間は変色が著しく、濃褐色から褐色に変化し、漸次淡色化する現象が認められる。

C．黒色物質

観察した玉の表面は、光沢を有する黒色である。研磨薄片の観察では、試料番号3で局部的に長さ0.3㎜、厚さ0.02㎜の黒色膜状となる部分が認められるが、全般にわたるものではない。膜状の物質は、反射顕微鏡下の観察で、グラファイト（石墨graphite）と判定される。

(4) 考察

玉は、いずれも細粒の土製で、成形後に焼成された様子が認められた。また、各試料の表面には、加熱による変色が認められる。この種の変色は、本来粘土中に非晶質の水酸化鉄として含まれる成分が加熱により脱水し、赤鉄鉱化したために生じたと考えられる。実験的には、原土中の含水酸化鉄を加熱すると320 ～350 ℃で脱水し、赤鉄鉱に転移することが知られている。現象的には、酸化鉄は焼成物中の粘土粒子間を充填する微細な赤鉄鉱として存在するようになり、赤色化の原因となる。反射顕微鏡下の観察では、きわめて微粒で明瞭に赤鉄鉱と同定されるものは少ない。焼成温度が低いために、結晶化があまり進んでいないためと考えられる。

また、各試料の表面は光沢を有する黒色である。黒色部分は、顕微鏡観察で玉の本体と密着している状態を示し、焼成時に生じたものと考えられる。焼成後に漆などを用いて塗布した形跡は見られない。玉表面の黒色物質は膜状部を含めて焼成の最終段階で不完全燃焼による煤が膠着したものと推定される。

粘土鉱物となるセリサイトは、鉱物学的には白雲母と同質の鉱物であるが、素地を構成する微細な鱗片状粘土鉱物に対して用いられている。セリサイトは高温焼成で加熱変化を受けやすく、X線回折試験では900 ℃前後で非晶質化する性質を有している。しかし、試料中のセリサイトは、その光学性が保持したまま残存し、加熱変化を受けていない。したがって、本試料の加熱温度は900 ℃以下である。赤鉄鉱の晶出状況が比較的低温状態であることを考慮すると、400～500 ℃程度と推定される。

3　ガラス製玉類の素材について

(1) 試料

試料は、3号墳から出土したガラス製玉類3点である。各試料の詳細は第5表に示した。

番号	試　料　名	報告番号	登録番号	色
4	ガラス 製丸玉	２００	９－３	紫紺色
5	ガラス 製丸玉	１９９	７－２	紫紺色
6	ガラス 製管玉	１９７	１０－７	濃緑色

第5表　ガラス製玉類の試料一覧

(2) 分光方法

蛍光X線分析装置（理学電気工業製RIX1000）におけるオーダー分析を適用し、非破壊で構成元素及びその概略の含有量を求める。この方法は試料にX線（一次X線）を照射し、含有される元素が発する固有X線（二次X線）を測定することにより、その成分を知ろうとするものである。以下に分析条件を記した。

A．装置

理学電機工業製：RIX1000（PF法のオーダー分析プログラム）

B．試料調整

試料を超音波洗浄機を用いて洗浄し、105℃で2時間乾燥させた後、塩化ビニルで作成した試料ホルダーに固定した。試料ホルダーに使用した塩化ビニルには不純物としての極微量のスズ(Sn)と鉄（Fe）が含まれていた。そこで、測定スペクトルにバックグラウンド補正をすることによって、不純物のスペクトルを補正した。

C．測定条件

X線管：Cr（50Kv-50mA）

分光結晶：LiF,PET,TAP,Ge

検出器：F-PC,SC

番号	Si02	Al203	Fe203	Ti02	Mn0	Ca0	Mg0	Na20	K20	P205	S03	Co203	Cu0	Sr0	Zr02	Pb0
4	77	6	2	0.2	0.2	7.2	2.9	1.4	1.6	0.1	0.4	0.1	0.2	0.1	0.1	0.2
5	74	4.8	1.6	0.2	0.2	8.4	3.5	2.5	3.4	0.2	0.4	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
6	69	12	2.1	1.2	0.1	2.1	0.6	6.5	4.3	0.2	0.2	0	1.1	0	0.2	0.2

第６表　ガラス製玉類のオーダー分析結果　（単位：wt%）

Ｄ．分析結果

結果を第6表に示す。紫紺色を呈する試料番号4・５のガラス製丸玉と、濃緑色を呈する試料番号６のガラス製管玉の化学組成には相違が認められた。特に紫紺色を呈する試料番号４・５のガラス製丸玉では着色剤として青色を呈する銅（CuO）が約0.2％検出されたほか、紫色を呈するコバルト（Co203）、マンガン（MnO）がそれぞれ0.1％、0.2％検出された。これに対して濃緑色を呈する試料番号６のガラス製管玉においては銅(CuO)の含有率が1.1％と高く、コバルト(Co203)、マンガン（MnO)は極微量であった。

Ｅ．考察

ガラスは主原料であるケイ酸原料に融けやすくしたり、固まりやすくしたりする融剤および着色剤を混合・調合し、溶融・冷却され製品となる。したがって、ガラス製品の組成の違いは原材料の違いを表し、材料産地の推定や当時のガラス製作技術なども推定することが可能となる。

日本にガラスが伝えられたのは紀元前２世紀頃とされる。遺跡から出土するガラス製品は、融剤に主として鉛を用いた鉛ガラス（鉛珪酸塩ガラス）とナトリウム・カリウム等アルカリ元素を用いたアルカリ石灰ガラス（アルカリ珪酸塩ガラス）に大別される。紀元前３世紀頃までに出現するガラスは例外的なものを除いて２種類の鉛ガラスと１種類のアルカリ石灰ガラスがある（肥塚、1994)。古墳時代に入ると鉛ガラスの出土が認められず、アルカリ石灰ガラスが主体となる。古墳時代中期後葉になるとアルカリ石灰ガラスの色が多様化し、古墳時代後期からは再び鉛ガラスも出土するようになる（山崎、1990)。また、出土する玉類の形態について、古墳時代後期には勾玉や管玉の出土例が少なくなる傾向があるとされる（伊藤、1991)。

曽祢崎３号墳出土のガラス製玉類は、いずれも主成分であるケイ酸(SiO2)が約70％含まれており、鉛(PbO)が約0.2％であることからアルカリ石灰ガラスであることが明らかである。アルカリ石灰ガラスはさらにカリ石灰ガラスとソーダ石灰ガラスとに大別され、主として弥生時代にはカリ石灰ガラスが、古墳時代にはソーダ石灰ガラスが出土されている。３号墳出土のガラス製玉類はいずれもカリウム、ナトリウムの含有量に差が認められず、どちらに属するのかは不明である。

一方、今回のガラス製玉類は、紫紺色と濃緑色の２種類があり、分析結果から両者で融剤、着色剤の材質・量比が異なることが推察される。とくに、濃緑色の原因物質は特異な化学状態にある銅であると考えられるが、詳細は不明である。

玉類などのガラス製の遺物については試料が小さく、また、遺物価値が高いことから、従来用いられていた破壊分析が困難であったために詳細な科学分析の結果が蓄積されていない。そのため、まだ不明な点が多く残されている。しかし、蛍光Ｘ線分析によるオーダー分析は、非破壊で構成元素およびその概略の含有量を知ることができるため、今後積極的にデータを蓄積し、古代ガラスの実態を明らかにしたい。

４．琥珀製棗玉の素材について

Ａ．試料

３号墳から出土した琥珀製棗玉１点である。試料の詳細は第７表に示した。

番　号	試料名	報告番号	登録番号
8	琥珀製棗玉	１９８	７－７

第７表　赤外線吸収スペクトル測定試料

Ｂ．分析方法

琥珀製品をメノウ乳鉢で微粉砕（200メッシュ以下）し、KBr 錠剤法により以下の条件で赤外線吸収スペクトルを測定した（山田、1980)。

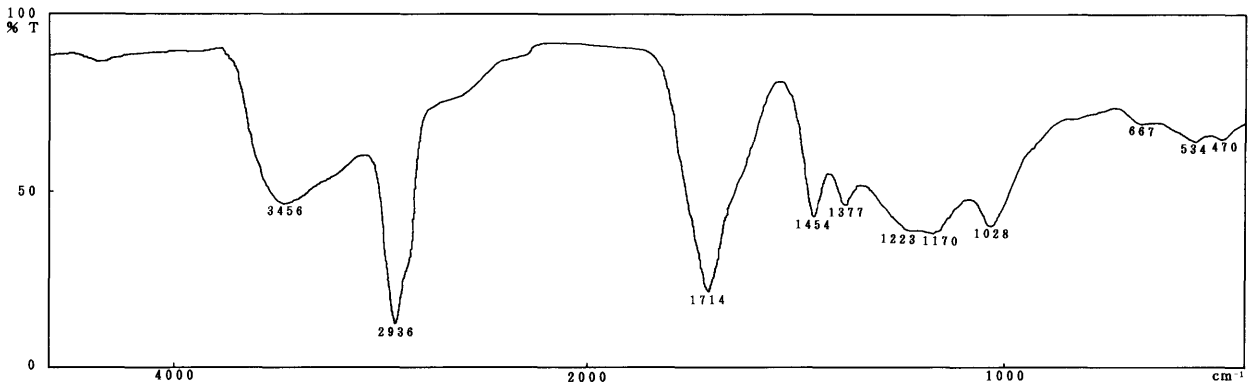
装置：島津製作所製　FTIR-8100A

測光値（Measuring　mode）：％T

分解能（Resolution）：4.0 cm^{-1}

積算回数（No.of　Scan）：40 回

ゲイン（Gain）：自動



第30図　琥珀製棗玉ＩＲスペクトル

ミラー速度（Detector）：2.8mm/sec

アポダイズ関数（Apodization）：Happ−genzel

測定範囲：4600～400cm⁻¹

測定方法：KBr錠剤法

D．結果

赤外線吸収スペクトルの測定結果を図30に示す。曽祢崎３号墳より出土した琥珀製品は、3456cm⁻¹付近近のOH基伸縮振動の幅広く強い吸収、2936 cm⁻¹付近のＣ－Ｈ基伸縮振動の鋭く強い吸収、1714cm⁻¹付近のＣ＝Ｏ伸縮振動による鋭く強い吸収、1454、1377cm⁻¹付近のC−H基変角振動の鋭い２つの吸収、1170cm⁻¹付近のC−O伸縮振動による比較的強い吸収と1170cm⁻¹付近の吸収にショルダーとして現れている1220～1240cm⁻¹付近の吸収のほか、1028cm⁻¹のやや弱い吸収によって特徴づけられる。

E．考察

科学的な手法による琥珀の産地同定は、藤永・竹中・室賀（1974）、室賀（1976）により赤外線吸収スペクトル測定が有効な手段であることを報告している。これは、日本産の琥珀（加工して製品化が可能な産出地で、現在わかっている範囲の産出地；北海道石狩地方・岩手県久慈市・福島県いわき市・千葉県銚子市・岐阜県瑞浪市）の赤外線吸収スペクトルがそれぞれ特徴的な吸収パターンを示すことから推定している。遺物を対象とした報告事例としては、室賀・竹中（1988）、五味・野代（1994）などがある。

今回の吸収パターンは、室賀（1988）でグループ分けされたＡグループの吸収パターンに類似している。このことは、Ａグループに特徴的に認められる1170cm⁻¹付近にあらわれる飽和飽脂肪酸エステルのC−O伸縮振動の高波数側（1220～1240）にショルダー状の弱い吸収が認められることからも確認される。したがって、今回の試料は赤外線吸収スペクトルの吸収パターンだけでみれば、いずれも岩手県久慈産の可能性が示唆される。しかし、五味・野代（1994）で指摘される琥珀の同一産地における出土層位の違いによる問題、測定機種の違いによる部分的吸収パターンの問題等が残るため、現時点では断定できない。今後、産地・出土層位が確認されている琥珀の赤外線吸収スペクトルデータを同一機種、同測定条件で収集し、吸収パターンの分類をさらに細かく把握したい。

〔引用文献〕

・藤永太一郎・竹中亨・室賀照子「本邦出土琥珀の産地分析－赤外線吸収スペクトルによる研究－」（1974、日本化学会誌、9 p 1653～1657）

・五味信吾・野村幸和「山梨県北巨摩郡大泉村甲ツ原遺跡出土琥珀の産地同定（1）－赤外吸収スペクトル分析－」（1994、『山梨県立考古博物館・山梨埋蔵文化財センター研究紀要10』p 27～46）

・肥塚隆保「古代ガラスの材質」（1994、『第９回「大学と化学」公開シンポジウム　古代に挑戦する自然科学　予稿集』p 28～30）

・室賀照子「赤外吸収スペクトルによる琥珀の産地分析」（1976『考古学と自然科学　9』p 59～64）

・室賀照子・竹中亨「奈良県曽我遺跡および御坊山古墳出土琥珀の産地同定」（1988、『由良大和古代文化研究会紀要１』（p 111～117）

・伊藤雅文「玉類」（1991、『古墳時代の研究８古墳Ⅱ副葬品』雄山閣、p 111～116）

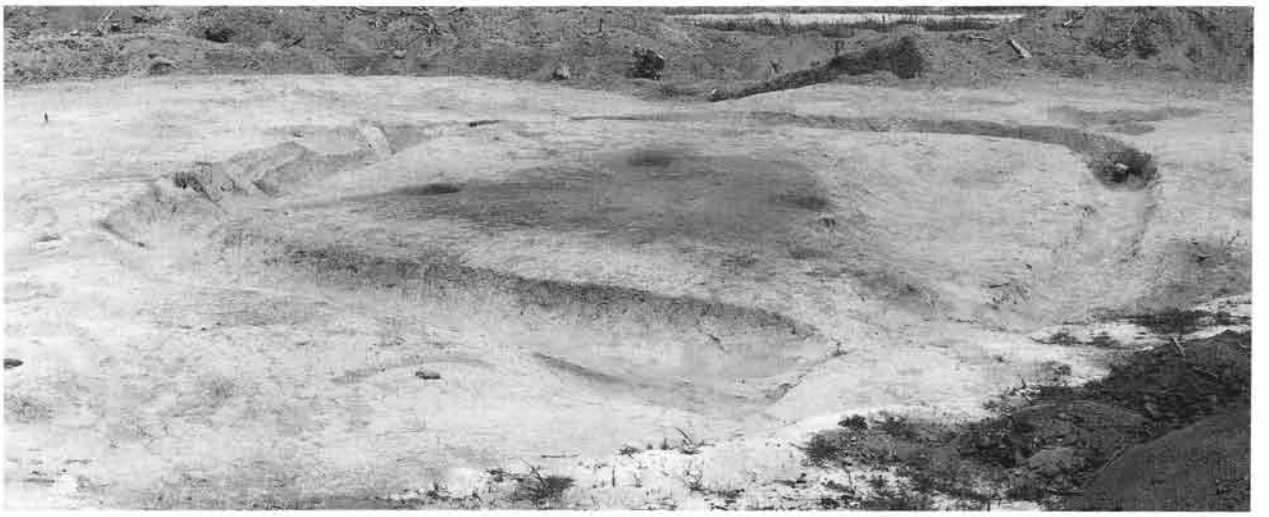
・理学電気工業「蛍光Ｘ線分析におけるオーダー分析の原理と応用」（『APPLICATION REPORT, XRF065』p 8）

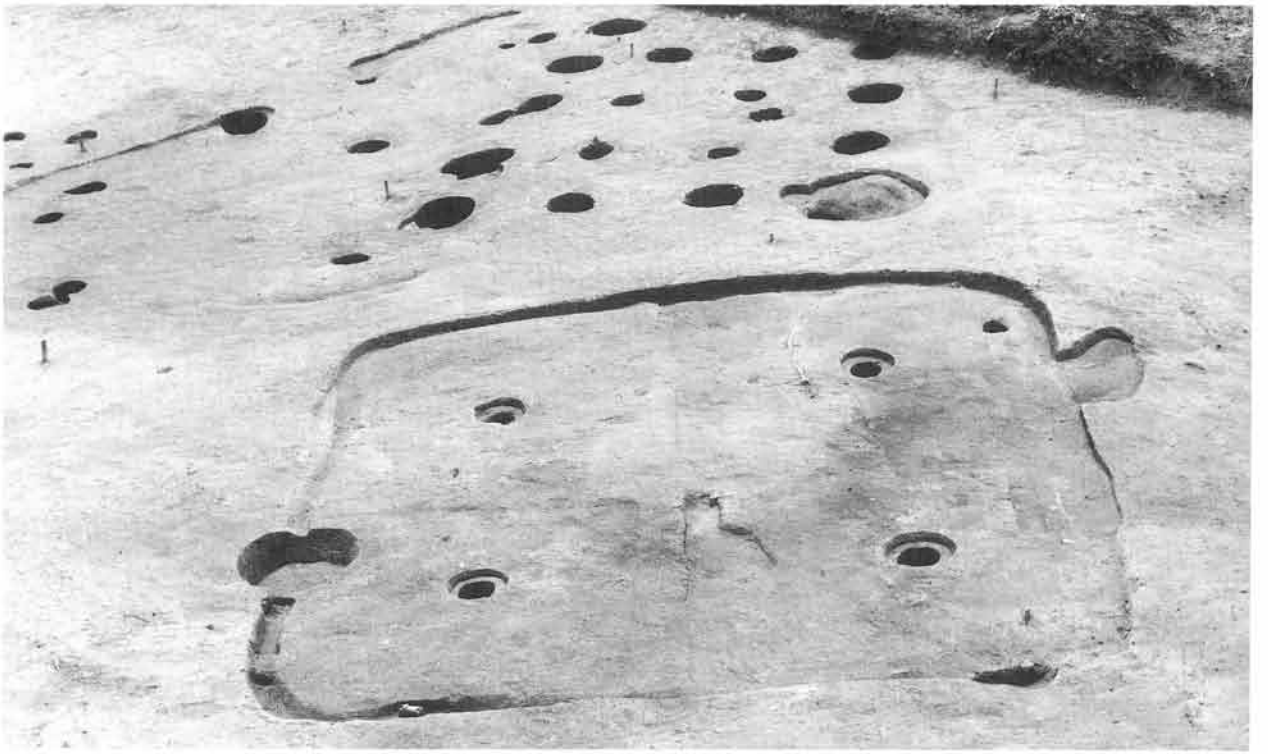
・富沢威「古代ガラスの化学」（1986、『続考古学のための化学10章』東京大学出版会）

・山田富貴子「赤外線吸収スペクトル法」（1980、『機器分析のてびき１』化学同人、p 1～18）

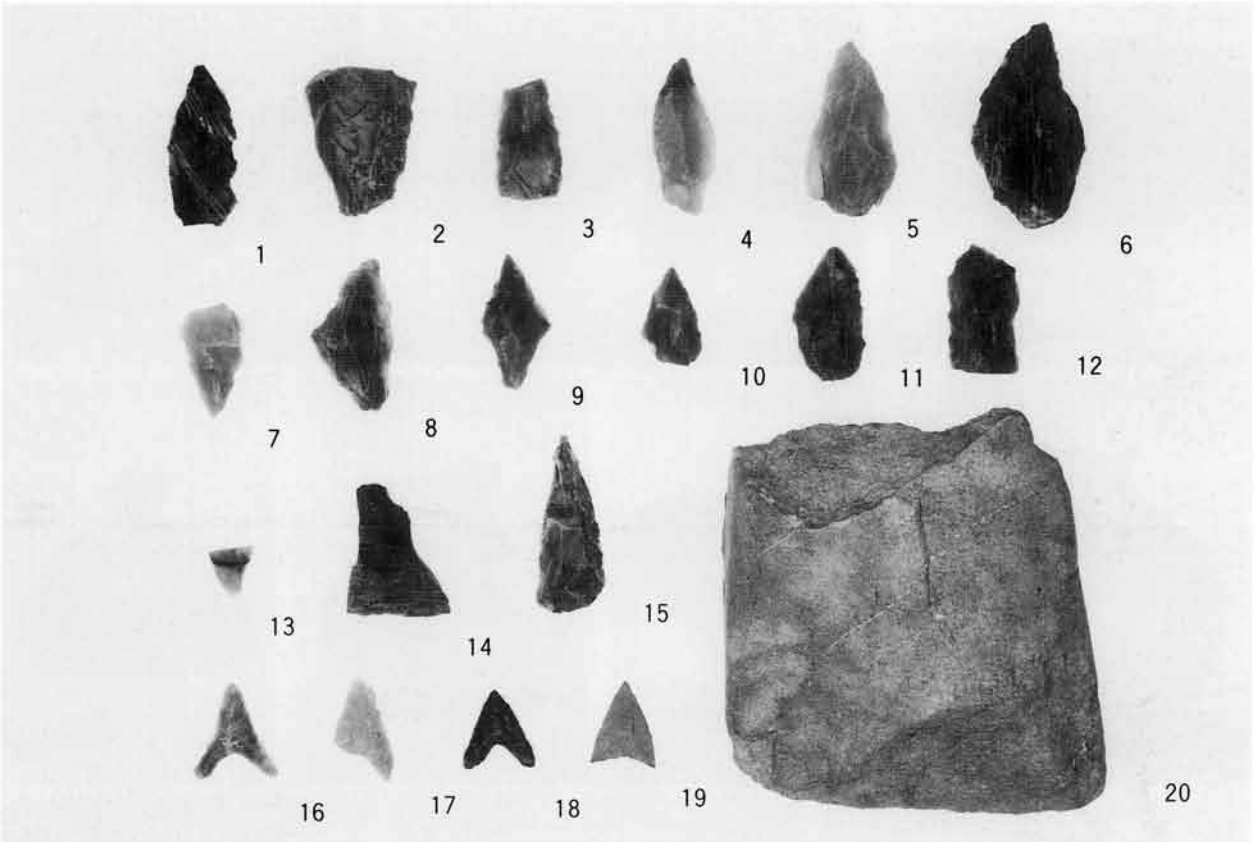
・山田一雄「日本出土のガラスの化学的研究」（1990、『古文化財の化学』思文閣出版、p 274～300）

図版１

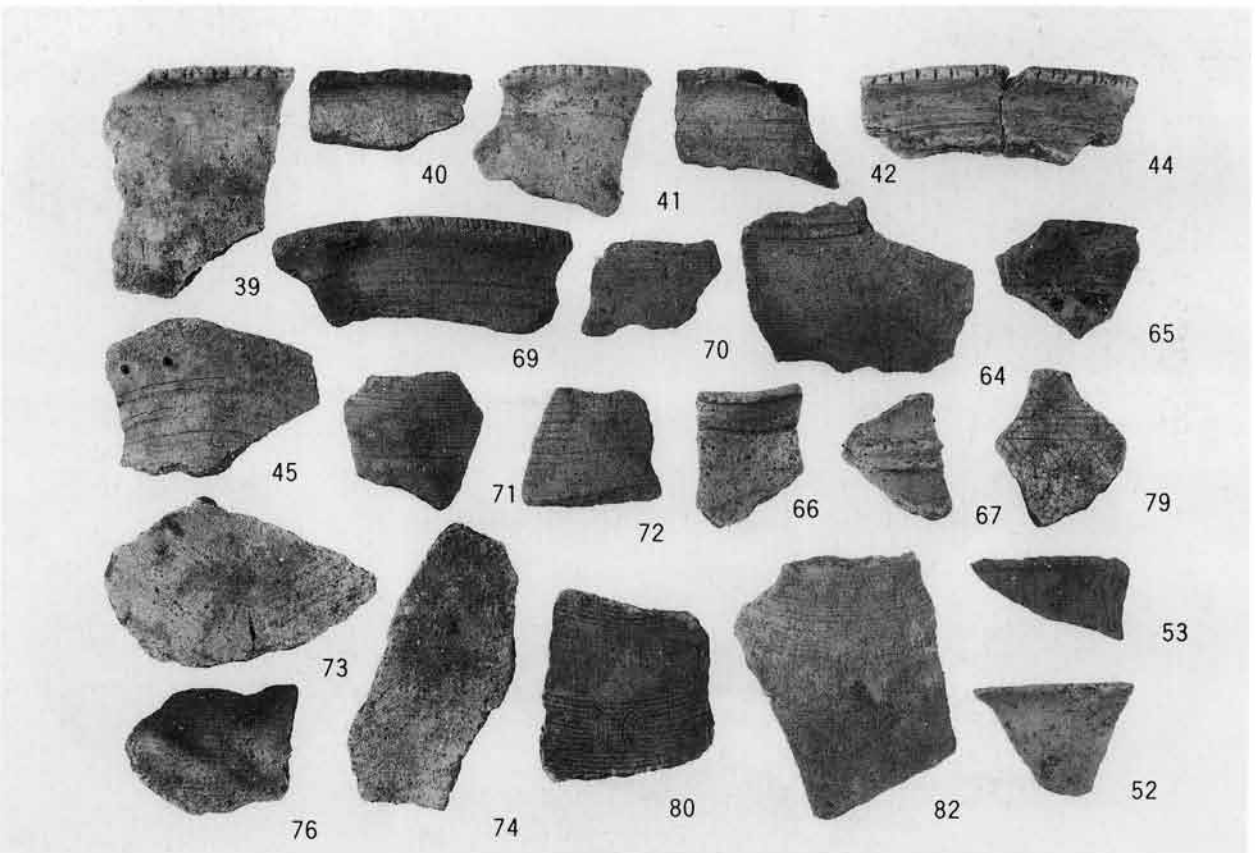




上から　ＳＸ22、ＳＸ23、ＳＨ６・ＳＫ９・ＳＢ４・ＳＢ５



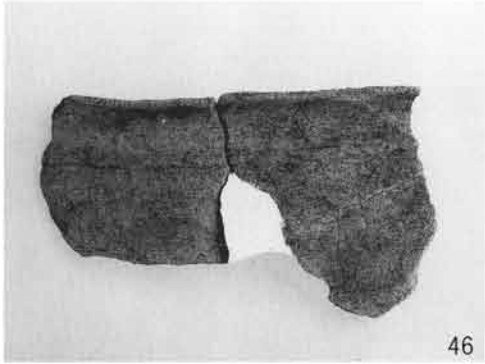
旧石器時代・縄文時代の遺物



弥生時代前期～中期の遺物

図版 3

38


46

32

21

26

27

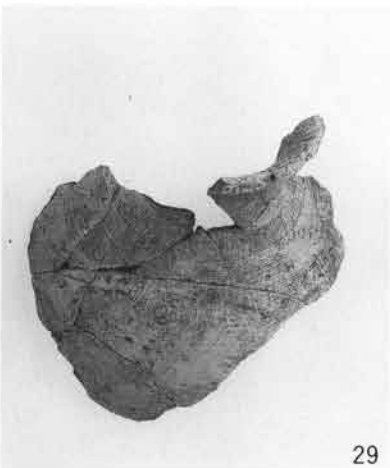
28

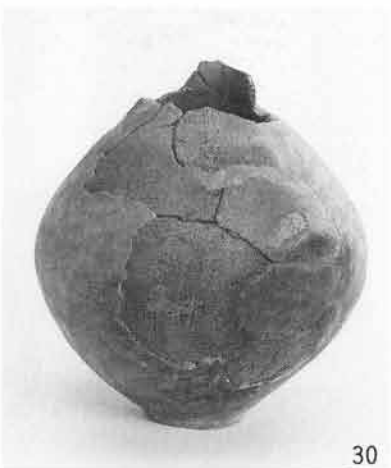
22

23

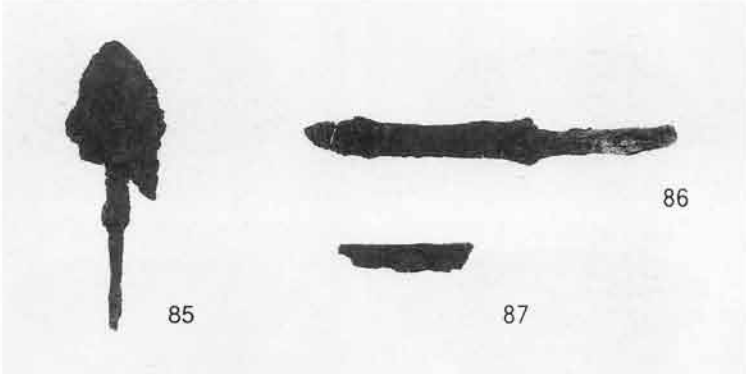
25

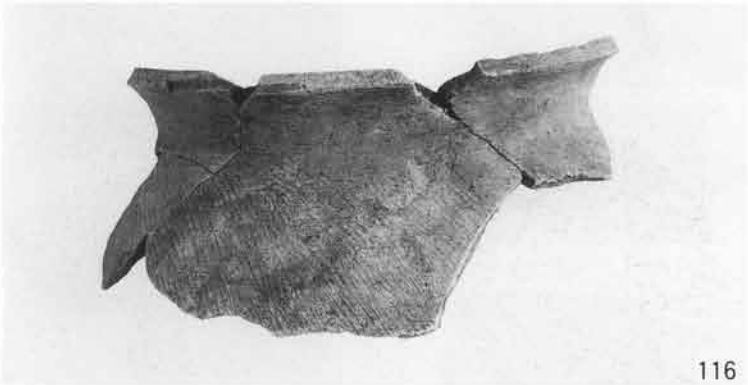
24

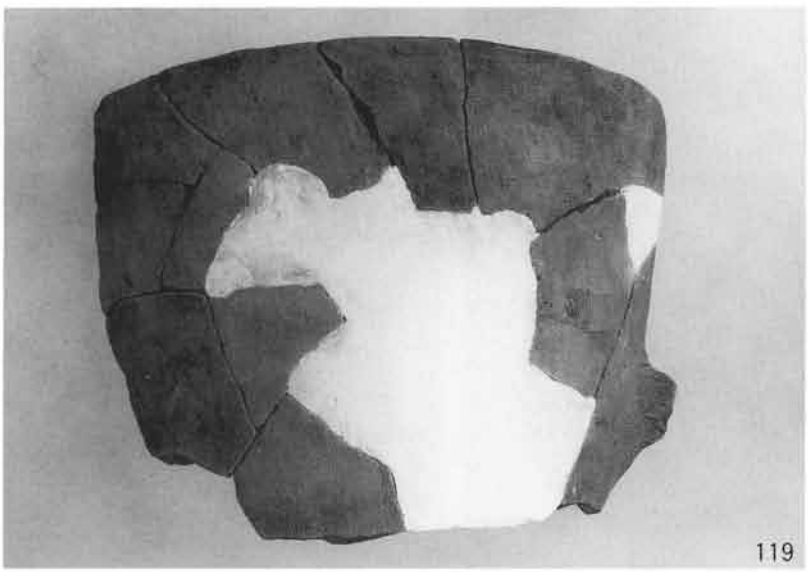

29


30

弥生時代前期・後期の遺物







1 号墳出土遺物

図版 5

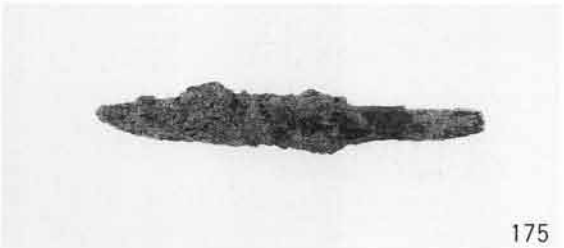
3 号墳埋葬施設 1 ・ 2 出土遺物

142～144

145

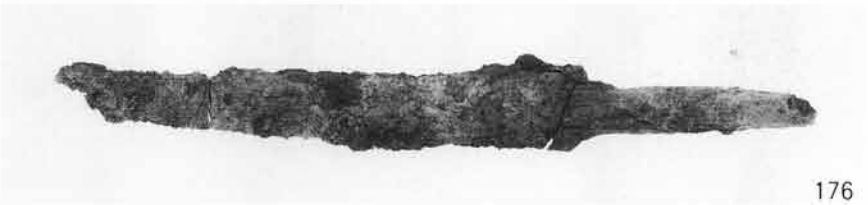
146

147


175

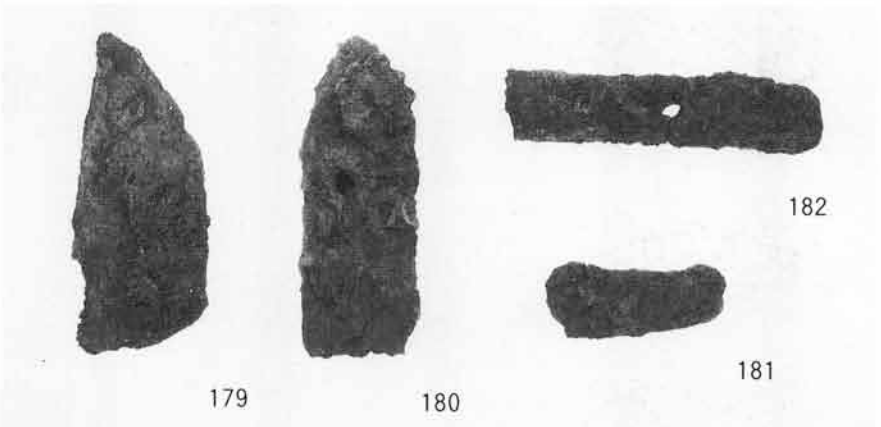
173

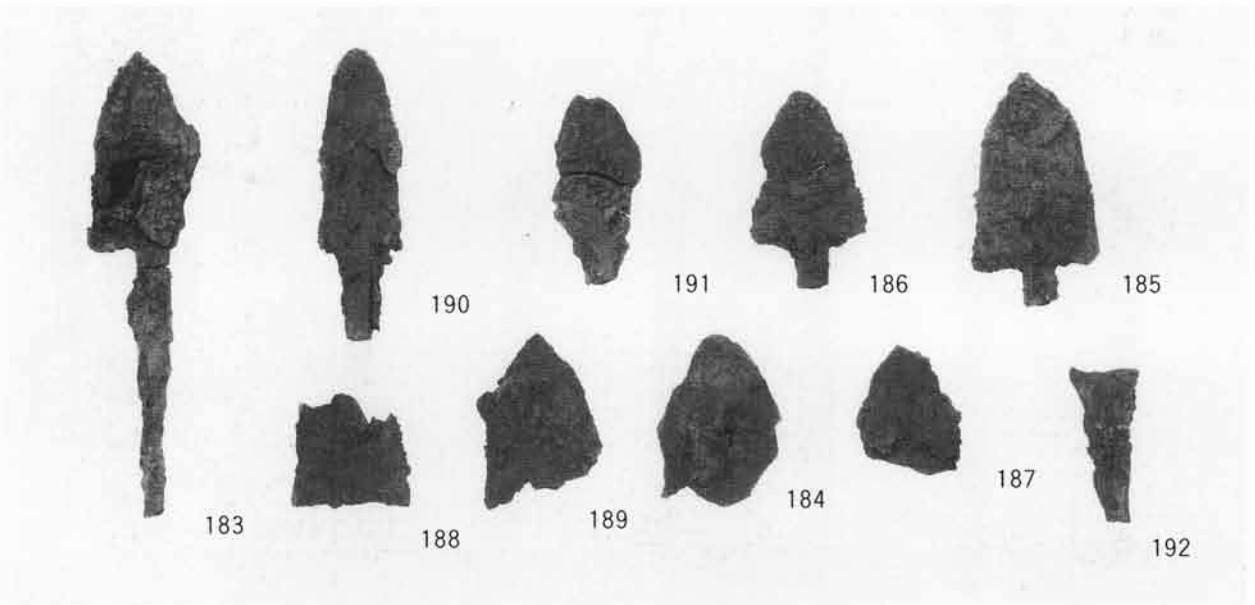
174


176

177

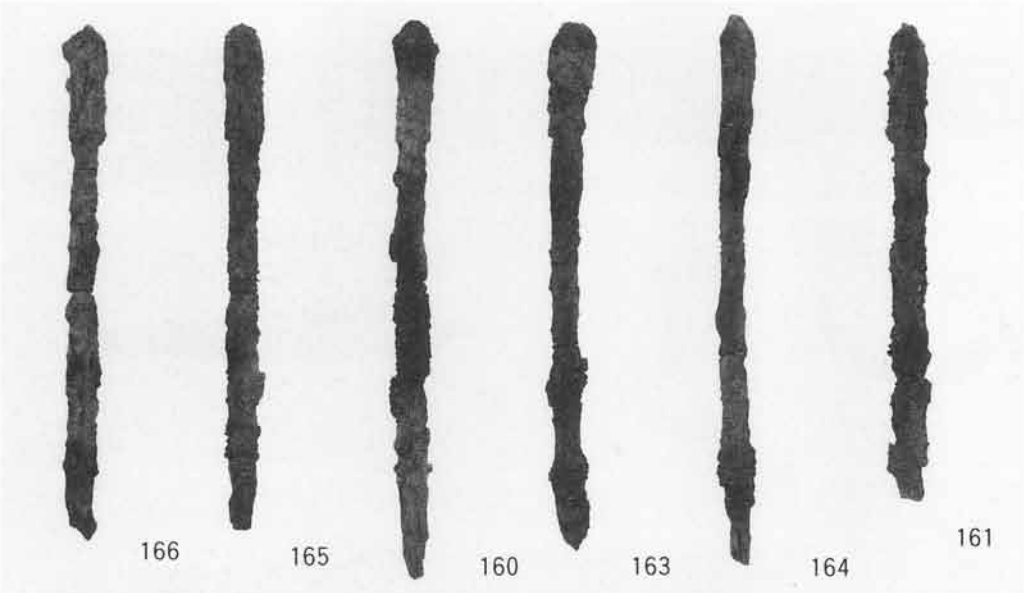
178

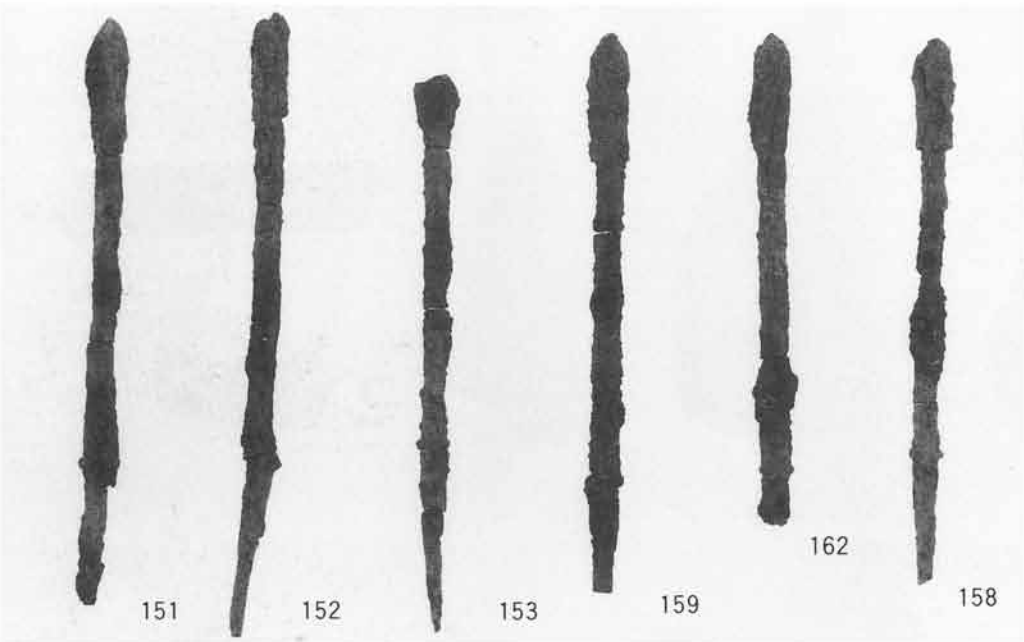

179
180
181
182

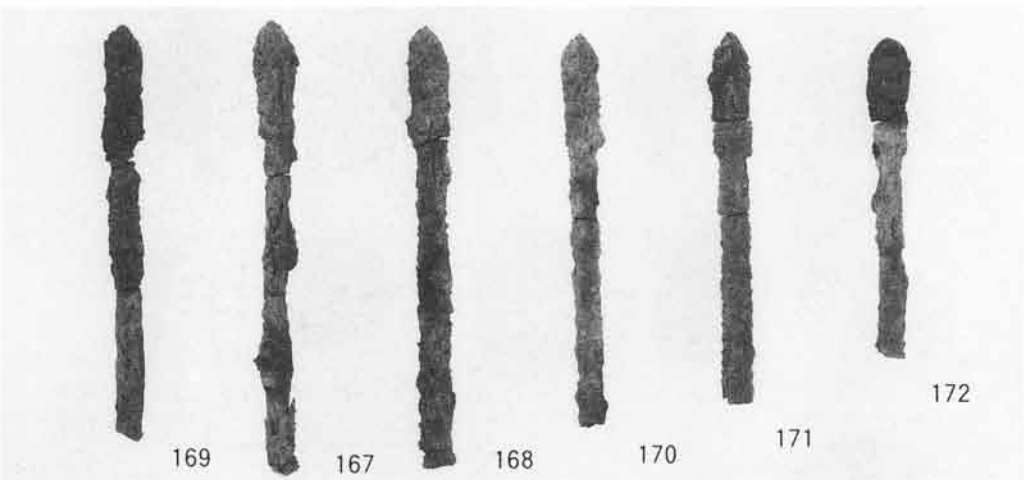

183
190
188
189
191
184
186
187
185
192

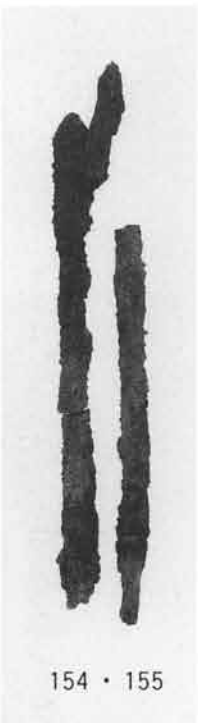
3 号墳出土鉄製品（1）

図版 7









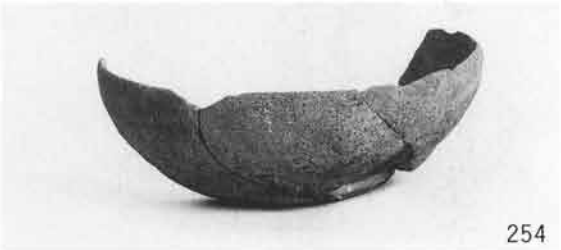
3号墳出土鉄製品（2）

249

250

251

252


254

255

256

3 号墳甕棺墓・「方形部」出土遺物

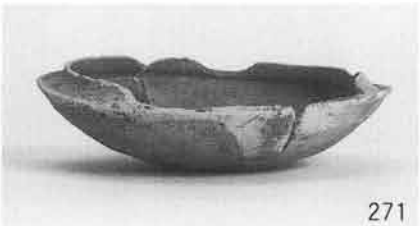
図版 9

261

270

276

264


271

283

266

272

281

282

284

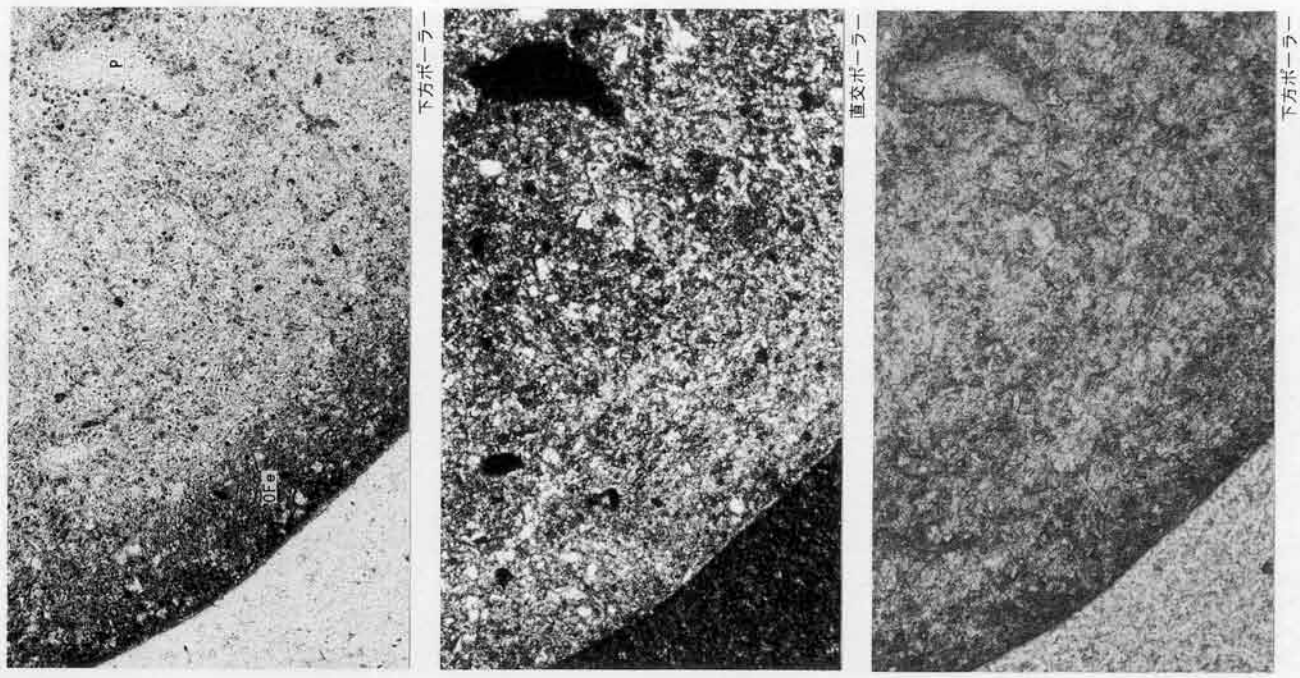
300

298

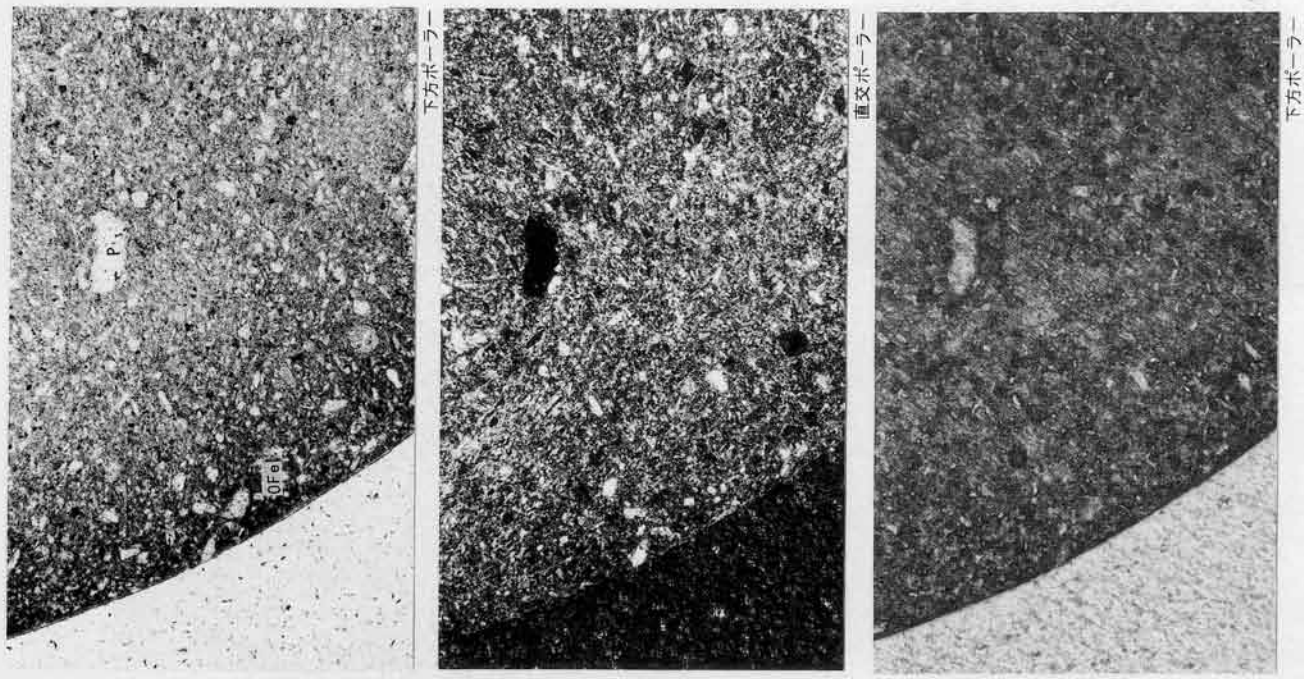
301

3号墳墳丘・周溝、その他遺構出土遺物

図版 10

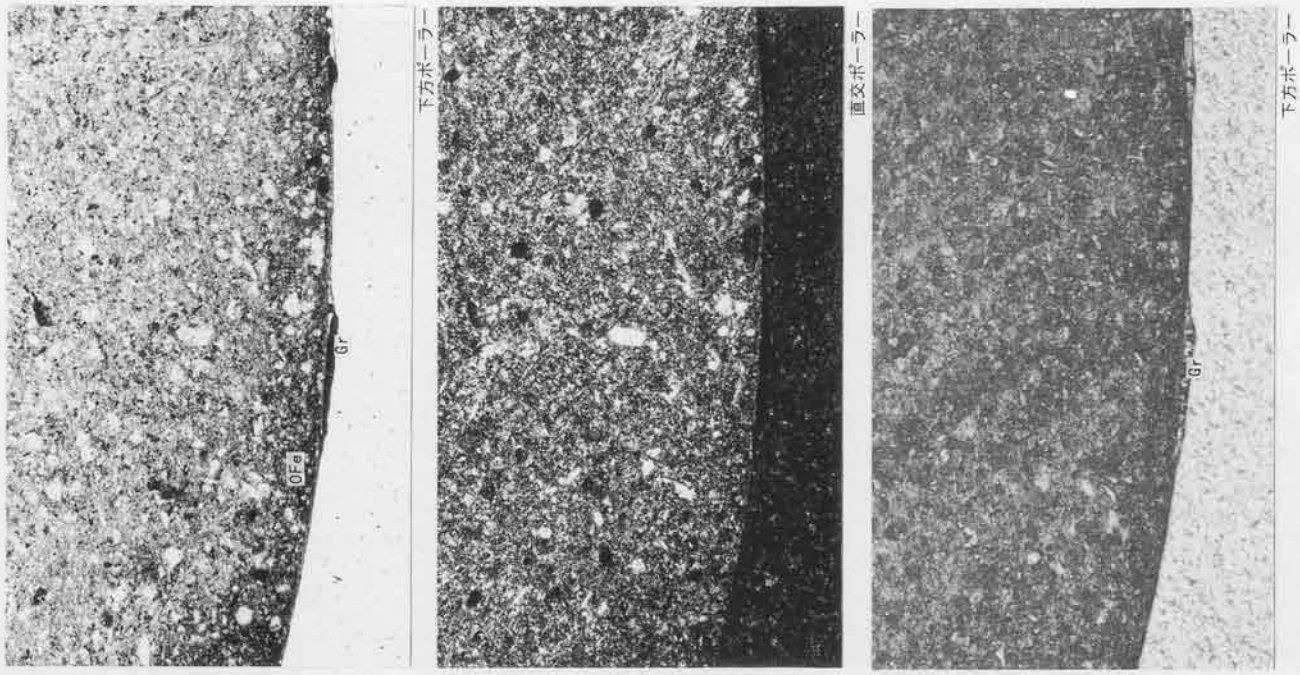


試料番号 1

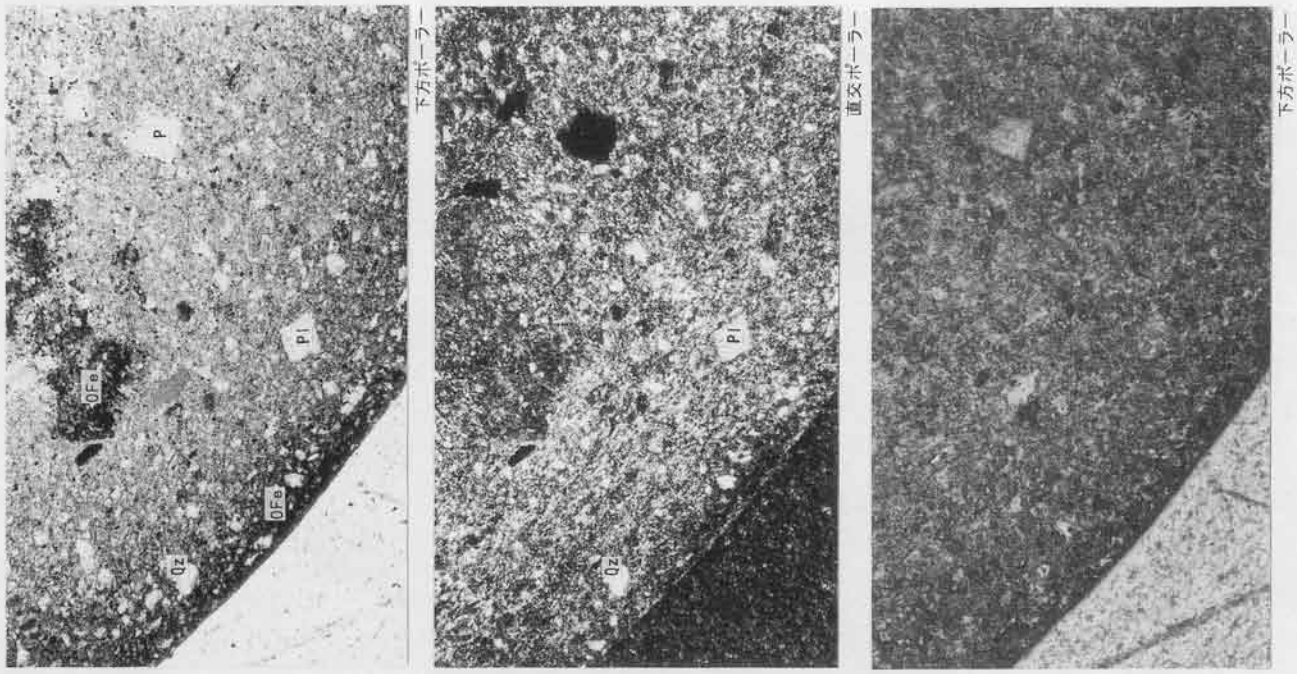


試料番号 2

図版 11



試料番号 3



試料番号 3

角垣内遺跡

1　はじめに

当遺跡は県営ほ場整備事業に伴って実施された埋蔵文化財分布調査で発見された。試掘調査は平成7年3月と同年11月に実施し、明和町蓑村集落の北側にある水田に、約2,700㎡にわたって平安時代から鎌倉時代にかけての集落跡が広がっていることが確認された。行政上の地名は、多気郡明和町蓑村字角垣内である（第31図参照）。

今回の調査は、ほ場整備事業によってやむをえず遺構が破壊されることになった排水路工事部分約30㎡を対象とした立会調査で、平成8年7月18日に実施した。

2　遺構と遺物

遺構検出は、厚さ約30cmの耕作土直下にある砂混じり黄褐色粘土層の上面で実施した。検出面上面の標高はほぼ15.0mである。検出された主な遺構は、井戸1基、土坑1基、溝4条、柱穴と思われるピットが2つである。これらの遺構の埋土は黒色粘質土であった。

出土遺物量は整理用コンテナバット約1箱分で、大半が平安時代末葉から鎌倉時代初頭にかけての土師器類である。

(1)　井戸

ＳＥ４　調査区のほぼ中央で検出されたの素掘りの井戸で、平面形は直径95cmの円形である。検出面より80cm程掘り下げた時点で、それ以下は工事による破壊を免れると判断して掘削作業を断念した。出土遺物量は整理用コンテナバットに半分程で、土師器鍋（２～４）が大半を占める。これらの土師器鍋は完形に近いものが潰れた状態で重なるように埋まっていたが、丁寧なとりあげを怠ったため、ほとんど接合できなかった。なお、破片であるが、平底の須恵器甕、山茶椀も数片出土している。５は藤澤良祐氏の山茶椀編年の第４型式[1]に相当する山茶椀で、猿投窯産と思われる。

(2)　土坑

ＳＫ３　調査区中央やや北よりで検出された。調査区外へのびるため全体の形は不明であるが、100cm×50cm程度の楕円形の土坑と思われる。検出面からの深さは最深部で15cmである。遺物はＳＥ４と同時期のものと思われる土師器鍋の小片が少量出土したのみである。

(3)　溝

ＳＤ１　調査区の北端近くで検出された溝で、西南西から東北東へのびる。幅は70cm～80cmで、検出面からの深さは約20cmである。遺物は土師器鍋（１）や藤澤良祐氏の山茶椀編年による尾張型第５型式と思われる山茶椀の小片が少量出土している。

ＳＤ２　ＳＤ１の南側で検出された溝で、ＳＤ１にほぼ平行してのびる。幅は50cm程で、検出面からの深さは２～３cmである。土師器鍋の小片が少量出土した。

ＳＤ６　ＳＥ４の北側で検出された溝で、ＳＤ１やＳＤ２とほぼ平行している。幅は50cm程で、検出面からの深さは約10cmである。出土遺物はない。

ＳＤ７　調査区の南端近くで検出されたほぼ東西方向にのびる溝である。幅は20cm程で、検出面からの深さは約10cmである。出土遺物は無い。

(4)　ピット

pit 5　ＳＥ４の南方で検出された円形のピットで直径30cm、検出面からの深さ約20cmである。ＳＥ４出土のものとほぼ同時期と思われる土師器小皿・鍋の小片が少量出土した。

pit 8　ＳＤ２の南方で検出された円形のピットである。直径25cmの掘形の中で、直径15cm程の柱痕跡が認められた。柱痕跡の深さは検出面から約20cmである。出土遺物は無い。

3．まとめ

当遺跡が所在する明和町蓑村の周囲には６世紀中頃から８世紀にかけての土師器焼成坑が400基以上も検出されており、当時としては全国でも有数の土

師器の大生産地であった。[2] また、中世においては、南伊勢系土師器とよばれる独特の器形と胎土をもつ皿・鍋等の土師器の主要生産地であった考えられている。[3] 蓑村地内には、現在も伊勢神宮へ納めるための土師器を生産している神宮土器調整所がある。

このように、当遺跡が所在する地域一帯は古墳時代後期から現在まで、連綿と土師器の主要生産地として特有の歴史を歩んできた地としてほぼ間違いないと思われるが、平安時代以降のこの地域内の土師器生産拠点や集落等の実態はまだまだ不明な点が多い。

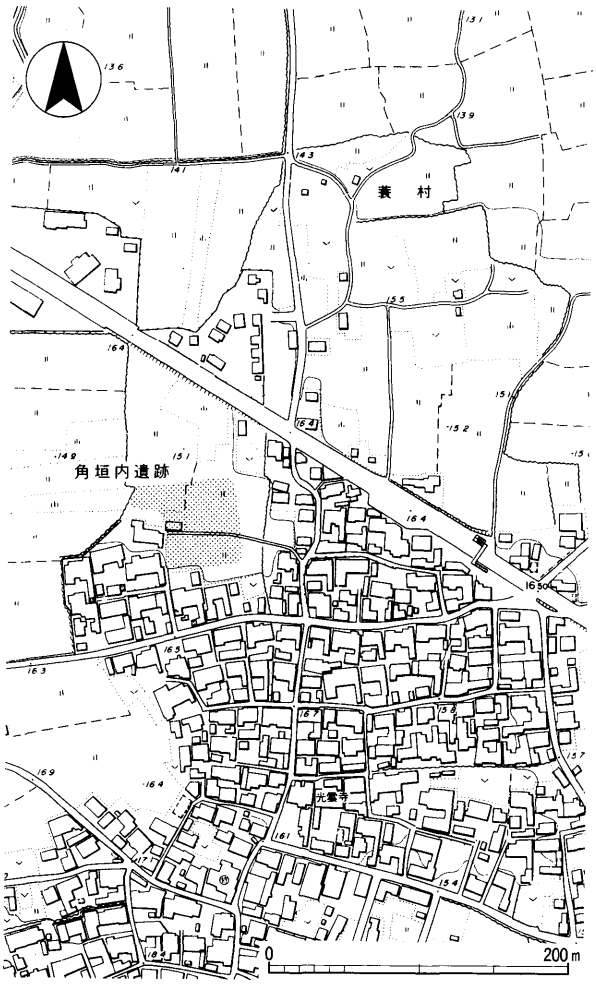
今回の調査面積は極めて狭いものであったが、平安時代末葉から鎌倉時代初頭にかけての井戸や掘立柱建物の一部と推定できる柱穴等が検出されたことから、当該時期の集落の一端を検出できたことの意義は大きいと思われる。　　（前川嘉宏）

〔註〕

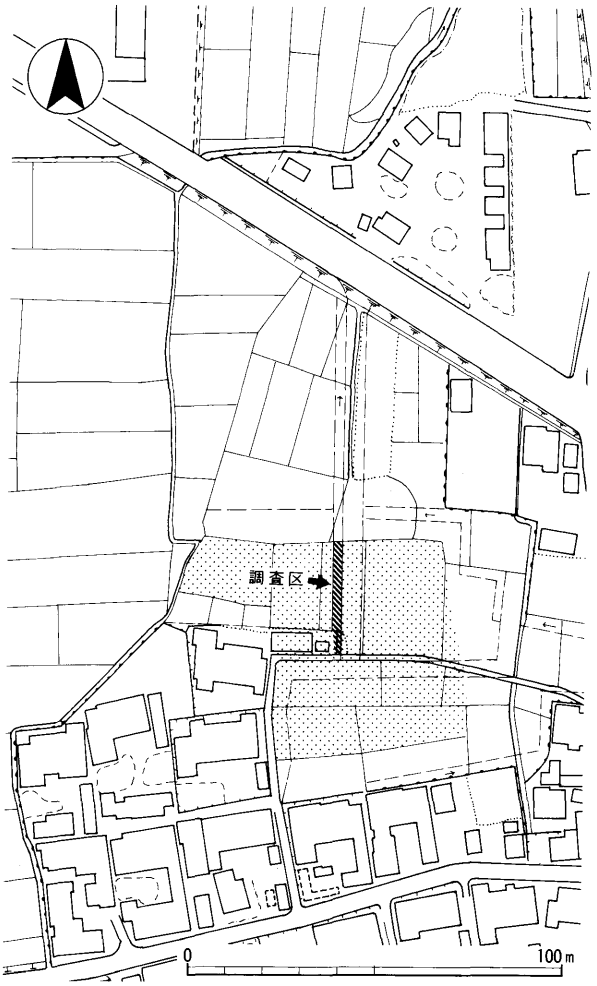
① 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第3号　三重県埋蔵文化財センター　1994

② 上村安生「斎宮跡の土器生産について－特に土師器生産についての予察－」『Mie history』vol.8　三重歴史文化研究会　1996

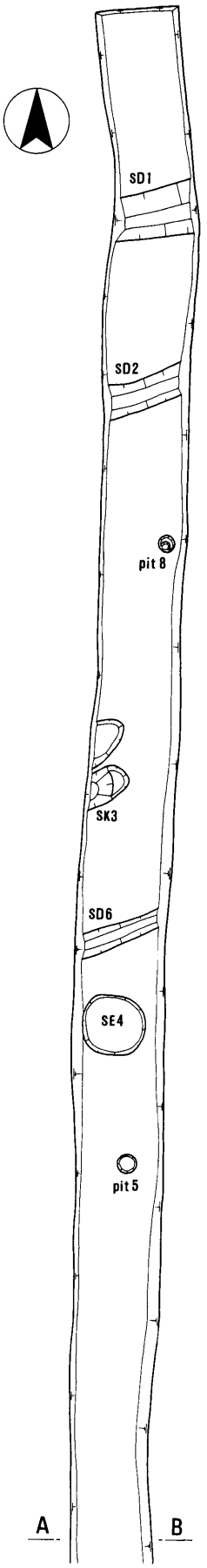
③ 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol.1　三重歴史文化研究会　1990

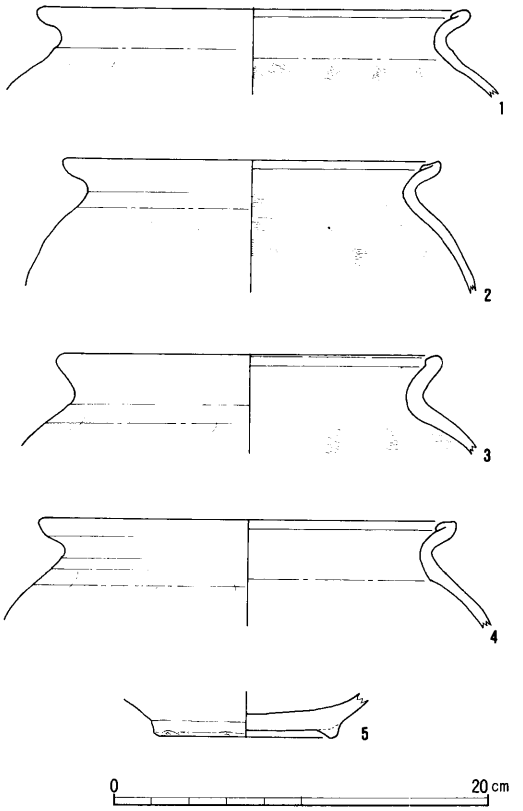


第31図　遺跡地形図（1：5,000）

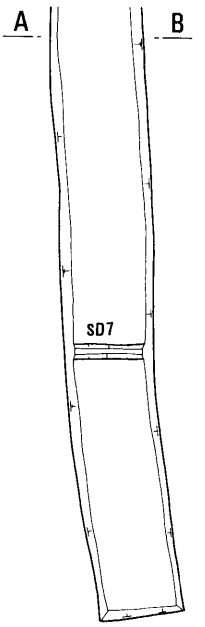


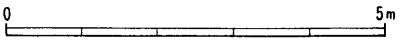
第32図　調査区位置図（1：2,000）





第34図　出土遺物実測図（1：4）





第33図　調査区平面図（1：100）

報告書抄録

ふりがな	そねざきいせき（だい2じ）・そねざきこふんぐん
書名	曽祢崎遺跡（第2次）・曽祢崎古墳群
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	146－3
編著者名	西村美幸・前川嘉宏
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－03 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 05965－2－1732
発行年月日	西暦1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
そねざきいせき 曽祢崎遺跡 そねざきこふんぐん 曽祢崎古墳群	たきぐんめいわちょううえのあざそねざき 多気郡明和町上野字曽祢崎	24442	228 525 527	34° 32′ 00″	136° 38′ 40″	19960508 ～ 19960628	1,300	平成8年度県営ほ場整備事業（明星地区）
すみがいといせき 角垣内遺跡	たきぐんめいわちょうみのもらあざすみがいと 多気郡明和町蓑村字角垣内	24442	—	34° 31′ 00″	136° 37′ 45″	19960718	30	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
曽祢崎遺跡 曽祢崎古墳群	集落跡・古墳	旧石器時代 弥生時代 古墳～奈良	方形周溝墓・古墳・竪穴住居・掘立柱建物	ナイフ形石器・弥生土器 土師器・須恵器・玉類 鉄製品	弥生前期中段階土器、曽祢崎3号墳からは豊富な鉄製品が出土
角垣内遺跡	集落跡	平安～鎌倉	井戸・土坑・溝	土師器・山茶椀	

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年7月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 146－3

曽祢崎遺跡（第2次）・曽祢崎古墳群

1997・3

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷者 東海印刷株式会社